

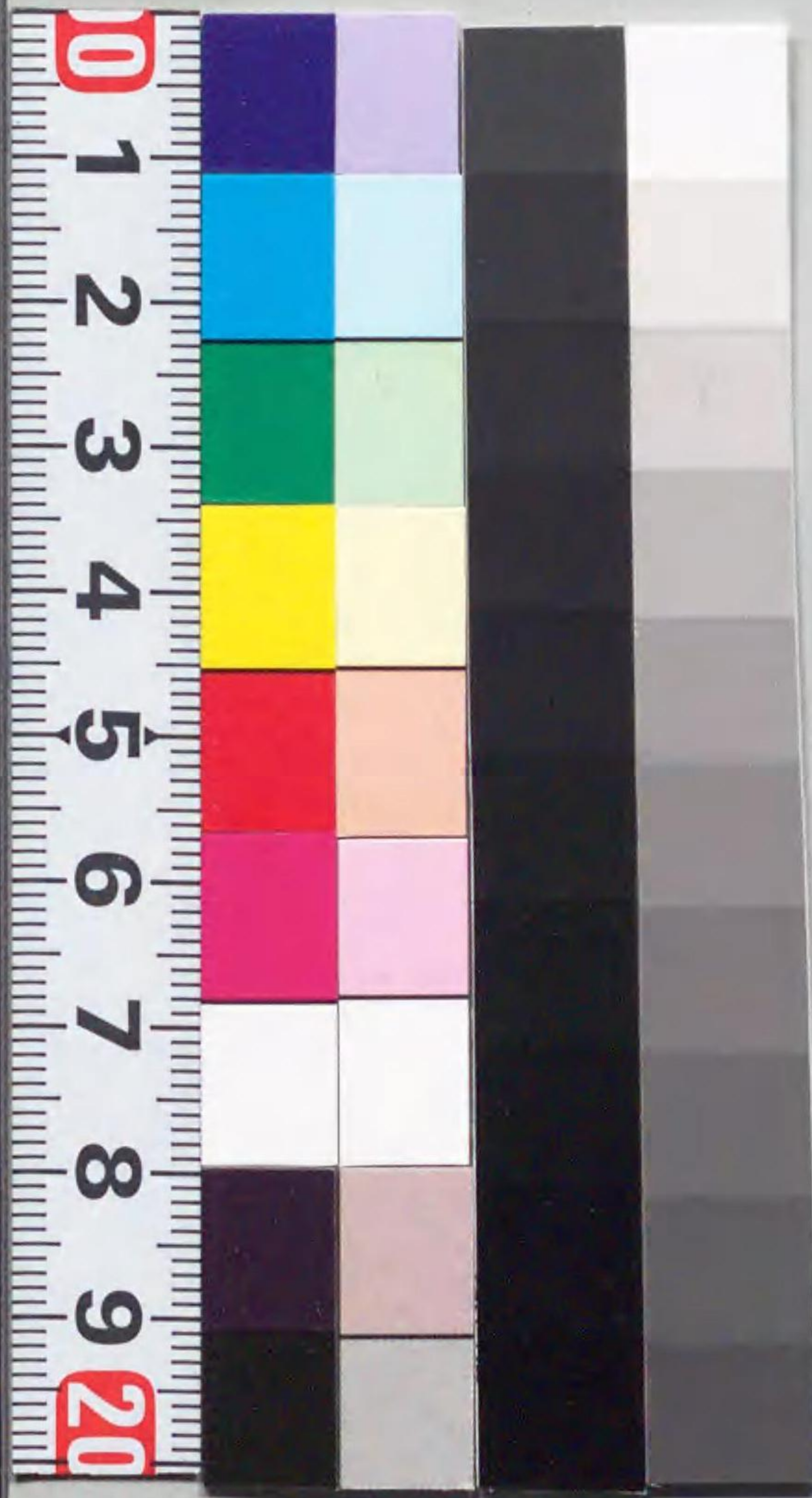
210.08
Ko5483



00712664

X

複写





ト工 75-8



國史叢書

評 文學博士
議 文學博士
員 文學博士

萩野由之 文學士
黑板勝美 文學士
松本愛重 文學博士
三宅米吉
黑川真道 編

朝鮮征伐記 一

國史研究會藏版

(順ハ口イ)

210.08
K054.83



712664

解題

朝鮮征伐記 十三卷

本書は豊臣秀吉が、朝鮮征伐の始末を詳細に記したるものなり。

内容は本朝近代の兵亂の概略より筆を起し、明智光秀が織田信長を弑し、秀吉之れを討伐し、遂に兵馬の權を掌握し、本題に入りては文祿元年朝鮮征伐の軍を起し、兵船の準備、軍勢の備定、諸軍の招集、軍勢の渡海、釜山、登萊、慶州、忠州等の合戦、都攻め、國王都落ち、兩王子生擒、平壤合戦、明使來朝、結局慶長三年總軍引揚げに至るまでの筋道を記し、猶其の間に於ける、大政所の病氣、近衛信輔の名護屋來著、大友波田の改易、瀨川采女正の妻の消息、秀吉吉野の花見、同高野山參詣、京・伏見の大地震、大佛鑄造、秀吉薨去等の出來事をも併せて記載せり。

解題

一

本書卷一に作者大關定祐の寛文五年の自序を掲げれば、編纂時代は知らるべく、また卷十三の卷尾には、作者が本書編纂の動機を記し、三十一歳の時秀吉の廟安國社に參詣せし時、此の時はや時移り世變りて、社殿荒廢、神樂殿、拜殿の如きは既に傾きつゝありて、修繕するものなし、これを觀たる作者感慨止み難く、秀吉が大勳を建てたる事蹟を末世に知らしめ、且は其の恩化を尊ばしめむとて、本書編纂を企てたるなりと記されたり。

作者大關定祐は、上杉家の遺臣にして、曾祖は宇佐美駿河守といひ、祖父は宇佐美民部少輔といふ、共に世に知られたる武士なり。定祐は軍學に達し、又文筆を克くす。本書の外、川中島合戦辨論を著す。同書は予が別に編纂せる越後史集天の卷に採收す。惜むらくは傳記詳ならず。

本書同名異本あれば注意すべし。そは同名なる堀正意の九卷本と混ずればなり。堀正意の著せる朝鮮征伐記は、萬治二年の出版に依り、世に流布せられたり。大關氏の朝鮮征伐記は、寫本にて傳はれるを以て、世に稀なるものなり。されば予

が亡父眞頼本書の奥に記して云、

此の書全部十三卷朝鮮征伐記と題す、大關定祐の所撰なり、是より先堀正意の所撰の朝鮮征伐記あり、全部九卷板本なり、名同じくして物異なり、因て是を大關本と云ひ、彼を堀本と云ひて以て別つ。 黒川眞頼

と記して、注意せられたり。

本書黒川藏古寫本を以て採收す。

大正五年十二月

黒川眞道識

例言

- 一、原本十三卷なるも、本編には九卷迄を收め、十卷以下は之を後編に收む。
一、語尾を補うて、通讀の平易を計れること前例の如しと雖も、特徴の文字と認むべきものは、原本の儘として改竄せず。

目次

朝鮮征伐記 一

序

第一

本朝近代兵亂 明智合戦井秀吉公將軍に任せらる 北條氏政家傳井小田原
 落城附朝鮮の三使來朝 奥州一揆蜂起佐沼城を攻む附蒲生氏郷後詰一揆退治井
 一揆二度蜂起秀次家康御下向奥州靜謐 朝鮮陣起井肥前國名護屋城普請

第二

朝鮮發向兵船仰付けらる井海陸御軍法 朝鮮進發軍勢備定 朝鮮國由來
 朝鮮人濫觴 秀吉公書翰を琉球國に贈る 朝鮮國御先駟の軍勢京都進發

目次

秀吉公京都御進發并嚴島御參詣附阿彌陀寺御一見

第三

諸軍勢名護屋に集る 日本勢渡海朝鮮に攻入る并釜山浦合戦 小西行長釜山浦登萊兩城を攻落す 宇喜多秀家拔駈け小西を助けらるゝ并加藤清正熊川に著く 加藤清正慶州城を攻落す 黒田長政金保稷山城を攻取る 小西行長忠州城を攻落す 李哈皇常朝鮮都落 日本軍勢朝鮮の都に攻入る

第四

加藤主計頭清正朝鮮兩王子を擒にす 加藤清正兀良哈に攻入る附兀良哈都燒拂 清正征東使伯寧將軍を擒にす附清正蝗乘に到り打入る人數 黒田長政先勢狼川軍 日本勢重ねて朝鮮に入る附伊達政宗船軍并小早川隆景晉州合戦

第五

小西行長書翰を朝鮮王に贈る 朝鮮所々軍并平壤安定館合戦史遊撃手討死 京都大政所殿御病惱に就いて秀吉公御上洛 秀吉公御船廻瀬に於て沈水并

明石與次兵衛誅さる 將軍再び名護屋御下向 稷山水源所々軍并中川右衛門大夫秀政討死 小西行長と沈惟敬對面附大日本和談扱之起 大明加勢李提督朝鮮に入る

第六

將軍名護屋に於て御越年并秀吉公御能稽古附角之坊 水源稷山合戦 小西行長大明の提督李如松と合戦 小西行長敗軍 碧蹄館軍提督李如松敗軍 備前秀家名護屋使節 安南府將軍日本勢敗軍 近衛信輔公名護屋御見舞

第七

加藤清正大明使勅對面 兀良哈人朝鮮人橘州城攻附加藤清正後卷 晉州城合戦日本勢敗軍 傳奏館合戦 安南府城加藤主計頭攻落并麻貴討死・大明日本和談 日本諸軍勢都表陣拂 淺野彈正黒田如水朝鮮渡海 熊谷内藏助水野理左衛門朝鮮渡海 大明兩使名護屋著船 秀吉公明使御對面附明使名護浦詩賦并御船遊 明使歸帆 豊後大友并波田等御改易 朝鮮城郭

日本勢之を守る

第八

三六

朝鮮兩王子書翰を加藤清正に賜ふ 瀨川采女正妻女艶書 晉州落城并牧使
王僧璘討死 閑山島船軍并來島出雲守通泰討死 大明加勢諸大將王城を守
護す 將軍名護屋に於て瓜畑御遊覽附提督李如松大明へ歸る

第九

四〇八

將軍秀吉公朝鮮在陣中御書を給ふ附薩摩國梅北謀叛 梅花宮内左衛門最後并
薩州勢敗軍 將軍御歸洛附諸大名上洛 安康府合戰 日本の使小西如安
大明禁中に入りて筆談 伏見城取立御普請 將軍秀吉公吉野の花御遊覽
美濃部四郎三郎山城小才次朝鮮渡海

目次終

朝鮮征伐記

序

夫明君舍近而取遠。故下盡力全功。是匪然知大器者。安能取遠乎。魯論所謂以
知人爲始終意。止哉。君主之樹功也。要不外此。漢祖之於子房也。立德之於孔
明也。豈非賢之識賢者乎。信長以殊絕之眼。而拔秀吉於奴隸之中。雖同比於古賢
未爲之愧焉。秀吉履鑛臺。昇挾萬乘。獨步于古今。盈溢於異域之功。除秀吉而爲亦
誰乎。歷觀近代傳記著述也。惜乎彼之成功。兼諸將士之戰忠。或蹉跎于前後。或漏失
於楮上。舊所彙行之記錄。卒多刪略。豈可不憾乎。僕定祐不慚陋質。竊悲秀吉公之
寬大奇策盡弗彰。而澤手稽顙。恭以錄雞林征討之一端焉。蓋令後世尙公之天才。欲
使且知德澤於當時。而益於蒸民耳。含氣之類。一關公之大勳者。魏乎後來之人主。
武將。不可不尊。方今僕定祐嘗憚精竭慮。冀摸擬將吏士卒之戰功。且其一二。而未
得全備也。然晦庵之智才。而未免闕疑於楚辭。矧其餘者乎。遂不憚誦。以起毫端。
是咸据君子之嘲而已。口寬文二巳八月日。大關左助藤原定祐書于雞助齋。

朝鮮征伐記第一

本朝近代兵亂

夫久堅の天開け、荒壤あらがれの地、始りてより爾來、朝廷の政は、正木のかつら絶えず、良臣の勤は、松の葉の散失せざるが如し。文武並び立ちて、四海の波靜かなりしかば、萬民、始祖の業を樂めり、然るに中頃、後白河院御治世の初より、本朝の綱紀、大に亂れ、兵革續き起り、保元に崇徳院讃州に遷幸、平治に信賴・義朝、元暦に義仲・宗盛、承久に隱岐院。其以後、正慶年中に、北條一類滅亡し、相續いで新田・足利、天下を争ひ、終に南朝・北朝と別れ立ち、兵亂止む事なし。至しんのみならず若、明德に、山名氏清謀叛、應永に大内義弘叛逆、永享年中に、鎌倉持氏生害、嘉吉に赤松滿祐逆心、亨徳に畠山政長・義就家督相論。竝に鎌倉にて、成氏より上杉憲敏伏誅、關東大亂、寛正に畠山義就嶽山

保元平治
承久の亂

群雄割據

合戰。文正年中に、斯波義繁・同義廉、武衛の家督争、應仁に山名持豊・細川勝元矛盾により、洛中大亂に及ぶ事十一年。同じ頃上杉顯定と同定政合戰。長亨に佐々木六角高頼謀叛、明應年中に、河州の正覺寺合戰、畠尚長討死。永正に細川澄元・同高國兄弟合戰。同船岡山紫野合戰、細川政賢討死。大永に桂川合戰、亨祿に公方萬松院義晴公朽木落。同細川晴元上洛、攝州舍利寺合戰。細川高國切腹、次に晴國・藤賢氏綱等、泉州にて蜂起、皆相續いで起りしかば、狼烟立去る日もなく、旌旗靡かざる日もなし。一人百官、其位を安んぜず、四海萬民、戈を擔ひ、糧を齎つせに隙なし。朝憲上に廢れ、武威下に失へり。就中等持院尊氏公十二代の公方萬松院義晴公の時に至つて、壞亂爰に極り、諸侯互に威を争ふ。東には今川上總介義元・上杉兵部大輔憲政・千葉介國胤・結城下野守晴朝・伊達陸奥守輝宗・宇都宮彌三郎國綱・蘆名彈正少弼盛高・山形出羽介義光・里見左馬助義堯・北條左京大夫氏康・武田信濃守入道信玄・佐竹右京大夫義重・村上伊豆守義晴・小笠原大膳大夫長時・木曾左馬助義高・諏訪祝賴茂・斯波長張右兵衛佐義友、竝に家人織田一類・土岐彈正少弼賴藝・齋藤利政・入道道三・伊勢國

本朝近代兵亂

三

司北畠源中納言具教・佐々木六角義賢入道承禎・京極近江守高成並に家臣淺井一類何れも國々に、武威を逞しうして、互に隙を窺ひ、謀を廻す。北國には、上杉彈正少弼輝虎入道謙信・畠山修理大夫義則・朝倉左衛門大夫義景・武田大膳大夫義統・神保長澄・椎名遊佐等、隣國を侵奪、猛威を顯せり。西國には、島津修理大夫義久・大友豊後守義鎮・龍造寺肥前守隆信・阿蘇大宮司惟行・菊池肥後守武常・相良宮内少輔・義子・戸次・立花宗像・五島大村の者共、黨を結び攻戰ふ。中國には、大内助義隆・尼子右衛門尉晴久・毛利右馬頭元就・山名伊豆守豊國・宇喜多和泉守直家・浦上美作守則景・赤松兵部少輔義祐・小寺相模守識隆等國々に崛起し、動亂止む時なし。四國に、河野對馬守通泰・三村・上得・井が一類、長曾我部元親・三好・香川・羽床・長尾モカウ・十河・安宅・一之宮・井澤等、城郭を構へ、弓箭を取りて臂を張る。五畿内には、畠山尾張守種長入道嫡男右衛門督高政・其子尾張守昭高・畠山上總介在氏・細川右馬頭藤賢・同右京大夫氏綱並に家人三好修理大夫長慶・安宅攝津守冬康・三好豊前之長入道實休・十河民部大夫一存モカウ・木澤大和守長正・松永彈正少弼久秀等、皆君臣の禮を忘れ、互に逆威を振ふ事、恰

も戰國の七雄にも越えたり。爰に斯波武衛家の老臣織田備後守敏信が曾孫、三郎信秀が孫、織田上總介信長、勇才の大器たるにより、公方靈陽院義昭公を取立て奉り、主城に安坐し參らせ、諸國大方討隨へ、畿内遠境漸く平均に近かりし所に、公方義昭公、武田信玄上杉輝虎に仰付けられ、信長を誅せんと御企あり。立所に顯れ、公方義昭公、藝州の毛利を御頼ありて、京都を御開ありしかば、京都又大亂となりにける。然とは雖も、信長、天才傑出せし人なれば、一兩年に、悉く畿内を討治め、右大臣に經上り、征夷將軍に任せられけるこそ勇ましけれ。抑此信長公と申すは、代尾張國大守斯波右兵衛佐が家臣たりしに、永祿元年の春、斯波右兵衛佐義忠は、今川義元・吉良義諦ヨシカタに相議し、信長を誅せんと謀りしが、却て武衛方討負け、同十月信長大軍にて、清洲の城を攻落しける。武衛義忠、命計り助かり、長島に落行き、幾程もなく病死し給ひける。寔に尊氏將軍の時、尾張守高經入道道朝、越前・尾張を領知せられしより以來、代々相續、此義忠に至つて、武衛に任せらる。柳營の股肱たりしに、一時に亡失、永く其家絶えにけり。然るに依つて、信長威勢夥しくなりて、シカのみならず至若

清洲城没

斯波義忠討死

義昭將軍を、天下の家督に居る奉り、權柄を公儀に備へて、終に公方を追出し參らせ、其身、大樹に居り給ふ。然りとは雖も、天道盈つるを虧く故に、天正十年の夏、明智日向守光秀謀叛を起し、京都にて、信長父子、御切腹ありて、四海又大亂とぞなりにける。爰に信長公、取立て給ふ寵臣多しと雖も、運を兩端に窺ひて、未だ明智を討たんずる人ぞなかりける。

明智合戦并秀吉公將軍に任ぜらる

秀吉毛利と對陣
秀吉播州歸陣

然るに、信長公寵臣に、羽柴筑前守秀吉といふ人あり。元來下賤の中より起りて、系連無氏の輩たりと雖も、將軍並なく寵愛し給ふ。中國一圓に下し給はり、毛利家退治の先手として、備中國高松表にて、輝元と對陣して、居られける所に、信長公御切腹の註進ありければ、秀吉哀悼の涙、驚歎の心極りなし。然れども秀吉、大剛無雙の大將なれば、少も是に痿まず、高松の城を攻落し、城主等残らず首を刎ね、其上にて、毛利家と和談せしめ、六月六日巳刻に、秀吉備中表を引拂ひ、播州へ歸陣せら

山崎寶寺表合戦

明智光秀討たる

秀吉の威振ふ

れけるに、折節、大雨・大風、數箇所の大河洪水夥しかりけるを、秀吉、處々の大河洪水・風雨を凌ぎ、夜晝の境もなく、人馬の息を續かず、攝州尼崎に著陣せられける。爰にて三七信孝・丹羽長秀・池田勝入・中川清秀・高山等が勢を合せ、同十三日、山崎寶寺表へ押出さる。明智光秀も、二萬餘にて段々に備へて、待懸けし所に、秀吉一世の浮沈、此時なり。將軍の御弔ひ合戦、追善の太刀を打つ事、今日に極る上は、秀吉、馬符を押立て、諸軍を勇し、軍勢三筋に分れ、山の手・川の手・中筋、一度に箕手に押廻し、矢楯も怵らず押入り、追崩しければ、明智、身近侍三千計り敗軍して、青龍寺城へ逃入りけるを、秀吉息を續かず、追詰め給ひしに、明智怵へず、坂本の城を、心懸け落行き、小栗栖にて一揆に逢ひ、討たれける。秀吉は、明智が首を取り、殘黨残りなく誅伐せしめ、主君の敵を目前に討平げ、帝都平均に屬しけるぞゆゝしける。至しか若のみならず柴田勝家が、一類、島津紀州の一揆、四國の徒黨、關東北國の凶徒、五六箇年に討平げられければ、夫より秀吉の威勢、飛龍天にあるが如し。其勢、恰も洪水の瀧鳴つて漲るに似たり。諸國の群雄を來服し、終に天下を舒卷せられしかば、内野に一

の城を構へ、聚樂の亭と號し、絶えて久しき行幸を成らせ奉り、即闕の雲を履み、忝くも人臣の位を極め、萬乗を翼戴し、天下に令して、不臣の輩を懲し、百官を従へて、北面を司り給ひければ、四海一統に歸し、萬國卒に服せずといふ事なし。徳川大納言家康・上杉宰相景勝・毛利宰相輝元を始め、都鄙の大名・小名、皆秀吉公の幕下に屬し、蓮府槐門の風に隨ひて、手を束ね、膝を屈せずといふ者なし。其勢、只一國より六國を靡かせし秦威に似たり。誠に熟と考ふるに、足利公方八代、東山慈照院義政公御代、應仁元年より天下亂立ちて、五畿・七道、悉く修羅の巷となる。彼を討ち之を隨へんと、互に猛威を震ひ、攻戰ふ。事、天正年中迄、既に二百餘年に及びける所に、秀吉公智才勇猛、古今輝きける大樹なれば、十箇年の内外に、天下の逆亂を静め、四海九州の末迄も打治め、日本數代の兵亂、此時に一統せしかば、禁裏・仙洞も、古の風に立ち歸らせ給ひ、三公・九卿も、位階其次第を正して、上一人より下萬民に至る迄、秀吉公の武勇の威光を仰ぎ、其恩澤を蒙りけるこそゆゝしかりけれ。然りと雖も、爰に關東の押領北條左京大夫氏政・子息新九郎氏直、未だ上洛せず、毎事京都の下知に、

秀吉四海一統

従はざりければ、富田左近將監政春を御使に下され、氏政上洛仕り、朝家を重じ奉るべく、嚴密に御教書下されけれども、第一遠國を頼み、第二に富士川・箱根山の切所を、鐵の楯と思ひ、氏政父子、嘲笑つて、上意違背の體、疑ひなければ、秀吉大に怒り給ひ、此上は天下の士卒を勞する事、不便なれども、逆臣を赦し置く事、朝儀の廢れたるに似たり。自身來春、出陣すべしと、觸を口せ、天正十七年十月、先手として織田内大臣信雄・蒲生飛守驒氏郷、兩勢二萬三千にて打下り、伊豆國沼津を固む。家康は東海道五箇國の城々明けて、借り給ふとの仰により、同御下りありて、道々の城々宿々の館を構へ給へば、小田原征伐も近き内にぞ極りける。

北條氏政家傳并小田原落城附朝鮮の三使來朝

抑此北條氏政といふは、北條時政が嫡孫相模守高時入道が末孫にはあらず。其先祖を尋ぬるに、平將軍貞盛より十代、伊勢豐前守後繼が末孫、伊勢備前守盛定が嫡孫なり。然るに伊勢備前守盛定が嫡子伊勢新九郎盛時といふ者より、公方常徳院

北條氏政

義尙公の御勘氣を蒙り、長享元年九月に、江川釣の御陣を逃出し、駿河國の守護今川上總介義忠は、己が姉婿たるにより、之を頼み、駿州に落下りしが、義忠は、去る文明十八年三月、遠江國鹽買坂にて、横地勝俣井の八郎と合戦して討死し、其子今川五郎氏親、幼少なれば、伊勢新九郎、幸に存じ、甥の氏親が名代として、今川家を進退し、何事も己が意に任せ、富士の根方興國寺の城に居住せり。其頃、關東管領は、童勝院從三位左兵衛督政知と申して、尊氏將軍より、五代の孫、即ち東山殿慈照院義政公の御弟たり。去る文明三年に、古河公方成氏退治の爲め、伊豆國堀越に御在城なりけるが、延徳三年四月五日に、俄に逝去し給ひけるを、彼伊勢新九郎聞付け、天の與ふる所と悦び、明くる六日の夜、大勢を引率し、兵船に乗連れ、伊豆に押渡り、急に堀越の御所へ亂入せしに、思ひも寄らざる砌なれば、政知の若君茶々丸御曹子、一戦にも及はず、相模國三浦介時高が許へと志し、僅かに七八十騎にて落ち給ふ。伊勢新九郎盛時、勝凱を作懸け、追懸け奉り、己に討たれ給はんとせしに、上杉民部大輔顯定より、當國守護代に置かれける宇佐美能登守定興入道道盛と

宇佐美城
没落

いふ者、公方御逝去の御弔の爲め、今宵堀越へ參り遇ひ居たりしが、若君危く見え給ひしかば、能登入道引返し、宇佐美能登守定興と名乗懸け、七八騎にて踏止り、半時計り防戦ふ。爰にて討死せし其隙に、若君は三浦へ落ち給ふ。新九郎は、堀越殿を焼拂ひ、直に宇佐美の城へ發向せしに、城主能登入道道盛討死せしかば、二日相支へ、宇佐美の城も落ちにけり。此旨、伊豆國守護管領上杉顯定居城武州の鉢形に聞えければ、顯定、大に驚き、能登入道弟宇佐美越中守孝忠を大將にて、後國洋張越上田の軍勢八千餘、伊豆國へ發向せしむ。宇佐美越中守攻入る旨、聞えければ、伊豆國侍も、過半越中守に馳加る。越後勢彌、力を得、國中に亂入す。伊勢新九郎盛時、此由を聞きて、宇佐美の庄の内戸股山に出張して、上杉が勢を待懸けたり。宇佐美越中守、之を聞き、伊豆國侍を一手に合せ、戸股山へ押寄せ、四方を焼立て攻懸る。新九郎も段々に備へつゝ、數刻防戦ふと雖も、上杉が軍兵共、鎧打入れ、喚き叫んで攻めければ、伊勢新九郎打負けて、北條へ引退く。宇佐美越中守、勝つに乗つて、北條へ押寄せ、息をも續がせず攻戦ふ。新九郎も爰を先途と防戦ひ、勝負區々な

關戸城没落

りける所に、越後勢の後に控へたる伊豆國侍松平三郎左衛門・山本太郎左衛門・富永・梅原・佐藤・上村・高橋・村田の者共、俄に心替し、新九郎に一味し、後より切懸りしかば、上杉が味方に頼切つたる關戸播磨守吉信が陣、一番に破れて、關戸城へ引退く。宇佐美越中守孝忠、精兵二千餘にて、懸破りく防戦びけれども、大敵前後を圍みしかば、終に叶はず、總敗軍に及ぶ。宇佐美越中守も、數箇所創を蒙り、散々に防戦ひ、取返しく切立て、漸く早川尻迄引退きしかば、新九郎彌力を得、關戸の城へ押寄せ、十餘日攻めければ、關戸の城攻落され、大將播磨守吉信父子、五人討たれけり。新九郎、即ち北條に居城を構へ、古河公方政氏の御味方をぞ申しける。さて古河殿へ申上げ、昔の北條の家、斷絶仕候間、某平氏一類たる上は、彼の名字を續ぎたき旨、頻に申上げけるに、北條の名字は、足利敵對の家、當代不吉の前表なりと思はれけれども、味方一人も、所望の〔なき脱カ〕砌なれば、北條の名字、御免ある上、公方政氏御名字の一字を下されければ、伊勢新九郎、大に悦び、北條新九郎氏茂とぞ名乗りける。扱鱗形の旗を打立て、相模入道高時が次男相模二郎時行五代の孫と號し、國中

足利長氏自盡

北條早雲

秀吉北條征伐

を打隨へ、一國平均になりしかば、明應三年九月廿三日に、相模國三浦介が居城三浦の館を攻落し、時高を討つのみならず、堀越殿の若君茶々丸御曹子、其時は足利左馬助長氏とて、十八歳になり給ひけるを、腹を切らせ參らせ、夫より大庭の城へ發向し、上杉朝興が目代齋藤藏人利忠を攻落し、翌年二月には、小田原の城を乗取り、大森筑前守憲頼を討亡し、小田原に居住す。爰にて新九郎、入道して北條早雲とぞ申しける。早雲が子氏綱、其子氏康今の民政、氏直迄、都合五代、榮耀に誇り、武命を輕んじ、代々小田原に在城して、關東を押領しける。去程に、北條氏政・同氏直、彌、上洛仕るまじき旨、申切るに依つて、秀吉公大に怒り給ひ、普天の下、王土にあらずといふ事なく、率土の濱、王民にあらずといふ事なし。氏直儀、家康所縁たりと雖も、逆臣たる條、誅伐せずんばあるべからずとて、天正十八年庚寅三月朔日に、秀吉公、御首途と聞えければ、正月上旬より、御先勢毎日引きも切らず、都を立ちて、五畿内・西國・中國・四國・南海道・北陸・中仙道の軍勢、都合廿六萬の著到とぞ聞えける。秀吉公は、北條征伐として、禁中に奏聞まし、錦の御旗を申下し、陣

北條氏政家傳并小田原落城附朝鮮の三使來朝

の座にて、軍禮を行はれ、公卿僉議ありて、節刀を賜ひければ、秀吉公、博陸の衣冠を脱ぎ、忽に戎衣となり、錦の直垂を召され、鎧を著し、節刀・錦の御旗を賜ふ。其儀式の爲體、魏々として亦堂々たり。三月朔日に、秀吉公、帝都を御立あり。其勢、雲霞の如くなりければ、見物の貴賤、目を驚かさずといふ事なし。同廿八日に、沼津の城に著き給ふ。秀吉公、自身五百騎計りにて、箱根山へ登り給ひ、山中の城涯近所にて、四方を見廻し、軍勢の手合を定め、硯を取り寄せ、自身書付け、諸手へ觸れられ、明くる廿九日早天に、秀吉公、三島の上山へ御登りありて、金の瓢箪を立て給へば、御先手木下美作守・一柳伊豆守直末・堀尾帶刀吉晴・中村式部少輔一氏、諸口揉合ひて弓・鐵炮を放立て、鬨聲山谷に響き渡り、喚き叫んで攻登る。山中の城にも、北條左衛門大夫氏勝・間宮豊前守好高・松田兵衛尉重弘・朝倉能登守元春等、防戦すと雖も、中村式部少輔、先登して、堀涯にひたくと著きしかば、一氏が兵河毛惣左衛門・藪内匠・渡部勘兵衛、真先に乘込みけるに、諸手、揉立て攻入り、間宮好高・松田兵衛尉、一足も退かず討死す。氏勝・朝倉能登守は、搦手より落行き、即時に山中の城を攻落

し、葦山城北條美濃守氏規をば、近江中納言秀秋を大將にて、四國勢を加へて攻圍む。總軍は、箱根山を登り、小田原の城へ押詰る。北條氏政も、豫てより手分して、宮城野へ松田尾張守康遠・上田上野介憲宗・原式部丞清高を差向け、湯本口へは千葉新助直重・竹浦口へは北條陸奥守氏照・成田下總守氏成・壬峯上總介治時・皆川山城守廣照を遣し、固めけるに、三箇所の役所を、上方勢事ともせず、峯より嶺を傳ひ、谷より岡に出で、廿六萬の勢鬨聲を揚げ、響渡つて、平等に越えければ、三箇所の民政が勢、一支も支へず、捨鞭を打つて、小田原へ逃入りしかば、秀吉公は松山に御本城を居かれ、小田原城を取巻き、晝夜仕寄りを付け、攻めさせらる。關東國々城々へは、淺野彈正少弼長吉・木村常陸介盛方・本多中務大輔忠勝を遣し、忍・岩槻を攻落す。甘繩の城〔守脱カ〕北條左衛門大夫氏勝をば、井伊兵部少輔直政・榊原式部大輔康政を差向けられ、北國口よりは、上杉宰相景勝・加賀宰相利家・毛利河内守・直田源五郎、數萬にて上野國へ亂入、松枝・松山・安中・厩橋・八王子等の城々攻落し、小田原表へ打出づる。八州悉く平げ、奥州迄其餘威に服し、残らず旗本に屬し奉る。關東の城々防

北條氏政
氏照自盡
小田原城
没落

朝鮮使節
來る

朝鮮王の
書翰

守する事なく、皆搔楯を下り、降參しければ、今は小田原一國一城になり、助の兵も
なく、剩へ城中にて、松田尾張守・成田等、叛逆を企て、皆川山城守・和田等は、己が役
所に火を懸け、寄手の陣へ走込みければ、恠へ兼ね降參し、北條氏政・同氏照兄弟切
腹し、城中の男女を助け、城を渡す。即ち關東の固めには、家康を江戸の城に居置
き、七箇國を領知せしめ、奥州白河迄、秀吉公御出馬ありて、會津を蒲生氏郷、葛西
大崎を木村伊勢守に下さる。九月朔日に、聚樂へ歸城し給ひけり。誠に天下一統
に歸し、四夷・八蠻、靡き隨ふ事、疾風の草を吹くが如し。されば秀吉公の威風、異域
に及びしかば、朝鮮王李昞、三使を奉り、其機嫌を伺ふ。正使は黃允吉、副使は金誠
一・許箴之なり。三使衣冠を搔い繕ひ、聚樂の御所に出仕せり。秀吉公、朝鮮使に御
對面なされ、朝鮮王の書翰を披かせらるゝに、其詞に云、

朝鮮國王李昭朱印奉書

日本國王關白殿下

春候和煦動靜佳勝遠傳

大王一統六十餘州、雖欲速請信修睦、以敦隣好、恐道路湮晦、使臣行李有淹滯
之憂歎。是以多年思而止矣。今令與貴所遣黃允吉・金誠一・許箴之三使、以致賀
辭、自今以往、隣好出于他上幸甚。仍不腆土宜銀有別幅、庶幾笑留。餘須序。

珍齋不宣

萬曆十八年庚寅三月日

別幅

- | | | |
|--------|---------|----------|
| 良馬二頭 | 大鷹子十五連 | 鞍子二面請緣具 |
| 黑麻布三十四 | 白綿紬五十四 | 青斜皮十張 |
| 人參一百斤 | 豹皮二十張 | 虎皮廿五張 |
| 彩花席十四 | 紅綿紬十四 | 清密十一碩 |
| 海松子六碩 | 豹皮心兒虎皮邊 | 貂皮裏阿多介一座 |

以上

とぞ書きたりける。秀吉公は、書翰・方物等、御披見ありて、即ち返牒を遣されける。

北條氏政家傳并小田原城附朝鮮の三使來朝

其上、朝鮮の二使に、仰含められけるは、朝鮮より大明へ、使者を遣し、前代の如く、日本勘合の船を、渡すべき儀を調ふべし。大明若し異議に及ばず、朝鮮王、先づ八ヶ道の兵を催し、大明へ先駈すべし。秀吉續いて攻入りつゝ、大明四百餘州を切從へ、自ら北京の皇帝になるべき條、謹んで其旨、存すべき條、仰渡さる。即ち朝鮮返翰の詞に云、

秀吉の返翰

大日本國關白豊臣秀吉朱印報

朝鮮國王閣下

雁書謹讀卷舒再三、抑本朝雖爲六十餘州、通歲諸國分崩離所、兵革不止、亂國綱廢世禮、而不聽朝政。故予不勝感慨、不過數年之間、伐逆臣討賊徒、及異域遠島、悉歸掌握、宇内既清夷矣。夫予固夔臚繩樞之周餘也。然慈母夢日輸入懷中、而吾以降誕。時有相士曰、日之所照臨、莫不祗屬、後來其有蓋世之氣、不可疑焉。依有此奇異、故吾常自負、一旦乘時運、而龍飛東略、西征南伐、北討戰則無不勝、攻則靡不取。大功之速成也、誠如太陽一昇、萬物皆無不照焉。既天下大

治、撫育百姓、憐愍孤獨。故民富財足、土貢萬倍于古矣。本朝開闢以來、朝廷盛事、洛陽之壯麗、莫如今日也。吾想人生不滿百、豈壹鬱于一方、以費日乎。是以吾促大兵、將入大明、而使一劍霜滿四百州之天。唯是之願耳。貴國先馳而入大明。是有遠慮無近憂者乎。遠邦小島在海中者、後進之輩一不可佐許容也。予赴大明之日、彌與貴國結隣盟也。予志無宅。唯欲顯佳名三國而已。方物如目錄。領納珍重。保齋不宣。

天正十八年九月日

とぞ書かれける。朝鮮の三使、此御返簡を請取り、朝鮮に歸り、禁裏に之を奉りけれども、朝鮮王、曾て驚き給はず。今日本倭國の力を以て、大明を攻めん事、誠に螻臂を頼んで、奔車に向ふが如しと、敢て返牒の沙汰なし。朝野掌を拍つて、嘲哂せり。

奥州一揆蜂起佐沼城を攻む附蒲生氏郷後詰一揆退治

井一揆二度蜂起秀次家康御下向奥州靜謐

奥州一揆蜂起佐沼城を攻む附蒲生氏郷後詰一揆退治
井一揆二度蜂起秀次家康御下向奥州靜謐

奥州一揆
佐沼城を
攻む

將軍秀吉公は、大明征伐の事、朝鮮王へ申送り、其返牒の來るを待ち給ふ所に、十月下旬に、奥州侍南部大膳大夫信直方より、加賀宰相利家迄、早馬を以て、註進仕りけるは、木村伊勢守が領分佐沼表、一揆夥く蜂起して、佐沼城を取巻く所に、木村伊勢守、之を聞き、佐沼城主成合平左衛門は木村家老なれば、後卷の爲め、伊勢守は、葛西の豊間の城を立ち、嫡子彌右衛門は、大崎の古川を出で、父子一手になりて、押出す所に、後にて一揆起りて、豊間、古河兩城を、乗取るに付き、伊勢守手を失ひ、家老成合平左衛門が籠る所の城へ逃入り、一揆彌、大事になりて、彼要害を取巻き落去る。近日の體には、會津より蒲生飛驒守氏郷、僅に六千餘にて、十月初に打出で、大風大雪を凌ぎ、後卷に佐沼城へ押出し候由、風聞候へども、始終小勢にて、叶ふべからず候間、御加勢然るべき旨、註進す。利家、大に驚き、此旨早馬にて、京都へ申上げられければ、秀吉公、大きに怒り給ひて、淺野彈正少弼長吉、石田治部少輔三成、御名代として、結城宰相秀康並に家康家老柳原式部大夫康政、急ぎ罷下るべき旨、仰出されけり。抑今度一揆蜂起の由來を尋ぬるに、米澤城主伊達二郎政宗が勸にて、一揆を

一揆蜂起
の由來

起しけるとぞ聞えける。政宗、此企ありける濫觴は、昔より代々會津を領しける蘆名の盛重と、伊達政宗が父輝宗と、數年合戦し、勝負區々なりしに、彼蘆名盛重は、元來佐竹右京大夫義宣の弟の子にて、蘆名の養子たり。兩國數年の軍あるに付き、天正十七年三月上旬、蘆名盛重家老二本松右京進義次を使として、伊達輝宗方へ遣し、和睦の扱あり。此二本松右京進先祖は、源家の一流畠山上野介泰國が嫡流なり。伊達輝宗も、和談を悦び狙柳といふ所にて、二本松右京に對面す。野際に帷幕を張り、其内にて獻盃の祝儀ありけるに、蘆名の使者二本松義次は、大力なりければ、伊達輝宗を引執へ、是非生捕にして、大勢引包み、二本松の城へぞ歸りける。伊達が兵共多しと雖も、詮方盡果て呆れて、此旨城へ註進しければ、輝宗が嫡子次郎政宗、生年廿三になりけれども、剛兵一の兵なれば、物具取つて、肩に抛懸け、手勢二千餘にて、二本松を追懸けたり。右京進義次も、揉に揉んで急ぎけれども、政宗に追付かれ返合せ、散々に戦ひ、輝宗を刺殺し、其身も自害して失せにけり。政宗は、二本松が首、並に父輝宗の死骸を持たせ、城へ歸り、同年四月に、二萬餘騎を催し、會津を

奥州一揆蜂起佐沼城を攻む附蒲生氏郷後詰一揆退治
并一揆二度蜂起秀次家康御下向奥州靜謐

指して、押寄する。二本松の城にては、政宗寄すると聞き、右京が後室は、八歳と五歳になる二人の子供を、大將にして、二人數を集め、其身、女性たりと雖も、自ら冑具足さし固め、弓、鐵炮を矢間配して、政宗を待懸けたり。政宗之を聞き、窮寇をば迫むべからずとて、閑道を経て、〔盤梯カ〕萬代山の麓摺上原へ押出す。蘆名盛重、之を聞き、政宗に少も足をためさせじと、二萬五千餘、金神周防守忠數を先手にして、平田・松本・佐世・富田・四天王の侍共、段々に備へて打出づる。政宗も伊達阿波守郡左衛門尉・片倉小十郎先駆にて、挑戦ふ所に、蘆名の家老富田大膳・平田佐世、俄に別心して、後より切懸り、政宗と一手になりしかば、金神周防守、四方八面に渡合ひ、比類なき討死してんげり。松本太郎、十八歳なりけれども、無雙の大力、剛強の兵にて、蘆名家にて八萬石を領し、第一の家老たりしが、平田・富田・佐世が、別心せしを見て、政宗に構はず、眞直に三人の陣へ懸合ひ、松本太郎、是に在りと呼んで、鐵の棒を持つて、前後左右を打伏せ、手下に七八人討取り、富田大膳に組まんと、懸入り、戦ひけれども、政宗が大軍、競ひ來りければ叶はず、終に討死す。大將蘆名盛重も、只十騎計り

金神忠數
奮死

に討ちなされ、會津の城へも歸り入らず、常陸國江戸崎指して、落ち給ふ。さて政宗は、會津を一圓に領知せり。其頃婦翁の田村の清顯も病死にて、其子なかりければ、他人に隨はんよりは、婿なれば主君と仰がんとて、田村が家人残らず政宗に著き、伊達、彌、大身になり、威勢を振ふ事斜ならず。明くる天正十八年には、秀吉公、小田原へ寄せ給ひければ、佐竹右京大夫義宣、小田原に著陣し、政宗狼藉に依つて、猶子蘆名盛重没落仕候間、御太刀影を以て、盛重還住の本望を達し度旨、頻に訴訟をぞ致される。斯りける所に、五月上旬に、政宗は會津を立ちて、越後へ廻り、甲州を経て、箱根を越えつゝ、小田原に參る。秀吉公、石田治部少輔三成・富田左近將監政春・津田隼人佐敏實を以て、仰出されるは、今度秀吉、大軍を催し、朝家の綸命を受けて、北條を征伐する事、天下に隠れなし。是全く秀吉、自分の怨にあらず、主上の勅命にて、朝敵征伐する所なり。故に勅命を重ね奉り、上杉景勝、使者を奉り、佐竹義宣・宇都宮彌三郎國綱・結城晴朝・田賀屋左近大夫・水谷伊勢守・佐野天徳寺、悉く御陣に馳參りて、官軍の下知に、隨ひ奉る所に、政宗一人左様にあらず。只今に至つ

奥州一揆蜂起佐沼城を攻む附蒲生氏郷後詰一揆退治
并一揆二度蜂起秀次家康御下向奥州靜謐

て、遅参仕る條、奇怪なり。無禮なり。是を以て將軍御對面を許されず。然れば去年、押領仕りし會津・仙道、残らず公儀へ差上ぐべし。若し異議を存せば、御成敗仰付けらるゝ事、掌にあり。但し政宗事、遅参仕ると雖も、小勢にて當地へ参る所、是にて御成敗候へば、籠鳥を殺すに同じ。武威の不足に似たれば、今度は御助なさるゝ間、早々奥州へ罷歸り、軍兵を催し、御下向を待懸くべし。秀吉追付け、北條を誅伐せしめ、關東を打靡け、奥州に到りて、御旗を進められ、鑓先を以て、踏類し、政宗が頭を刎ねらるべき條、早々罷歸るべしと、仰出さる。政宗承り、畏つて申上げけるは、某獨身にて、御陣に馳参る上は、御誅伐仰付けらるゝとも、異議を存じ奉らず、矧んや拜領の地は、只今差上げ申候と、御請申上げければ、御前別儀なく、御暇下され、政宗は奥州へ下る。内々諸人囁きけるは、政宗、虎狼の喙徒なれば、只今に大逆を致すべし。然れば彼を免し、還す事、千里の野に虎を放つに似たりと、きけれど、奥州・出羽の者共は、政宗を無事に御返しありて、追付け奥州へ御動坐なされ、鑓先にて御成敗なさるべき旨の上意を承る。扱は、今は敵對なし難し。少し

小田原落城

も早く御手に付き、忠節致すべしと、思はぬ者はなかりける。七月十一日、北條氏政・同氏照、切腹仕り、小田原落城しければ、同十七日、將軍、小田原御立なされ、八月中旬、奥州會津・白河迄御著陣なさる。政宗は、小性四五人にて、下野國那須野迄、御迎に罷出づる。南部信直も、同じく参向す。御先手は、蒲生飛騨守氏郷なれば、奥郡さして出張す。秀吉公は、細川越中守忠興を召され、政宗が差上ぐる會津領百萬石、下し置かるべきの旨、仰付けらる。細川、畏つて御仕置の儀にて、忠興差置かれ候事ならば、畏く承り候。若し御恩賞と思召し候はゞ、小國にても、願はくば西國にて拜領仕り度き旨、御訴訟申上げらる。將軍、聞召し分けられ、八月十五日に、先陣より蒲生飛騨守氏郷を召還され、會津・仙道・白河都合百萬石を下されける處、爰に葛西・大崎といふ所あり。葛西は頼朝公御時より、葛西の三郎代々領知して、豊間の城に居住す。大崎は、足利尾張守高經の嫡子、斯波三郎家長が所領たり。然るに北畠源中納言顯家卿、建武三年に上洛の砌、鎌倉を攻められける時、斯波三郎家長、杉本合戦にて、討死せし忠功により、今に至る迄、代々此所を領知し、大崎の古川の城に居住せ

奥州一揆蜂起佐沼城を攻む附蒲生氏郷後詰一揆退治
井一揆二度蜂起秀次家康御下向奥州靜謐

り。秀吉公、兩所共に召上げられ、葛西・大崎六十萬石を、木村伊勢守に下されける。此伊勢守は、丹波龜山城下の町人なり。先年、明智日向守光秀、龜山在城にて、丹波國侍久下・長澤・波多野等と合戦、數日に及びける砌、彼木村、朱烏帽子を著て、毎度手柄を顯し、かば、明智、召抱へ、四千石の所領を充行ひ、木村彌一右衛門とぞ申しける。明智合戦の後、龜山の城持堅固に、防ぎ守りけるを、秀吉公、色々謀を運らされ、龜山の城を請取り、伊勢守と改名させ、攝州にて四千石下されけるが、今度六十萬石の御加恩を拜領し、面目身に餘りてぞ覺えける。伊勢守は豊間城、嫡彌一右衛門は、古川に在城す。蒲生氏郷へ仰聞かされけるは、木村伊勢守事、子の如く、家人の如く、不便に仕るべし。木村も亦氏郷を親の如く、主君の如く存すべしとて、政宗が所領を、真中に立狭み、氏郷・木村をぞ置かれける。扱奥侍には、最上領主山縣出羽介義光・〔澤カ〕津・津輕・南部・相馬・秋田城之介岩城、并伊達政宗、悉く御手に屬しければ、残らず本領安堵を給り、出羽・奥州の檢地を、淺野彈正・石田治部少輔に仰付けられ、御歸洛の砌、氏郷申上げられるは、我等は勢州松が島にて、十五萬石、木村伊勢守

は、本知四千石より、氏郷は百萬石、伊勢守は、六十萬石に罷成り、殊更東藩の西地に差置かれ候に、手前人數不足にて、何とも罷成らざる旨、申上げらる。秀吉公、尤なりとて、暫く御思案ありて、兩人に侍を抱へさせらるべき手段、手の内にありと仰せらる。増田右衛門尉長盛を召され、制札二三十枚仰付けらる。今度氏郷・木村兩人、大身に仰付けらると雖も、當分侍に事缺き申候間、天下の諸大名の家人等、其主人に恨不足あるの輩は、皆々氏郷・木村方へ驅込むべし。若し當主人相構へ候は、秀吉、相手になさるべく候間、其旨を存じ、危氣なく、兩人へ走込み、奉公仕るべき者なりと遊ばされ。辻々に立てられければ、日本國中末々迄相聞え、先づ家康卿より鳥居四郎左衛門・寛龍之助・曾根下野守を始め、氏郷へ附き、中村式部大輔一氏より成合平左衛門。一番に立退き、木村方へ出でければ、伊勢守悦んで、平左衛門事、度度譽の中、先年和泉國古木川にて、一氏と紀州勢一戦の時、彼平左衛門一番鎧を仕り、比類なき働、其以後度々の持かきすぐれたればとて、伊勢守、一の家老として、佐沼の城主に爲し、三萬石を充行ひければ、樫井内藏助も走込み、程なく侍共大勢召抱

奥州一揆蜂起佐沼城を攻む蒲生氏郷後詰一揆退治
井一揆二度蜂起秀み家康御下向奥州靜謐

佐沼一揆

へ、豊間・古川に在城せり。八月中旬に入部して、漸く住宅の用意半の所に、九月中旬より、木村家老成合平左衛門が居城佐沼より、一搔一萬計り蜂起して、佐沼の城を取圍み、晝夜の境もなく攻戦ふ。成合平左衛門、勇士たりと雖も、在城程なければ、萬事に自由ならず、難儀に及ぶ由、聞えければ、木村伊勢守、大に驚き、佐沼の城の後巻として、豊間の城を立ち、子息彌一右衛門も、古川の城を出で父子一手に成りて、佐沼の城へ押出づる所に、路にて一揆二三萬起りて、豊岡・古川兩城を乗取りしかば、伊勢守父子手を失ひて、佐沼城へ逃入り、成合と一手になり、一揆彌、大軍になりて、十重二十重圍みつゝ、揉に揉んで攻近附き、城中兵糧乏しくして、上下窮困斜ならず。已に落去に及びければ、此旨、會津へ註進し、援の兵を乞ふ事、引きも切らず、氏郷聞きも敢へず、佐沼の體、さぞあらん、一刻も早く、後巻すべしとて、ひしめきければ、家老蒲生源左衛門・同四郎兵衛・谷崎忠右衛門等、足長に御出で候は、後にて一揆起るべく候間、是非思召止り候へと諫むれども、木村を攻殺させては、將軍の御前、何と申すべき。其上助くべきを助けざるは、弓矢の永き瑕たれば、是非に

蒲生氏郷
佐沼城後詰

後巻あるべしとて、會津にも大軍を残し置き、氏郷、僅に六千餘、十月五日に會津を立つ。折節大雪にて、通路難儀に及ぶ。氏郷が老臣共、申しけるは、小勢と申し、殊に上方者にて、案内をも知らず、大雪馴れず、大極寒時分に長途を経ては、上策にあらずと諫むれども、氏郷思切たれば、聞入れず。米澤領に著きしかば、政宗へ使を立て、佐沼の城後巻の爲め、氏郷、奥へ罷通り候。通路不案内に候間、指南の爲め、政宗先陣仕らるべき旨、屹度申入れられければ、政宗仔細に及ばず。一萬五千にて、氏郷に先立ち、押して行き、大雪といひ、切所の長途といひ、殊更政宗勸にて、一揆を起させたる事なれば、政宗が領内を、氏郷押通るに、宿等の不自由に、地下人の不馳走なる事斜ならず。氏郷が軍兵、上下共に憤りけれども、詮方なし。同十七日には、氏郷政宗、相俱に前野・黒川にぞ著きたりける。政宗は、我持の城なれば、黒川城に入り、氏郷は古城の跡に陣を取懸くる所へ、政宗より使を立て、是迄は、某領分なりと雖も、明日よりは、敵地にて候間、武者押の定め、相談仕るべし。其上、時分柄、異體には候へども、今夜城中にて、茶を進めたく候間、追付け、御出を忝うすべしと申されける。

奥州一揆蜂起佐沼城を攻む附蒲生氏郷後詰一揆退治
井一揆二度蜂起秀次家康御下向奥州靜謐

是は數寄屋にて、討果すべしとの謀なり。氏郷家老共色々止めけれども、政宗め何事かあるべきとて、參るべき旨、返事なり。扱氏郷は、人數六千を、黒川城の門前に立備へ、氏郷も武具して、蒲生源左衛門・谷崎忠右衛門・蒲生四郎兵衛・町野左近・關庄藏・直八右衛門・岡部玄蕃・松浦左兵衛、八人の兵共相從へて、城中に入り、會席は書院にて出で、茶は數寄屋にて、政宗自身點せらる。扱氏郷、數寄屋へ通らるゝ時に、政宗露地迄迎に出で、氏郷一人を通し、あとの戸を閉ぢんとする時に、八人の兵共、何時にても候へ、公方家の御茶にも、吾等共相伴にはづれたる事なしとて、鎧・甲・太刀・帶きながら、六疊敷の數寄屋へ入込み、政宗を真中に取圍んで、茶の會事終り、扱書院へ出で、軍評詔あり。其時、政宗勝手へ立ちたる時、片倉小十郎諫めけるは、只今氏郷御討ち候事、思召止り候へ。其仔細は、今味方は、一萬五千なれども、地侍なれば、事難儀に及んでは、必ず逃げ散ずる事、安かるべし。氏郷が六千は、上方者にて、百里四方に味方なければ、上下迎も遁れぬ所を知つて、氏郷は討ち濟すとも、殘六千を討果し難し。其上、味方一萬五千に、氏郷が六千對揚にも過ぎて、覺え候間、爰

をば御待ち候ひて、奥郡へ入る時、内々の支度の如く、一揆共に揉合ひ、後先より討果すべしと、諫むる故、其場の事は、延びにけり。扱氏郷は、政宗に向つて、佐沼城より此方に、敵の城は、之なきかと、尋ねらる。政宗、申さるゝは、田舎道三十里此方に、高清水と申して、只城一箇所候とあり。氏郷、さ候は、先づ之を攻め申すべしと定め、氏郷は本陣へ歸られ、明くれば、十八日に、氏郷は古城より打出で、六千を眞丸に立て、政宗へ使を越し、前々の如く、先へ押行かるべしと、申遣す所に、政宗、黒川城より出で、氏郷陣に向ひつゝ、備を眞丸に立つる、すはや政宗が懸るはとて、氏郷軍兵共、手鍵押取りく、色めき渡る所に、政宗は備を疊みつゝ、何事なく先へ押行きぬ。氏郷も續いて押して行く。其夜は中新田に著く。一揆共、城を明け退きたれば、氏郷は城に陣取り、政宗は大寺に宿陣せり。其夜の亥の刻に、政宗より使を越し、吾等事、俄に蟲氣指發り散々に候間、明日御先を參る事、罷成るまじと申越す。氏郷聞きて、彼奴め、後より討果すべき爲めにぞ、さはいふらんとて、明くる十八日の早天に、手勢を二つに分け、五手組一備と、六手組一備と七手組一備、後に下りて、

後陣を討たせ、政宗に心あて、先陣には、蒲生源左衛門・蒲生四郎兵衛・谷崎忠右衛門・町野左近、四備を押立て、扱打立つ砌に、政宗へ使を越し、御所勞如何御座候や、御養生專一なり。氏郷は、御先へ参り候と、申捨て、中新田を立ち、高清水を志し、押行く所に、高清水より此方に、妙城・岩手・澤松・山林とて、四つの敵城あり、妙城手先なれば、城主濱田河内守三千餘にて張出し、足輕を駈引き、弓・鐵炮を雨の降る如く、打懸けたり。氏郷が先陣、四備の兵共、事急なれば、本陣氏郷へ窺ふに及ばず。源左衛門・四郎兵衛・町野・谷崎等、足輕を左右に開かせ、鬨を揚ぐると均しく、屈強の兵共、鞆しころを傾け、鍵先を並べ、一度に踵と突いて懸る。塵烟天を掠めて攻戦ふ。一揆方突立てられ、大將濱田河内守も鍵下にて討たれければ、殘勢は、吾先と妙城へ逃入りけるを、氏郷が先手の大將共、敵に息な次がせそ、附入にせよや者共とて、北ぐるを追うて、引付けて入込みければ、三の丸乗破り、二の丸の堀下に、ひた／＼と付き、先登を競ひ攻戦ふ。氏郷は、之をば夢にも知らずして、押行く所に、先陣に當て、鐵炮の音事々しく鳴出で、馬烟天に覆うて見えければ、先手敵に取付きたりと覺えるぞ。誰かある、見て參れと、下知せらるゝ所に、其頃並なき達者なる池野作右衛門といふ歩侍、馳行きて、妙城へ駈付け、先手二の丸へ付く所へ馳付て、則ち首一つ討取つて、即時に馳せ歸り、御先手、城を乗り候由、申しければ、氏郷聞き敢ず、銀の鯨尾五尺ある首を取つて著つゝ、騎馬に鞭を進むれば、相従ふ兵共、揉に揉で駈付け、先手の兵共、上手になり、氏郷後詰をするぞ、進めや兵共とて、自身、金の三蓋笠印を押取り、白沫を噛んで下知せられければ、岡左内・寺村半左衛門・志賀與惣右衛門、小性には名越山三郎、先登に進み攻入りつゝ、何れも高名にしてんげれば、殘る兵共、吾劣らじと、關庄藏・佃又右衛門等、先を先に攻入り、本丸を乗取つて、追付追廻し攻戦ふ。氏郷も甲の鞆・鎧の綿髪に、矢三筋受留め、自身太刀折して、首二つ討取られければ、相従ふ兵共、思ひ／＼の働、色々の分捕、高名様々して、本丸を焼立つる所へ、政宗一萬五千にて、黒烟を踏み立て、馳來る。是氏郷、妙城を攻懸り居ば、立狭んで討果すべき行てたてにて、息も續がず、馳せ來りけれ共、氏郷運命強くして、妙城を一時に乘崩しければ、政宗、案に相違して、本望を達せず、殘る敵の城々岩手・澤松・山林、三つの城も、妙城の落

奥州一揆蜂起佐沼城を攻む附蒲生氏郷後詰一揆退治
井一揆二度蜂起秀次家康御下向奥州靜謐

城を見て、自焚して明け退きけり。政宗、手を失ひて、氏郷へ使を越申しけるは、城御攻め候は、吾等にも一方仰付けらるべき所に、此方へ御左右も之なく、如是御座候處、將軍の御前、一何と申分くべくや。近頃迷惑に存する旨、仔細に述べければ、氏郷、御尤に候。去ながら、此城攻め候事、吾等にも知らせず、先手の者共、踏顔し候間、其段兎角に及ばず。貴殿は、先へ御通り候て、高清水城を御攻め然るべしとて、政宗をば先へ通し、氏郷は妙城の口々、丈夫に普請し、即ち是に陣取りつゝ、將軍の御下知を待つ。政宗、已に、高清水を取巻くとも、氏郷は軍兵疲るゝ由にて、加勢なさず。十九日の夜に入り、妙城の大手の城戸を敲く者あり。誰ぞと尋ぬるに、政宗が家人隅田伯耆守なり。開けて入り給へとて、内に入る。其先祖三代迄、追腹仕る所に、今度何の仔細も之なきに、一所懸命の所領を、取上げられ候處、無念に存候に付、心變して參り候。今度一揆蜂起仕る事、皆政宗下知にて候由、隱謀の次第、一に告げたりければ、左あるべしとこそ、豫てより思ひつれとて、彌油斷なく見えたりける。政宗、之を聞きて、大に迷惑し、色々の仔細を盡し、様々陳ぶれども、氏

秀吉政宗
退治

郷曾て取合はず。其御申分の段々は、氏構郷はざる事共なり。最前、京都へ申上候間、將軍の御下知相待ち候。先づ其方には、高清水の城を御攻落し候へ。若し御人數草臥れ候は、氏郷授け申すべきなりと、返答ありければ、政宗、兎角思案し、三十日餘り怵へける内に、此事、京都へ聞えつゝ、政宗退治として、淺野彈正少弼長吉、結城宰相秀康、榊原式部大輔康政、大軍にて、氏郷が家老蒲生源左衛門が居城二本松に著き、石田治部少輔三成も大勢にて、岩城に著く。扱又氏郷は、妙城に陣取り、佐沼城に楯籠り、木村伊勢守父子を、如何なる謀を廻しても、助けたく思へども、大軍四方に充滿ちたれば叶はず。木村父子も、氏郷が妙城迄、出張するを聞きて、日月の如く之を頼み、命に懸けて居たりける。初め伊勢守、佐沼城へ逃入りし時、大崎領主斯波右京大夫經長の家老黒澤豊前守昌任、濱田河内守が人質二人を、漸に取放さずして、城へ入れしかば、黒澤が人質は、童子丸とて、八歳になる、男子なり。濱田が人質は、娘の幼少なり。此兩人を、質に持つ故、寄手も之を氣遣ひ、さのみ佐沼城を攻めざれば、木村伊勢守も、此人質を暗夜の燈の〔脱カ〕思ひ居けるが、よくく

奥州一揆蜂起佐沼城を攻む附蒲生氏郷後詰一揆退治
井一揆二度蜂起秀次家康御下向奥州靜謐

思案するに、此城無人數にて、兵糧乏しければ、落城近日たるべし。さあらば、吾等捨つとも、此人質を取返されては、將軍の御爲め然るべからずと、思惟しつゝ、濱田河内守は、妙城にて討たるれば、其詮なし。黒澤豊前守人質童子丸をば、潜に妙城へ送り、此人質取放し給ふなど、氏郷へ細々と申越さる。黒澤豊前守昌任といふは、安倍貞任が末孫、奥方第一の剛兵なれども、此由を傳へ聞き、涙を流し、上方の者共は、情あるに似て情なし。無慚無愧と承れば、吾子の童子丸をば、何とか手痛く致すらんと、天に仰ぎ悲み泣く。相従ふ兵共、心弱き事を宣ふ物かな。天下の爲にする者は、身を顧みず、是程の大事を思立ち、如何でか未練を思はるやと、諫むれども、豊前守は、聞入れず、餘りに爲方なき儘に、道の通路、常の人は成さざれば、食人癩病人を語らひ、氏郷へ文を越しけるは、吾等愛子、其許へ御取なさる由、承り及び候。餘に不便に候間、其子を御返し、其上、佐沼城を一揆中へ下され候はゞ、木村伊勢守始め城中の士卒、一人も恙なく、其御城へ送り渡し申すべき旨、仔細の書狀詳なれば、氏郷、大に悦び、其旨、少も別儀あらじ。早々木村父子を送り渡し候へと、書狀

政宗米澤
に退去

懸に到來す。黒澤、喜悅の眉を開き、一揆中へ色々此旨打歎き、佐沼城を請取り、黒澤豊前守千五百餘、木村父子を守護しつゝ、士卒一人も恙なくして、十一月廿六日に、氏郷が陣妙城へぞ著きたりける。氏郷よりも迎を出し、人質童子丸には、小袖、太刀、引出物して、黒澤方へ渡し、木村伊勢守父子をば、氏郷方へ請取りける。去程に今度の一揆の事伊達が所爲なりと、上聞に達し、政宗退治の爲め、將軍の御人數大軍にて二本松岩城に、著く由聞えければ、政宗は怵へ兼ね、高清水の城を解し、十二月二日の早天に、居城米澤指して逃げ歸る。氏郷、聞くよりも、さちあぢばあれ任他政宗め、妙城を通らば、押寄せて打殺さんとして、上帶締め、馬の腹帯を固め、待たれける。政宗も、之を聞き、山路に懸り、米澤へ歸りけり。斯くて年も暮れ、天正十九年正月にもなりぬ。氏郷は、妙城に陣して、上方勢を待つ所に、政宗は伯父重實、片倉小十郎、其外小性一人、上下四五人の體にて、二本松に陣取りたる淺野彈正の所へ駈込み、今度一揆の次第、吾等隱謀の旨、氏郷申上ぐる條、全く其儀にあらずと、歎を申達し、彈正を頼んで、將軍へ申譯せんとす。氏郷は、之をば知らずして、上方口をば、今下りの軍

奥州一揆蜂起佐沼城を攻む附蒲 氏郷後詰一揆退治
并一揆二度蜂起秀次家康御下向奥州靜謐

勢に押へさせ、幸に後なれば、此方より政宗を取詰むべしとて、妙城に陣取る。淺野彈正は、其謂を知らず、氏郷が、政宗領分を通る事を氣遣して、妙城より歸り申さずと存じ、政宗が伯父伊達重實を人質として、妙城へ指越え、之を召連れて、氣遣なく政宗領分を通り、早々會津へ引取らるべしと、書狀を越す。氏郷披見せらるゝに、人質二人とありて、重實一人來れば、氏郷大に怒り、政宗人質二人と、御紙面に候へども、重實一人ならで參らず候。其上政宗が領分通り候事、氏郷が恐れて、是に滞留仕る事にてなし。重實は返し候とて、返し遣し、其後より氏郷は、六千餘にて、妙城を立ち、政宗領を通るに、無禮を仕る者をば、町人百姓僧俗を論せず、討捨にして通られければ、恐るゝ事斜ならず。氏郷、會津に歸著せられ、兎に角に政宗事は、將軍御前にて、申譯然るべしとあるに付、政宗上洛ありければ、氏郷も同じく上京せらる。木村伊勢守事、將軍御愼深うして、流罪に仰付けらるべき所を、氏郷色々申上げければ、伊勢守所領六十萬石を召上げられ、其身をば、氏郷に下されければ、即ち福島城五萬石添へて相渡し、伊勢守を氏郷與力にぞ仕りける。政宗事は、最前上

政宗上洛

洛の召文を下さるゝ時、諸人沙汰しけるは、政宗、誠に隱謀あれば、必ず上洛仕る事あるべからず。若し叛逆の心なくば、上京仕るべしと、申合ひける所へ、政宗、小勢にて上洛、殊更今度讒言により、御誅伐あるべく承り及び、金銀にて濃たる礎柱二本、馬の先へ押立て上りければ、秀吉公も御機嫌なり。富田左近大夫政春を召し、政宗京著の段、仰せられければ、富田畏つて、先年君未だ筑前守にて御座候時、播州御在國の砌、御謀叛の旨、支へ申上げければ、總見院殿、御疑ありて、召狀を下され、秀吉若し謀叛を思立たば、必ず上洛仕るべからず。先づ試に召上せんと御座候時、君御心に障りなければ、早速御上洛ありしにより、御真心明らか知られ、事故なかりしが、今度伊達が上洛恐ながら君の昔を存出し候と、申上げければ、此頃、氏郷、政宗中惡しき故、氏郷色々申上ぐると雖も、政宗滞りなく御上洛仕るは、謀叛は虚説たりしと仰せられ、殊更御前へ召出され、本領安堵を仰出でらる。氏郷、之を聞き、富田を恨み、是より中惡くなりけれども、元來富田は、氏郷と入魂にて不慮に政宗が事を申上げ、心ならず伊達最員の様になりければ、後は氏郷も別條はなかりしと

再び奥州
一揆

氏郷曾津
歸陣

かや。其年は、共に在京ありけるに、同六月、奥州九戸城主九戸左近大夫政實は、南部大膳大夫信直と、一門たりと雖も、所領の事に付き、不快になり、九戸の城へ楯籠り、佐沼・葛西・大崎の一揆と、一つになりて、五萬餘にて蜂起仕る旨、早馬京著仕りければ、秀吉公怒り給ひ、氏郷には早々御暇下され、出羽・奥州の侍共、氏郷下知に付き、一揆退治仕るべしと、仰出され、政宗をば京に置め置き、氏郷は急ぎ會津へ歸城せらる。御名代として、近江中納言秀次卿を大將にて、江戸大納言家康・上杉中納言景勝・淺野彈正少弼長吉・石田治部少輔三成・堀尾帶刀吉晴、六萬餘にて發向す。七月廿四日、蒲生飛驒守氏郷、先懸にて、出羽・奥州の軍兵共會津を立ち、上杉中納言景勝は、越後・佐渡の軍兵を率し、續いて奥州へ發向す。淺野彈正・井伊兵部少輔直政も、口々より亂入る。家康は、三峽に陣取り給へば、秀次卿は、岩手澤に御本陣なり。政宗名代として、伊達阿波守、一萬計にて、是も同じく出張す。路次の敵の城々攻落し、九月朔日に、氏郷、已に根剌・穴太江、兩城を取詰むる。淺野彈正も、氏郷に加はりて押寄せたり。先づ根剌城をば、關田丸を手當て、氏郷は穴太江城を攻落す

所へ、根剌城より一揆共三千餘、穴太江の城を攻めさせじと打出でたり。押の氏郷が兵、關長門守一政・田丸中書、得たり賢しと、東西より引包んで、餘さじと攻戦ふ。淺野彈正の陣より、淺野右近備を崩し、鎧冑を作つて、横合に突懸けしかば、關田丸終に打勝ちて、追崩し附入るに、根剌城に乘入り、火を懸けて焼立つる。高清水城は、政宗名代伊達阿波守宗繁、一手にて攻落し、一戸城は之を見て、自焚して明け退き、七戸二箇所の城には、奥方にて名ある侍共五千餘籠りつゝ、地の利宜しき要害たるにより、是へは上杉景勝向けられける。本庄越前守重長・直江山城守兼續・杉原常陸介親憲・隅田相模守・安田上總介・鐵尻高は、東尾城へ押寄せれば、南尾城へは、景勝旗本にて取詰められ、紺地に日の丸の旗は、景勝旗本を見知りたれば、城中には爰を最後に、弓・鐵炮を並べ、散々に防戦ふ。上杉先手松本内匠・甘糟備後守・武田三寶寺等、是に構はず、堀涯に備を立て、旗本の相圖を待つ。東尾城より突いて出でけるを、杉原常陸・安田上總は、中筋より懸り、直江・本庄は、左右を廻り、引包まんとしてれば、敵泳へず引入る所を、ひた／＼と乗込み／＼、退く時に攻落し、勝鬨をぞ揚げた

奥州一揆蜂起佐沼城を攻む附蒲生氏郷後詰一揆退治
井一揆二度蜂起秀次家康御下向奥州靜謐

りける。南尾城へは、景勝旗本四千餘にて、堀涯に押詰め、くるくると引包み、平攻に攻め、乗入りける。城中にも信夫・柳澤・田村・犬尾を始め、屈強の兵共、追手・搦手共に、突いて出で、黒烟を立て、挑戦ふ。景勝は、床几に懸け、吡の字の白旗・日の丸旗、只二本打立て、手廻り三百計りにて、小高き所に備へて、見物せられければ、上杉先手の兵共、千坂對馬・長權四郎・齋藤・甘糟・色邊・下條等、甲を傾け、手負・死人を踏越え踏越え、先陣を争ひ攻戦ひ、矢倉に火を懸けたり。折節、北風烈しくして、猛火城中に吹敷きたり。敵の兵共、迎も遁がれぬ所ぞ、一足も退くなと防戦ふ。甘糟・千坂等、先を先に乗入れしに、一揆の強兵等、景勝馬印淺黄の扇を見知つて、旗本へ切懸りけるを、鐵炮にて打竦め、濠所を得たり賢しと、本庄重長・直江・齋藤等、横合に馬を入れ、四方八面に追廻し、悉く切崩し、首取る。風彌強うして、城中一時に燃上り、楯籠る所の上下、二千餘焼死して、城は即時に乘取りける。越後勢、手柄高名様なりけるを、高所より景勝、見物せられければ、晴ならずといふ事なし。七戸二箇所の城、即時に攻落し、即ち爰に陣取り、人馬の息を休められける。九月二日に

七戸二箇所の城没

は、氏郷、先手にて九戸の本城糠部指して、押寄する所を、堀尾帶刀吉晴は、上の御檢使にて、毎日後陣に控へ、軍に逢はざる事を無念に思ひ、本陣を未明に忍出で、九戸指して駆付くる。氏郷が先手蒲生左門・蒲生千世・壽丸・横山備中守・北川土佐守・小倉作左衛門等、糠部の城を取巻く所へ、堀尾帶刀二千計りにて押著、先へ張出でんと仕られけるを、氏郷が先手、大將分の者共、今度の先陣は、氏郷一人承り候處に、狼藉なる御振舞、軍法を破られ候とて、遮り止めけるに、堀尾、大音揚げ、秀次の御下知にて、今日の先駆、吉晴承りたり、己等如何でか存すべきや。其處退候へと呼んで、蒲生が先備を押破りて、堀下へひたくと付、蒲生が勢、なじかは怵ふべき、堀尾に先をさせじと、関の聲を揚げ、一度に嚙と攻懸る。城中より目の下に見下し、差詰め引詰め射立て、手負・死人數を知らず、寄手攻呻んで見えける所へ、氏郷、銀の鯨尾の甲に、黒の馬に乗り、只一騎乗廻り、指麾を振つて、何とて軍法を破り候ぞ。一國一城の城攻に、人損じては、不覺の至りなり。堀尾も擧げられ候へと怒りければ、堀尾も氏郷先手も、攻口をくつろげ、柵・竹策を付け、兵糧詰にせんと觸廻し、遠卷にぞ

奥州一揆蜂起佐沼城を攻む附蒲生氏郷後詰一揆退治
井一揆二度蜂起秀次家康御下向奥州靜謐

したりける。九月六日、上杉景勝も一萬計りにて、糠部城へ詰められければ、氏郷の軍兵共、先を先に仕寄りける。明くれば七日に、諸口の寄手牒し合ひ、二の丸を攻取らんと押寄する。先日、本望を達せざる事を、無念に思ひければ、堀尾吉晴、旗を押立て、無二無三に懸りて、二の丸へ乗入りたり。城中の兵共、少も騒がず、三方の矢倉より指取り引詰め、弓・鐵炮を調へ、雨の降る如く、筒先を並べて、散々に射立てければ、堀尾が兵共、多く射伏せられ、痿む所を本丸より三方の門を開き混甲二十計り抜き連れて、切つて出でたるに、堀尾、なじかは怵ふべき、頼み切つたる郎等共、數十人討たせ、残る兵共は、大將堀尾諸共に、門外へ追出され、黒雲の風に、渦巻く如く、二町餘り敗軍しけるに、敵も追すがりてぞ出でたりける。家康家老井伊兵部少輔直政は、一色の亦備にて、門脇半町半に控へたるが、此有様を見て、直政、蠅取の馬印を振はずば、懸れ兵共と、眞先に喚んでかく。木役土佐守・川手向坂、之を〔脱ア〕主を討たせじと進む所に、何とかしたりけん。菅沼江左衛門と名乗りて、一番に鎧を入れたれば、殘兵共なじかは痿えし。續いて鎧を入れ、煙塵を立て、攻戦ふ。

堀尾吉晴
の武勇

左は越後勢、高所に立て見下し、右は氏郷が本陣にて、棧敷の前の晴軍、互に引くなと鬨る所へ、堀尾帶刀精兵七百餘にて、取つて返し、雲霞の如くなる敵を、兩方へ駈破り、脇をも見ず、二の丸へ乗入らんとす。城中の軍勢共、鎧・長刀の切先を揃へ、待懸け、二の丸の一番乗堀尾帶刀が兵何某と名乗りて、乗上げくする所を、突き落し切拂ひすと雖も、大將帶刀、大の眼を瞋らし、四方を下知して、眞先に飛入りしかば、相従ふ兵共、呼んで攻入りたり、氏郷が先手、竝に井伊直政が備、吾劣らじと乗入りしかば、七日の午の刻に、難なく二の丸を乗取りける。今日の働、堀尾に如くはなしと、諸手一同に稱歎せり。斯くて、本丸計りになりけれども、城中矢間配丈夫にして、寄手も攻め草臥れ、三十日餘、竹策攻にして居たるに、九戸權之丞返忠して、城主左近は、兄たりと雖も、討果て、左近首を持ち、降參に出でければ、九戸城は落ちにけり。然れども九戸權之丞をば、秀次郷、御成敗なされ、奥州則ち靜謐す。扱上使として、石田治部三成罷下り、政宗が本領米澤領を召上げられ、今度の戦功莫大なりとて、氏郷に加増として下されけり。葛西・大崎をば、替地として、政宗に

九戸落城
奥陣靜謐

奥州一揆蜂起、沼城を攻む附蒲生氏郷、後詰一揆退治
并一揆二度蜂起、秀次家康、御下向奥州靜謐

下さる。扱米澤城には、蒲生四郎兵衛居住せり。秀次・家康へも、將軍より御朱印の御書を遣され、景勝へも御褒美として、御直書に、正宗の御太刀一腰、山嵐といふ名馬一匹、瓢箪の御茶入を下されけり。斯かりける所に、其年の霜月、政宗は在京しながら、大和田八兵衛・牛起惣兵衛といふ者に、一揆起すべき由の廻文を持たせ、米澤領へ廻しける所に、二人の使心變して、其状を持ち、會津の城へ駈込みけるに、氏郷、此廻文を京都へ差上げられければ、秀吉公、御憤深く、政宗が首を刎ねらるべき所に、政宗陳じけるは、大和田八兵衛事は、某右筆にて候故、謀書仕候と覺え候。其仔細は、吾等判形の鵠鴿には、心覺の爲め、幽に眼を仕候。此觸狀の鵠鴿判には、眼無之候間、謀判の所を聞召し、開かれ下され候へと申上ぐる。實もとて方々より政宗が狀共、數十通召上げられ、御覺あるに、彼仁が申す所に、少も疑ひなかりければ、相違なく召出され、政宗は鰐の口を通れたる心地して、大息次きてぞ居たりける。されば政宗廿五歳、輩若たりと雖、東夷に生立ちて、謀策に長じ、狡點多く、佞殆んど安祿山が後を追ひしかば、度々の奸謀、皆申披き、氏郷が忠功・貞心、常に讒人の誹ありけるこそうたてけれ。斯かりしかば、出羽・奥州・彌・靜謐し、今は日本國中に、頭を上ぐる者なかりけり。されば妙九戸兩年〔城力〕の合戦、事故なく、大利を得し事は、皆蒲生が武勇より出でたりとて、氏郷が猛威の程を恐れぬ者はなかりける。

朝鮮蜂起井肥前國名護屋城普請

秀吉公、已に登龍の運に乗じ、汗馬の骨を積み給ひしかば、東南に雲治り、西北に風靜なり。故に萬乘を狹みて、四海を鎮撫し給ひしかば、靡かざる國もなく、隨はざる所もなし。然りと雖も、年六十に近付き給ふ迄、若君なかりしかば、愁歎し給ひし所に、故淺井備前守長政の娘に、淀の御方、其頃天下第一の美人の聞えありしが、此御腹に御懷妊ありて、天正十九年辛卯四月七日に御産如何にも容易にして、然も男子にてましくける。桑の弓・蓬の矢、玉葦の慶賀、天下に偏く、當家も他家も押並べて、御賀申されければ、門前恰も市の如し。諸大名御馬廻の人々、鎧・甲・太刀・長刀・馬鞍・小袖・金銀の捧物、諸寺・諸山より御祈禱の卷數、殿中庭上門前に充満たり。將

鶴松丸誕生

軍、悦び思召し、若君御名をば鶴松丸と名付け參らせ、寵愛日々に盛なり。禁中より忝くも勅使として、中山大納言親綱卿、聚樂へ參らる。上も下も押並べてさゞあき渡りてぞ悦びける。かゝる目出度き折節、御舎弟大和大納言秀長卿は、久しく病の床に臥し給ひ、針藥驗なうして、其夏の頃、薨逝し給ふ。大和紀伊伊賀三箇國の主として、殿下に輔佐し給ふ。國家の柱石と思召しける上、只一人の連枝にて、千年の春を契らんと、思し準ひ給ひしに、誘ふ嵐の烈しさは、棠棣の片枝散りぬれば、殘る梢も審しく、歎きの中に危ありて、悲歎の涙、未だ乾かざるに、若君鶴松丸、假初に惱み給ひしが、色々の養生治術を盡されけれども叶はず、七月初方忽に早世し給ひけり。秀吉公の御歎、申すも中々愚なり。今歲如何なる年なれば、國家の輔佐と頼み思召しける大和大納言失せ給ひぬ。一人の若君に後れ、天に仰ぎ歎き宣ひけるは、總角の昔より、同胞の情句深く、浮沈を俱に定め、或時は山野に帷幕を低れ、露霜に甲を晒し、或時は矢石の中に、兄弟共に死命を助け、互に心を一にし、四海の逆浪を静め治め、苦難を弓馬の道に經て、百人の紅にも彌、増したる弟を先立て、又は五

鶴松丸逝去

十の春過ぎて、思寄らざる優曇華の、花待ち得たる緑子を、朝の霜と見なせし事、こはそも如何なる事どもぞやと、悶え悲しみ給ひけり。歎きても返らぬ別の習なれば、五山の僧衆を供養し、滅罪生善の御弔、色々の御追善ありけれども、秀吉公の御思繼縊もなき、胸の雲晴るゝ間もなき涙の雨、餘所の神迄干しあへず、若しや、せめて慰めと、庭前の花を詠むれば、いとゞ無常の悲みを増し、南樓の月に嘯けば、忘れぬ思猶は深し。餘りに詮方なきに、清水寺に詣で給ひ、三日の御逗留にて、一つは若君亡魂の御弔の爲め、又は歎の深さを、若し忘れ給はんかとの事なれば、公家武家御供申しつゝ、南坂北坂に宿札を打ち、色々の幕を打廻しければ、東山の麓、時ならず春に遇へり。秀吉公は、公家武家の人々、諸道の達者を召され、清水寺に於て、色々御慰ありけれども、子を思ふ心の闇は晴れやらで、袖は涙の港川、堰止むべき様ぞなき。斯かる處に、秀吉公屹と思慮を廻し、よしや只思の炎に、身を徒になさんより、先年よりの念願を遂げ、朝鮮國を切隨へ、夫より大明へ打入り、四百餘州の皇帝とならんと、俄に思立ち給ひ、諸大名を召集め、秀吉公宣ひけるは、

古より異國の日本を攻むる事七度なり。然れども本朝より、異國を攻めし事、神功皇后より以來、其例を聞かず。千載の間寥々たり。然るに秀吉、下賤の中より出で、武勇の名譽長せるに依つて、一天四海を掌に握り、忝も三台槐門の上に昇る。然りとは雖も、六十に臨める身にて、たまさかに待ら得たる一子を失ひ、掌の中の珠、碎けて返らず、泉下の壁埋れて見えす。悲の思ひ胸に滿てり。多からぬ餘齡爰に極り、明日の命も知り難し。然れども弓矢の長者、四海の鎮撫の身として、此難に命を亡はん事、口惜き次第なり。今猶子にてある秀次に、關白の職を譲り、帝都の守護に殘し止め、本朝の政務を渡し、秀吉は大明に攻入り、四百餘州を手に入れんと思ふなり。去年朝鮮の使に便り、大明征伐の事を告ぐる處に、今に至る迄、兎角の返事なし。是答むべき第一なれば、先づ朝鮮を征服し、朝鮮吾に隨はざ、彼を以て先手とし、大明を初、天竺・韃靼・紅夷・交趾・暹羅・呂宋・南蠻に至る迄も、悉く切隨へんと思ふなり。諸大名在國の輩は、早々上洛仕るべしとぞ仰せける。こは如何なる事ぞと思ひながら、御誕尤と同じ、誠に珍しき御沙汰にてものかなと、異口同音に申上げ

秀吉關白
を秀次に
譲る
朝鮮征伐

ければ、秀吉公、御機嫌大方ならず、御酒宴初て萬歳樂を歌ふ聲融々たり。即ち加藤主計頭清正を召出され、來春、朝鮮陣思召し立つにより、肥前國名護屋に御馬を立てらるべし。主計は、早々筑紫に罷下り、名護屋御城、夜を日に續ぎ、普請成就仕るべき旨仰付けられ、御盃を下されければ、清正謹みて、之を頂戴しける時に、加賀の大守宰相利家、進み出でられ、人多き中に、今度手初の御城普請の事、主計頭承り候。冥加に叶ひ候と、左右に揖して申されけるは、清正身に餘りてぞ覺えける。翌日早天に、清正は京都を罷立ち、筑紫へ下りつゝ、九州の總人數を集め、夜を日に續ぎて、名護屋の城御普請を急ぎける。十月中旬には、奥州退治の大將秀次・家康・景勝・氏郷、大軍を引連れ、九戸一揆大將分の首共、酒に浸し持たせつゝ、皆々京著せられければ、將軍感悅斜ならず。即ち御對面なされ、各へ御感の御誕淺からず。十二月中旬には、名護屋御城も、普請きらびやかに出來せしかば、清正以下の筑紫大名達、皆越年の爲に、上洛ありければ、秀吉公早速の成功をぞ感じ給ひける。されば天下を、秀次に渡すべしとて、十二月廿八日、俄に關白を譲り給ひ、秀吉公をば太閤とぞ

申しける。斯くて來春、朝鮮國御進發の陣觸あり、内々人々つぶやきけるは、太閤御愁歎の餘り、狂人となり給ふかや。近年、兵亂打續き、一月の間も甲冑を放さず、去年の夏、東夷して、北條退治の後、奥州に凶徒残りて、去年といひ今年といひ、動亂ありしかども、此頃已に一統に治り、天下に敵といふ者なかりしかば、今は早や劔戟を箱物とし、弓を韃に納めつゝ、數年の苦勞を忘れんと、豫て有増あらしに樂みしに、今又思寄らず、高麗・唐土に到りなば、上下の費、人民の歎き、申すも中々疎なるべし。漢の武帝の武を驥の誇り、隋の煬帝の征伐を好みし禍、只今到りなんと、心ある人は眉を蹙め、又氣早なる人々は、扱も屈せざる志かな、弓矢に携ふる輩は、靜かなる境界にて暮すべき事、本意にあらず、誠に將軍は、あの氣にてこそ、天下は取り給ひたれ。あはれ武士の手本、心地よき人かなと、譽むるもあり。兎角知れぬ人なりとて、嘲笑も多かりける。

朝鮮征伐記第一終

朝鮮征伐記第二

朝鮮發向兵船仰付けらる井海陸御軍法

朝鮮退治の儀、諸臣の衆議一同なりければ、秀吉公、大に悦び給ひ、天下へ觸を廻し、先兵船を造るべしとて、船大將九鬼大隅守嘉隆に仰せて、伊勢浦・紀州浦にて、大船數百艘造られける。其中に第一の大船あり。名を日本丸とを號しける。其外、大あたけ・大關・小關・兵船・小早・目盲船、色々の船共の夥しき、耳目を驚かさずといふ者なし。船櫓・水主隠・矢切・鐵炮挾間・船張頭・物見窓、金銀の彫物、家々の定紋、種々の繪様を盡しければ、彼の晉の王濬が吳の孫皓を攻めし時、兵術を極めし弘舸巨艦も、斯くやと思ふ計りなり。其外中國・四國・九州、船便よき大名共、渡海の爲め大船を造り、兵糧を蓄へ、軍勢を促し、來年壬辰正月に先手を遣し、二月三月には、殘ら

秀吉兵船の定

す渡海すべしと仰出され、其定に云、

一、東は常陸より、南海を経て四國九州に至て、海に沿ひたる國々、北は秋田・坂田より中國に至て、其國々の高十萬石に付て、大船二艘づつ用意可有事。
一、水手の事、浦々家百軒に付て、十人づつ出させ、其手々々の大船に用可申候。若有餘の水手は至大坂可相越事。

一、藏入は高十萬石に付、大船三艘・中船五艘づつ造り可申事。

一、船の入用大方勘へ合候て、半分の通算用、奉行方より請取可申候。相殘る分は、船出來次第請取可申事。

一、船頭は、見計次第、給米等相定可申事。

一、水手一人に扶持方二人分、此外妻子の扶持遣し可申事。

一、陣中小者・中間以下女扶持、其者の宿々へ遣し可申候。是は今度、高麗・名護屋へ立申者、不殘如是可遣之事。

右條々無相違令用意、天正二十年の春、攝州・播州・泉州の浦々に令著岸、一左右

可有之者也。

天正十九年九月廿日

秀吉朱印

朝鮮陣軍役之定

一、四國・九州は高一萬石に付て 六百人

一、中國・紀州邊は 五百人

一、五畿内 四百人

一、江州・尾張・美濃・伊勢四箇國は 三百五十人

一、遠江・參河・駿河・伊豆を始めて東は何茂 二百人

一、若州より能登迄は 三百人

一、越中・越後・出羽 二百人

右之分、當年極月に至て、大坂へ可致參著候。出勢の日限、重て可被仰出候。守其旨、宿陣不指合様に、其意を成可申者也。

天正十九年九月廿日

秀吉朱印

朝鮮發向兵船仰付けらる并海陸御軍法

朝鮮陣軍役の定

就朝鮮陣掟條々

- 一、人數押の事、六里を一日の武者押と定。乍去在所之遠近、六里の内外、奉行計次第たるべし。即宿奉行定の條、無相論、萬順路に可有事。
 - 一、旅宿の宿賃は、出し申間敷候。薪、秣等の代は、宿主と相對し出し可申事。
 - 一、津々浦々番等に有之者、屋賃の儀出し可申候。鐵炮の者などの儀は、其主人出し可申事。
 - 一、宿泊にて扶持方、馬の飼料可行之事。
 - 一、押買、狼藉、追立夫。其外萬非儀有間敷事。
 - 一、泊々宿々に於て、理不盡之儀仕出す者は、當座に咎かゝり、口論に及間敷事。其主人の假名、實名能々記置、其上を以可相斷事。
 - 一、於何方にも、徒者一揆の徒黨がましき様子、潛に可告知、一廉御褒美可下事。
 - 一、里々に早道二人宛置候て、名護屋と大坂との用所、早速相叶様に可有之事。
- 右條々堅可相守、若違背之儀有者、奉行迄可告知者也。

天正十九年九月廿日

秀吉朱印

斯くの如く二三通相認め、御陣觸ありけるは、來年正月に先陣の軍兵、早く洲仙に進み、二月・三月には、諸軍勢悉く渡海致すべし。東國の軍兵は、船手に便宜あらざる間、名護屋の御本陣に在陣仕るべし。南海・西海は船手なれば、其國々の住人を皆、朝鮮へ渡海さすべし。大坂御留守並に京都守護には、當關白秀次公、洛中の仕置は、古田兵部少輔種長なり。情、舊記を考ふるに、足利公方等持院尊氏公、天下草創の後、四海大に亂れしに依つて、筑紫には南朝の帝、吉野殿より、征西將軍宮懷良親王を置き給ひしに依りて、親王より、年々に軍兵を遣し、大元・高麗を奪ひ、近年は周防國大内助義興・同義隆が兵共、又は九州の一揆共、年々に大明へ渡り、宦靡を搔擾り、津泊を侵奪し、其輩、昔日神功后皇三韓退治の佳例を追ひつゝ、旗の紋には八幡と書き附けたり。是に依りて大明人、日本の兵船をば八幡の倭寇と號す。是よりして、海賊をば押並べて、八幡とは呼びけるなり。さる程に、將軍秀吉公は、家康・景勝・利家を召集め、評定ありけるは、先朝鮮へ使者を遣し、去年の御返事を申上げざるを答

倭寇を八幡と稱する由來

め、彼が心を窺ひ量り、大明へも使節を遣し、其左右により、秀吉自身渡海あるべしとて、丹波國住人内藤飛驒守如安、其頃文學の譽あれば、是を大明の使節と定め、小西攝津守行長に差添へて遣さる。行長は遠く己が聲名を播めん爲に、内藤を改め、小西と稱し遣しける。小西飛驒守如安は、先立ちて渡海し、朝鮮王へ書翰を付け、夫より朝鮮の案内者を乞ひ、大明へ入らんとぞ進みける。

朝鮮進發軍勢備定

先年は二備に分つべしと議定ありて、一方の先手には、小西攝津守行長を大將にて、宗對馬守義智・松浦刑部卿法印・鎮信有馬修理大夫・大村新八郎・宇久大和守等、其勢一萬八千七百人、一方の先手には、加藤主計頭清正を大將にて、龍造寺又八郎正家・同家來鍋島加賀守直茂・相良宮内少輔義次を初、二萬二千八百餘人、小西一組と圖収にて、二日代りに先を懸け、三番は黒田甲斐守長政・大友豊後守義統、其勢一萬二千餘、四番は島津薩摩守義弘を大將にて、毛利壹岐守高橋九郎・秋月三郎・伊東民部

船手の軍兵

丞・島津又七を先として、其勢一萬七千餘、五番は福島左衛門大夫正則・戸田民部少輔吉俊・長曾我部土佐守元親、其勢合せて一萬二千三百人、六番は蜂須賀阿波守家政生駒雅樂頭正俊、其勢合せて一萬二千七百人、七番は小早川筑前守隆景を大將にて、毛利久留米侍從秀包・立花左近將監宗茂・高橋主膳正・筑紫上野介等、相集めて二萬千七百人、八番は毛利安藝宰相輝元・宇喜多備前宰相秀家、其勢合せて四萬五千人なり。船手には九鬼大隅守嘉隆・藤堂佐渡守高虎・脇坂中務大輔安治・加藤左馬助嘉明・來島出雲守通泰・菅平右衛門尉有長・桑山小藤太兄弟・堀内安房守氏常・杉若傳三郎等を大將にて一萬餘、海陸の軍勢都合廿五萬四百餘人の著到なり。右の定の如く、早々罷越すべし。但し順風なく候はゞ、一日に獨々見届け、島傳ひに罷越すべし。自然日和悪しきに渡り候て、馬一匹一人一人なりとも、取落し候はゞ、曲事たるべし。日和能く候に油斷して罷越さるは、越度たるべし。次に書付の人数の外は、悉く名護屋に在陣仕るべし。一人にても渡海仕候はゞ、曲事たるべき事。次に、今度御陣は、船肝要に候間、船數用意一分の手柄に候間、諸勢船著に急ぎ、船奉行共をして

割符請取らしめ、渡海の衆次第に繰越し申すべく候。朝鮮の地へ相越候は、手負の船共、其主人として奉行を一人相著け、對馬へ差戻し、組々人數罷越すべし。次に日本へ出仕の儀、朝鮮王御請を申さば、右定の次第繰に渡海せしむべし。自然御請申さず、異議に及ぶに於ては、朝鮮近き島々へ、人數悉く移し、船揃仕候て申談じ、朝鮮の浦々へ一度に著岸せしめ、陣取を堅くして、普請丈夫に申付くべし。然らば則ち九州・四國・中國の人數は申すに及ばず、淡路衆九鬼以下、右同前に一度に罷越すべきものなりと、一々に仰出されける。扱又、將軍御本陣肥前國名護屋在陣の人々には、江戸大納言家康・大和中納言秀俊・加賀宰相利家・上杉宰相景勝・織田内府信雄・入道常眞・同津の上野中將信兼・結城參河少將秀康・蒲生會津少將氏郷・佐竹常陸侍從義宣・伊達陸奥侍從政宗・最上出羽守義光・森右近大夫忠政・丹羽五郎左衛門長重・京極大津侍從高次・里見安房守義堯等を初とし、宗徒の大名・小名百廿三人、都合十萬五千四百十五人とぞ註しける。

名護屋在陣

朝鮮國由來

抑朝鮮國と申すは、古の箕子が封國なり。周の武王、殷を亡して後に、洪範の書を箕子に受け、即ち箕子を朝鮮に封じ、八條の約を施す。此故に淫盜なく、門を夜扃さず、文條を省簡して信義を用ひ、聖賢の作法厚きを得て、柔謹風をなす。秦には遼東の外徼に屬し、漢の時には郡縣の如くにす、五鳳元年に蘇代公といふ者あり、大なる卵を蘿林に得たり。此卵かへりて嬰兒と成り、長じて聖徳あり。六村之を異として、立てて崇とし、主君と仰ぐ。時に闕英氏に一の井水あり。神龍、其井の中より顯れて、右の脇より一人の女子を生ず。又聖徳あり。人之を二聖といふ。高麗百濟〔新羅〕鼎の如く峙ちて、三韓に王たり。唐の高宗皇帝の時に至りて、新羅強大にして、高麗百濟を併せて持つ。其後五十五世を経て、衰微して高麗の王建に降る。是れ即ち、海梁貞明六年なり。王氏三十三世迄高麗を持つ所に、三十二代の王顯無道なり。國相李仁人謀叛を起し、之を弑しつゝ辛氏の禍と昌とを立て、主君としけ

朝鮮の二聖

李成桂朝
鮮王とな
る

るが、程なく皆廢せり。國民、前の亡君王氏を慕ひて、國君を定め、王瑤を立つ。未だ一年もせざるに、門下侍郎李成桂、其君王瑤を廢して、自立して王となり、初て高麗の國號を改めて朝鮮と號す。之れ明の大祖洪武廿五年の事なり。李成桂終に明朝へ朝貢を奉り、年號正朔を受けて、今に子孫相續いで、當今を李暎王といふ。朝鮮に入道あり。京畿道といふは、即ち漢陽城の居中なり。江原道、咸鏡道、是れ何れも北國の兩道なり。平安道、黃海道、即ち平壤筋にて、東道の二道なり。忠清道、慶尙道、即ち海の東南にあり。全羅道は海の西南にあり。以上海道八箇道、其北は女眞國に隣り、東北は兀良哈に連り、其末は蝦夷と一つにして、日本の奥州と相對せり。朝鮮の西北は、鴨綠江といふ、入海に到る。之れ即ち大明の境なり。東西二千里、南北四千里、大明の遼東の東南にあり。三面は濱海にして、日本と遙に對す。只一海を隔てたり。釜山海は、朝鮮の海口、日本人の到る津なり。對馬より其渡四十里、一日にして渡るなり。

朝鮮陣濫觴

今度、朝鮮退治の事、將軍俄に思召立つと雖も、其志一朝一夕の故にあらず。秀吉公未だ猿若と申せし時、初て信長公へ召出され、小者・中間並の奉公たり。信長公も其頃は、上總介とて、尾張の國主尾張左衛門佐義忠家老にて、隣國の敵と挑み戦ふ最中なれば、秀吉公も方々御陣の供し給ふ。此彼へと勞功を積み給ひしかば、信長も他に異に思召して、木下藤吉と改名させ、五十石の所領を下し給ひ、初て侍並にぞなされける。是れ秀吉廿五歳の時とかや。其翌年永祿五年の秋、美濃國松原瀬にて、齋藤龍興と信長合戦ありし時、敵方勝に乗り、味方危く見えし時、秀吉立泳へ、諸人の目を驚す程の鎧を、一時の中に兩度合せ、大敵を突退け給ふに、味方大利を得、秀吉も鎧疵二箇所負はれしかば、信長深く感じ給ひ、二百石の所領加恩し給ひけり。夫より晝夜粉骨を盡し、永祿九年九月に、秀吉三十歳にて、初て洲股川の取出預り、武功を以て美濃の地を切取りしかば、信長彌々御感ありて、其切取地三

秀吉松原
瀬合戦に
於ける軍
功

千石ありしを、残らず下されける。是より程なく、美濃一箇國、信長切隨へ給ひて、功臣の恩賞を行はれけるに、一番に秀吉に三萬石を下され、爾來次第々々に經上り、江州横山の城主となり、六萬石を領せられけるぞ目出たけれ。秀吉の氣象、第一飽迄大膽不敵にして、忠義の志厚く、常に古人に馴昵みて、戦場の物語を聞く事を甚だ以て好まる。其嗜眞實にして、何事も大爽に、渡世の營みには、極めて愚鈍なれ共、軍の道には、十を悟れる才智、不學して道を知る事、孫子、吳子が術に叶ひ、懸引自由を得たりける。去れば信長の好み給ひし器量は、第一、勇才兼ね備り、國家の助にもなるべき人、第二、名士にはあらざれども、忠義の志厚く、武勇にはたはりありて、人數を安く押廻すべき力逞しく、駈引圖を脱れざる人、第三、自身手柄度々に馨く、萬事の吟味素直すたはにして、最眞偏頗なく、戰場にて諸人の目符めじろしとなるべき人、之をぞ本に好み給ひしかば、秀吉の素性なじかは信長の御目に入らざるべき。日々寵愛彌々増し、かば、穰直も晏嬰の薦を得ず、孔明も徐庶の智に及ばず。戦功重りつゝ、程なく大名の列に加はり、羽柴筑前守に任じ、西國退治の大將として遣されし時、信長公、

常にさゝせ給ひし朱傘並に茜の御小袖を免下され、中國十四箇國一圓に下し給はり、早速毛利を退治仕り、其勢に九州を退治あるべし。後より御人數追々下さるべしとぞ仰出されける。其勢、只韓信、張良が高祖に仕へしに異ならず。秀吉心早き人なり。殊に此時、寵遇餘人に勝れ、御傘を免し下さる上は、早速中國を討ちて、毛利、宇喜多、浦上、赤松等一々に退治せしめ、勝を瞬目の中に得つゝ、天下の一統、五年に過ぐべからずと、聞くも冷しく申上げられければ、御前伺候の人々も、皆快然の氣をぞ催されける。信長公、誠に顔色打解け給ひ、御酒宴始まりて、數盃の興を添へられければ、秀吉頭を地に付けて、恐多き儀にて御座候へども、此上は先手にての賞罰、駈引の下知を、秀吉次第と仰付けられ下さるべく候。其仔細は、秀吉敵地に討入ると雖も、駈引の是非、士卒の忠否、戰場甲乙の所、一々安土迄註進し、度々の品品、皆御下知を伺ひ奉るは、道遠くして其時刻延び、又士卒等秀吉が下知を輕んじ、大功必らず立つべからず。去れば軍陣の事に於て、駈引、挑戰、所待に利を得、進みて勝を決し、退きて後を全する所、一々に直に見計ひ、又は軍兵共の剛臆を吟味し、

賞罰を行ひ、萬事の沙汰、秀吉自分に支配仕らば、諸人皆軍法を重じて、大功速になり候はん事、韓信が眞王の印を得て、齊國立所に治まりしに異なるべからず。是れ誠に將も能くして、君不御者勝と、孫子が示す所らずや。今秀吉、身不肖なりと雖も、大將の號を免せられ、朱の御傘を下し給ふ上は、彌、先手の賞罰、我儘に申沙汰し候様に、御免しなされ候はゞ、降參の者をば、即ち是を赦宥し、従はざる者をば、立所に攻め亡し、機に臨み變に應じて、自由に征伐仕度候。今御旗下に吾と肩を並ぶる大名を算へ候に、柴田修理亮勝家を始め十三人あり。然れども彼等を差置れつつ、此秀吉に西國退治の大將を仰付けらるゝ事、天運の至りとは申しながら、併君の御鴻恩の所、勝げ計るべからず。只今御側に近習仕る野々村三十郎・福富平左衛門・菅谷九右衛門・森庄藏・矢部善七等は、一手の大將仕るべき者なり。されども彼等を人持になされ、御先手へ遣され候はゞ、旗本手薄くなり候に付き、少身にして奉公の功を積ませ、中國御手に入りなば、日本國中誰か敵對仕るべき、彼近習の輩に一箇國宛下され、大名に取立て給はゞ、忠賞は後輩の義信を勧め、大功は日ならざるに速成たるべし。さ候はゞ、秀吉は夫より九州を切隨へ、大友・島津・阿蘇・龍造寺・菊池・戸次・松浦・大村・有馬等を手に著くべし。扱筑紫九箇國の一年の所務を下され候はば、爰にて勢を揃へ、一箇國に一萬の勢積にして、九州にて九萬なれば、兵糧を蓄へ大船を造りつゝ、高麗へ攻め入るべし。秀吉が戦功の恩賞と思召し、朝鮮を切取りに仕るべき旨、一通りの御朱印を下さるべし。御教書なくしては、朝鮮に入るとも、八幡が強盜かと咎あるべければ、御朱印を先立て、君の御太刀の光を以て、朝鮮を切隨へば軍に名ありて、人民恐隨ふべし。朝鮮全く手に入らば、多くある若君の中、御一人大將として渡海させ申し、大明へ切込むべし。四百餘州とは申すとも文學長袖の國なれば、討隨へん事容易かるべし。片端に切伏せ、四百餘州の大王、北京の皇帝を生捕り、日本に引渡し、六條河原に面縛し、君の御勇武を震旦に顯して、夫より五天竺に攻入り、馬の通路・船の通だに候はゞ、地獄・極樂迄も切入り、音に聞ゆる閻魔大王をも、日本へ御禮申上げさせ、牛頭・馬頭の鬼共をも日本に渡しつゝ、一に頭を刎ね、三國一統に打治め候べしと、憚る所なく申上げられければ、御前伺候

の人々之を聞き、皆興を醒して驚きあへり。信長公も彼が大膽を甚だ感じ、大に笑はせ給ひて、西國成敗の事は、安土へ註進するに及ばず、如何様にも計り侍れと、直に免し給ふ。見る人聞く人、押並べて舌を振はぬはなかりけり。去るは秀吉の天性、智謀、雄略人間の及ぶ所にあらず。孫子、李靖が難とする軍術、成らずといふ事なく、郭子儀、李良器が大功も、今を恥づる計りなれば、先づ播州にては、佐用、上月を退治し、三木の別所、神告、志方、高砂、野口、淡川、波志谷の城々、三年の内に攻落し、宇野間島を切隨へ、因幡にては、鳥取城を取詰め、山名豊國を手に付け、吉川隆久、中村春次、森本等が首を取り、備中表にて、巢蛛塚、冠の城、河屋、高松等の要害を攻落し、山崎、寶寺にて、明智と合戦、江北柳が瀬にて、柴田に切勝ち、加賀に小山、越中に礪山、四國には長曾我部、安宅、十河、道前、道後、村上、得井を手に付け、西國島津、東國にては小田原の北條一類、奥州會津、白河迄、十年の内外に切平げ、六十餘州を一統し、信長公の御前にて、申されける廣言に少も違はず、只今朝鮮征伐し給ふぞ勇々しき。信長公、元來猜疑の心ありて、功ある智臣を忌み給ふ。秀吉早く推量し、日本にては恩賞を受く

秀吉中國
表の軍功

まじ、高麗を切取に下さるべしと申上げし事、韓信、彭越が曾て知らざる所にて、張良のみ獨知る所なり。高祖の寛仁大度なるさへ、蕭樊囚執して韓彭、植醢たりき、矧や中人以下の主君に仕ふる輩、高鳥盡良弓藏、敵國亡謀臣亡といふ事を知らざるべけんや。されば秀吉公、了簡の如く、荒木攝津守村重、佐久間信盛、林佐渡守光長、水野下野守信元、伊賀守仲重等、忠功ある大臣數輩、身を亡し、信長公も明智が爲に亡び給ひしこそ、功成り名遂げて、身退くは天の道とは知られける。誠に秀吉公は、物ごと眞實を本とし、少も飾心なく、今迄敵對の者共も、咎を謝して降參し、一度頼と見給ひては、末代迄變らざる吾心を、天下の人の肺腑に置き、少も疑心なく、第一無欲にして國郡を割與へ、金銀を配ち施し給へば、東國にては家康、里見義堯、千葉國胤、宇都宮、佐野、結城晴朝を初、北國にては、上杉景勝、佐々成政、西國にては、島津、大友、皆悉く上洛し、秀吉公を尊敬し、親崇する事、日々に盛に時々増しかば、帝都の繁昌四海の泰平、此時にありしこそ目出度けれ。誠に秀吉公賤しき人なるにより、或時は民百姓の好となり、或時は小者、歩走の雜人となり、淺ましき有様たりと雖

も、第一は信長といふ明君を主と頼み、第二に秀吉慷慨の大志ありて、才智大剛無
雙なりしにより、年を追ひ月を遂ひて、次第に經上り、攝政關白の訓禮を極め、一天
四海を掌に握り、天竺・震旦迄威光を輝し、終に位正一位に至り、豊國大明神と祀ら
れ給ひしも、只大方の事にあらじと、渴仰の頭を傾げざるはなかりける。

秀吉公書翰を琉球國に贈る

朝鮮國征伐の事、彌・定りしかば、大坂の城在番衆、京都在番衆も夫々に上洛し、面々
請取の處へ集る。東國・北國の軍勢も、毎日引も切らず京都に上り集る。國々にての
船用意、在々所々にての支度、中々夥しき事共なり。洛中の繁昌、大坂・堺・大津の賑、
言語を絶する計りなりしかば、所々の富貴津々として泊り、商賈人時を得たりとぞ
見えたりける。秀吉公宣ひけるは、琉球國は、大明と日本の間にありと雖も、去る
天正十一年癸未の秋、日本へ使を渡し、自今以後、毎年貢を入れつゝ、日本へ隨ふべ
しと和睦を乞ひしが、其後終に其沙汰なし。今度能き序なれば、一通の書翰を遣し、

其不信を責むべしとて、一書を遣はされける。其詞曰、

大日本國豊臣秀吉朱印下

琉球國

秀吉の琉球國王に
送れる書翰

夫吾邦百餘年、群國爭雄、事書不同軌文。予也隆〔際イ〕〔下イ〕誕産之時、以有可治天下之奇
瑞。勃興于蓬萊順、武威之運、不經十年而不遺。彈丸黑子之地、國中悉一統也。六十
餘州既入殼中、故殊域遐方來庭者不少、吾今起百萬大兵、將征大明也。蓋非吾
所爲、天所授也。叢爾琉球未通聘帛、故先雖欲使群卒討其地、原田孫七郎以
商舶之有利故、屢往來于其地、頃日俾近臣達告吾曰、速赴琉球、說本朝征明國
之旨、則可解辯獻筐而來享者不可疑焉云々。不出帷幄而次勝千里者、古人至
言也。故聽揚夫言而暫宥之、來春可營九州肥前、不移時日可偃降幡而來服。若
匍匐膝行遲滯、則其必遣大兵、燒琉球國內、虜其島民而斬國王、懸頭於闕下者、如
指于掌、汝勿悔、不詳。

天正十九年

と書認めて、琉球へ遣されければ、琉球王中山尙寧大に驚き、貢臣の鄭禮を使とし

秀吉公書翰を琉球國に贈る

て、秀吉の書簡を齊へて、大明國へ遣し、福建の巡撫使趙參魯を以て、日本倭寇大軍にて、朝鮮と大明へ入寇せんといふ由を、朝廷へ奏聞し、諸臣に觸れ送る。又閩人丘福旺は、近年薩摩に行きて、許儀と名を變じて醫者をしけるが、日本より朝鮮を伐つて、大明へ直に入寇せんといふ事を、慥に聞いて驚きしに、目のあたり日本の諸將士卒等が、甲冑を輯め、大船を調ふを見て、大に騒ぎつゝ、急ぎ大明に歸り、同郷の朱均旺と相談し、福建の守臣に依つて、九月には日本人寄すべしと告げ知らす。守臣之を以て朝廷へ奏聞しけれども、明帝未だ曾て恐れ給はず、諸大臣も之を事とせず。只海邊の兵士に勅して、番船を調へ用心する計りにて、さまで驚く事なければ、琉球も嘲笑ふ計りにて、況して日本へ仔細の返事もなかりけり。

朝鮮國御先駈の軍勢京都進發

年光矢の如くなれば、天正十九年も暮れ、新玉の春に立歸り、明れば文祿元年正月朔、在京の大名・小名出仕の儀式を調へ、太閤御殿並に當關白秀次公御所へ出仕あ

秀吉小西
行長加藤
清正に制
札を與ふ

り。同じく元三の祝も兎や角と事濟みければ、正月五日、加藤主計頭清正・小西攝津守行長を召出され、今度、朝鮮國征伐の御先駈け仰付られ候。清正には、鍋島・相良を相添へられ、行長には、宗對馬守・松浦・有馬・大村・宇久を相副へられ候間、早々筑紫に罷下り、三月上旬に朝鮮國に攻入るべき旨、秀吉公直に仰出され、清正には、朝鮮國にての制札、並に軍書一卷に南無妙法蓮華經の御旗を下し給ふ。此御旗は、秀吉公、中國拜領の時、信長公より免し給ふ吉例に任せ、下し給ふ。行長にも、制札並に軍書一卷、其頃日本無雙と聞えたる大黒の御馬に、梨子地の鞍置きて下し給ふ。兩人面目色に顯れてぞ見えたりける。清正申上げられけるは、御當家吉例の御旗を下され候事、一世の名聞何事か之に如かざらんや。御旗を差し、猛威を天竺・震旦に顯し、御威光を以て、名を異國に耀し候はん事は、武家の本望、只此一儀にありと申上げられ、行長と同じく、御前を退出し、妙法の御旗を押張りて、京都を立ち、行長は小西の家の符なれば、紙の藥袋に朱の丸を書きて馬印と爲し、大黒の御馬を真先に引かせ、正月五日に、同じく京都を打立ちければ、二組の軍勢四萬餘騎も、同日に京

を打立ちける。其行列の勇々しさ、見物の上下目を驚せり。清正・行長等、已に先立ちて下りければ、黒田甲斐守長政・大友豊後侍從義統・島津兵庫頭義弘・毛利壹岐守・高橋九郎・秋月・伊東・島津又七郎・福島左衛門大夫正則・戸田民部少輔吉繁・長曾我部元親・蜂須賀阿岐守家政・生駒雅樂頭正俊・小早川侍從隆景・立花・久曾以下の大名・小名押續きて、毎日引も切らず、京都を立ちて打續く、其勢の夥さ、肝を消す計りなり。吾朝は申すに及ばず、唐土・天竺・韃靼・南蠻も未だ是程の大軍を起す事、有難かりし事なりと、思はぬ者こそなかりけれ。斯くて鬧しきに紛れて、正月も經ち如月きぐらぎにもなりぬ。二月には、當關白秀次公の聚樂城へ行幸あり、三日の御帶座、色々の御遊觀ありしかば、太閤秀吉公も日々に行在に參り給ひて、天氣を伺ひ奉り、事故なく還御なされしかば、上下太平の風雅に、千秋萬歳を祝ひ參らせける。秀吉公近日京都御進發に定りける砌、家康・輝元・秀家等御前に參り、申上げられけるは、殿下は名護屋に御馬を立てられ、遠く朝鮮の御下知あらん時に、大明・朝鮮より書翰の往來あらん事心定なり。されば文學の才ある輩を、召連れられずば、此儀に迷惑なる

べしと申上げられければ、秀吉公聞も敢ず、大明・朝鮮兩國へも、吾朝のいろは字を知らせば、書狀の往來其分宜しかるべし。何ぞ足纏に物讀・筆者を召連るべきやと宣ひて、更に御承引なかりしが、其夜熟々と思案ありて、相國寺の承兌長老・南禪寺の靈三長老・東福寺の永哲長老三人を選出し、名護屋御供とぞ仰出されける。京都御進發は、三月廿六日と仰出されける所に、陰陽頭・天文の輩諫言を奉りけるは、來る廿六日は、四箇の惡日と申して、此日出づる輩歸る事なしと、舊記に載せ候處、證據分明なりと、頻に支へ申しければ、秀吉公聞召し、吾西國に赴くには、其道船路なれば、船中の吉兆に出でて、覆らぬこそは目出度けれ。彌、廿六日に御出馬あるべしとて、大に打笑ひ給ひ、敢て御承引の體なかりける。去は傳へ聞く、齊の公子心は、慧星の妖を恐れず、宋武帝は往亡の日に、吾行きて彼亡ぶと宣ひつゝ、大利を得給ひし昔の後に異ならず。天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かずと、大賢亞聖の名言、時千載を隔つと雖も、古今一途の良將なりと、傳へ聞く輩迄も感涙を流さぬはなかりける。誠に凡人の癖として、陰陽向背の日取にかゝはりつゝ、時至るを取

らずして利を失ふ事、尋常なるに、偕も潔き將軍かなと、心あるもなきも手を拍つて稱歎せり。

秀吉公京都御進發并嚴島御參詣附阿彌陀寺御一見

文祿元年二月朔日より、先陣小西攝津守・加藤主計頭を先として、國々を立ち、毎日怠る間もなく押詰め、其軍勢の夥しき事、言語を絶つ計りなり。海道筋は、大軍引も切らず通りけれども、軍法正しければ、聊かの争論もなく、次第を打守りたりける。漸く先勢も名護屋へ押集おしつせひぬと註進ありければ、三月廿六日、將軍秀吉公、都を立ちて打たせ給ふ。行列の法度正しき體、古今あるまじき事に、見物の老若鬪る聲々、岐に滿ちくたり。秀吉其日の御裝束には、梨地緋絨の御著背長、鍬形打つたる星甲、赤地の錦の御直垂に長光の御太刀、竝に四尺八寸の金熨斗付の木太刀に、紅の腕貫打ちて、二振帯び給ひ、熊の皮の作り鬚にかね黒なり。壺胡錄に朱滋籐の御弓真中握り、華やかに出で立ち給ふ。八寸に餘たる月毛の御馬に、烏毛の馬鎧紅の大總懸け

秀吉名護屋へ出發

てぞ召されける。御伽衆御側衆などはいふに及ばず、異形なる出立ち、若やかなる

裝束、金銀の旗指物・朝日に映じて耀き渡り、奇麗の壯觀目を驚せり。御前備の弓・

鐵炮・御長柄、段々に行儀を守りて押行く。御馬印金の瓢箪日の光に耀きつゝ、ゆる

ぎ近付く有様は、満月の山の端を出づるに異ならず。洛中の人々は申すに及ばず、奈

良塚の津・大津・大坂・尼崎などより、見物に上り集つひ、棧敷つを打ちて充満たれば、東寺・

四塚・造道・鳥羽・横大路・水垂・淀・赤井・大渡迄、見物の輩彌が上に群集して、人は顧る

事を得ず、馬車は所狭く立兼ねたり。見物の群集を御覽ありて、秀吉公御機嫌斜な

らず。其夜は、攝津國茨木に御宿なり。廿七日より、後備の勢日々に打續き、卯月

五日・六日頃に漸く行き滿ちぬ。肥前國名護屋を御居城と定められ、九州勢として

拵侍りぬ。抑、名護屋と申すは、昔日大友の挾手彦が遣唐使にて、松浦瀉より船に

乗り、漕出でたりしに、夫の別を悲みつゝ、松浦佐世姫が領巾麾の嶺に上りつゝ、唐土

船を慕ひ添ふとかや。秀吉公は、藝州廣島に御登りなされ、二三日御逗留ありて、又

宮島へ御參詣ありて、朝な夕な海上を、嚴島指して漕出でぬ。數百艘の船共、艦

名護屋の古跡

秀吉嚴島參詣

秀吉公京都御進發并嚴島御參詣附阿彌陀寺御一見

拍子を踏み揃へ、船歌事々しく謠ひ出し、さゞめき渡りて、宮島へ上り給ふ。社僧・神主威儀を制へ、容顔美々しき内侍共、假粧に眉作り、行文長き黒髪いみじく結下げ、耀く計りなる出立にて、船場へ御迎に罷出で、様々御祝儀申上げければ、秀吉公廻廓へ登り給ふ。げに神慮も納受ましますにや、天晴れ昇る日影も長閑に、海上浪平かなる眺め、浦々島々霞渡り、心も空になりぬ。當社の景氣を拜し給ふに、後は翠嶺高くして松風塵埃の垢を清め、前には巨海浪靜にして、晚汐弘誓の趣を示せり。月海上に浮んでは、汀の砂照渡り、珠を撒くが如し。和光同塵の利益は、様々なりと雖も、跡を海畔に垂れ、鱗を助け給ひし因縁、誠に有り難し。參詣・禮拜の輩迄も、八相成道の結縁は頼もしくして覺えける。此御社と申すは、推古天皇の御宇に、内舍人佐伯の鞍職くらひとに神説のありて、此所に現れ給ふとかや。秀吉公、様々の法施・色々の寄進を奉り給ひ、夫より長門の國府に渡り給ふ。仲哀天皇・神功皇后の御社を拜み給ひ、赤間ヶ關を越し、阿彌陀寺に詣で給ふ。寺の體を御覽するに、山水木立何となく物舊り、垣に苔むし、瓦に松生ひたり。香煙窗を出でて、心細き鉦の聲、上品の臺

も目のあたりに、來迎の三尊、九重の蓮の上に最貴く並びおはします。莓苔人跡もなく、寺門の内の塔婆朽つるものあれば、又新しく立添ひて、げに無常は數添ふ世の慣、老少不定の有様を示せり。禪場塵なうして、夕の嵐老いたる松に響き、梵刹人稀にして、夜の月舊りたる扉に事問ふ寺院、年經にけりと覺えて、誠に殊勝にぞ覺え給ひける。當寺は、元曆年中より草創たれば、安徳天皇の御影・平家一門の畫像を一覽ありける折節、浪の音高く聞えければ、秀吉公取敢ず、

浪の花散りにしあとの事問は、昔ながらも濡るゝ袖かな

寺中の老僧罷出で、佛殿より世々の歌人の短冊數多取出し、御目に懸け奉りければ、御機嫌一方ならず。細川藤孝入道玄旨・山名禪高・木下半助など御縁に伺候し、折に觸れたる御物語申上げ、紹巴・唱叱など、當座仕りければ、一入の詠に夏の日も短き心地せさせ給ひ、暮にかゝり御立ちあり。其外道中の古跡・名所共残らず立寄り、御見物なされ、四月十六日に名護屋城に著き給ふ。在名護屋の大名・小名、家康卿・景勝・利家を始め、若やかに出立ち、美麗なる小性二三人宛召連れ、御迎に出でられ、色々御

祝儀申上げられければ、上も下もさめき渡りて、名護屋の御城へ入らせ給ひけり。遠國・近隣の人々、諸寺・諸山の神官・僧侶・社人等、又長崎・博多・唐津・小倉の名ある町人等、雲霞の如く色々の進物を捧げ参集す。御著陣目出度き旨、御悦申上げしかば、庭上門前に充満ちて、奏者の取次も仕敢ず、御城廻市の如し。御後備、日々に著きければ、總軍勢人馬の扶持水手・楫取に至る迄、四十八萬人の兵糧、毎日懈怠なく充行ひし事、誠に漢の蕭何が古も思出されけり。

朝鮮征伐記 第二終

朝鮮征伐記 第三

諸軍勢名護屋に集る

文祿元年三月廿六日に、將軍秀吉公、帝都を打立ち給ひしと、兼々觸れられければ、二月朔日より、諸軍勢、己が國々を立ち、肥前國名護屋に著く事、毎日引きも切らず。今年は、例に替り、餘寒早く去つて、山々の雪も消え、谷川の氷も解けしかば、人馬通路、容易にして、軍勢、悦ぶ事斜ならず。海上も日竝を追ひて靜に、浦々の氣色も長閑なれば、兵船も悦びて、順風に帆を揚げて、筑紫灘を目に懸け、或は名に負ふ須磨・明石・大物の浦より、纜を解き、或は紀の地・和歌・吹上・吹井谷・輪繪・島崎・洲本・武島の沖を経て、片帆に走る船の數、幾千萬といふ數を知らず。遠山に懸る白雲は、殘の雪かと疑れ、澗谷の鶯舌聲舊びて、初音ゆかしき郭公、旅寐の夢をや覺すらん。霞

諸軍勢名護屋に集る

渡れる難波瀉、住吉、天王寺を後に見て、一谷、摩耶の沖、堺の浦、木津の海、長閑に見ゆ。大坂の城、天主樓の闕、天に峙ち、軒を連ぬる家々は、尼崎まで打續き、西は鳴戸、雪の湊、月落ちかゝる淡路島、げに音高き名所かなと、船中の兵共も、面白き詠に、故郷の名残も忘れけり。去程に、魁の軍勢、悉く名護屋に集りければ、御定の如く、陸路、海手兩方に分つ。陸の勢は、小西攝津守・加藤主計頭を魁として、續く勢は廿五萬餘、船手は九鬼大隅守嘉隆・脇坂中務大輔安治・加藤左馬助嘉明・藤堂佐渡守高虎・來島出雲守通泰、其外都合三萬餘騎、船手の目附は、福原右馬助清成、熊谷内藏助直益、毛利民部大輔正次、寛和泉守宗俊、其勢六千。海陸の手分の事、添軍評定の事は、名護屋にて相定むべしとの儀なれば、文祿元年三月十日、悉く彼地に著岸せり。九鬼は昔より、事奮りたる船大將なれば、嘉隆、船へ各、寄集め、軍評定互に理を責め、談合極りしかば、其堅の爲めに、誓文を書認む。其趣は、第一に、船軍の儀多分に付て、其理に隨ふべし。第二に、互に難儀の時、見殺すべからず。尤も加勢すべし。第三に、敵方の沙汰聞き次第、互に申談すべし。第四に、武功働の善惡、有體ありていに申上ぐべし。

第五に、他人の功を盗み、己が手柄となすべからず。第六に、大將一人より、物見船二艘より外は出すべからず。第七に、名護屋御本陣への註進、奉行御目附加判にて、申上ぐべしと定めて、神下かみおろし、事々しき血判事濟みければ、福原右馬助申しけるは、評定相調ひ、互に目出度き事なり。されば酒を出し、船祝せんとて、折に合ひ、大樽三荷出しければ、皆々悦びて、九鬼も脇坂・藤堂・加藤左馬も、肴一種づつ出し、後には亂酒になり、上下入交り、千秋樂の音融々たり。脇坂中書も加藤左馬も、數盃の興に、夜の更くるも知らざりけるを、藤堂高虎、つと立ちて、扇を颯と開き、萬歳樂には、命を延ぶ。相生の松風、颯々の聲を樂むと、舞ひつゝ、皆々座敷を立ちにけり。陸路の軍勢も残らず、宇喜多秀家の宿所に集り、軍令・諸式の法度、船中の雜用の沙汰、滯なき様にと、京都より石田治部少輔三成を上使として、下されしかば、家康・景勝・淺野彈正等、皆々秀家の宿所に集り、數刻相談の上にて、一組々々の軍勢に申渡す。海上、陸路諸々の評定・軍法、残らず事濟みつゝ、三月十二日辰刻、總軍勢、名護屋湊より打立つべしと、陣々へ觸れけり。

日本勢渡海朝鮮に攻入る并釜山陣合戦

先駆の兵には、小西攝津守行長を大將にて、宗對馬守・松浦・大村・有馬・五島等、其勢二萬。續く勢には、加藤主計頭清正を大將にて、鍋島・相良等、其勢二萬五千餘。二番に黒田甲斐守長政・大友豊後侍從義統、兩勢合せて二萬餘。三番に島津薩摩侍從義弘を大將にて、毛利・高橋・秋月・伊藤等、其勢二萬、其外都合廿五萬餘。文祿元年壬辰三月十二日辰刻に、名護屋の浦より、一同に船を出す。大筒・石火矢を放ち立て、関の聲を揚げ纜解き、數千船の帆柱を押立て、やさ聲を揚げ、口々に匍り呼ばはる音、天地を動す計りにて、順風に帆をぞ揚げたりける。烟波渺々たる海の面、廿四里の間、船端を輾じ、舳舻を連ねたる有様は、あな夥しや、晋吳、天下を争ひし江陵の戦、隋文、陳を亡せし建康兵も、斯くやと思ふ計なり。名護屋の浦を遙に出でて、後先を見渡せば、多くの大船小船の數々に、家々の紋畫きたる幕を走らかし、思ひくの旗、塵・幡にて飾立て、金銀の指物・馬印、日に映じて耀きける。其下には、甲の星を耀し、

諸軍勢朝
辭に向ふ

鎧の袖を列べて、屋形の内に竝居たれば、吉野山の春を海上に移し、龍田川の秋の氣色を爰に浮べ出したるが如し。款乃歌棹あひばいの歌に準へ、船歌の聲麗しく謠ひ出で、船中を勇しゝかば、實に心も空になりけり。順風快く吹出で、名護屋より七里の渡なれば、何れも壹岐の風本の湊にぞ著きたりける。斯かる所に、風變り浪に向ひつゝ逗留せし程、二十日餘り風本の湊に居たりける。旅泊の月、松なみの風、興を催さすといふ事なし。洲崎の千鳥音信れて、寄せ來る浪も高ければ、目馴れぬ鄙の詠に、いと興をぞ催しける。同廿五日の曉方より、風少し吹弱り、空の氣色もいさゝか直りたり。然も名殘の浪荒くして、海上未だ穩ならず。小西行長、獨り思ふ様海上靜になりなば、何れも船を出すべし。向風にてあらばこそ、いざ渡して見んとて、夜半の頃より、潜に風本の湊を出でて、對島を指して馳せたりける。明くる廿六日午の刻に、小西一組の船共、皆々恙なく、四十八里を渡りつゝ、對州豊崎の湊に著きぬ。扱又壹岐の風本湊にては、小西が船の見えざるに驚き、艤急に催す内に、日も早や亭午に及びぬ。漸く船を出し、海上五六里出でける所に、又向風になりしか

ば、渡海叶はじとて、清正・長政を始めて、皆風本の湊へ吹戻されてけり。加藤・黒田も、怨悶えて、飛立つ計りに早やりけれ共、逆浪天に漲り、馬だにも通ふは詮方なし。小西も、豊崎に著きし甲斐もなく、逆風に留められ、心を雞林に馳せ、思を焦しけるに、風又少し吹弱り、雲の脚重く、空搔曇り、大雨車軸を流すが如く降來り、北風は靜んで、南風烈しく吹出でたり。木を折り砂を上ぐ。白浪海上に充滿ちたり。小西は、風能く直り、急ぎ船共出だせといふ。水主、楫取等、是れ程の大風には、船出す事、音にも聞えず候。風少し弱りてこそといふ。小西、大に怒りて、日和も能く、風も靜ならば、加藤・黒田・島津等も續き來るべし。さあらば何を以て、稀代の高名を抽んで、名譽を日本に傳へんや。疾々此船共出せ、異議をいふ奴原は、一々首を刎ねよと怒りつゝ、將軍より給りつる一文字の大長刀の鞘はづし、舳艫に廻りて匂りければ、船子共色を失ひ、如何すべきといふ所に、よしや爰にて誅せられんも、沖にて海に沈まんも、同じ事なり。いざ船出さんとして、犇めきたり。小西、莞爾と打笑ひ、門出はよきぞと悦び、使番の早船を廻し、與力せし宗對馬・大村・有馬等が船へ觸れけ

るは、風能くなり候間、行長、船を出し候。皆々御出船あるべしとて、早や貝を吹出でければ、劣らじ負けじと、檣を立て、船用意相濟しつゝ、同廿八日の酉刻に、豊崎の湊を押出す。吹く風、人家を顛し、立つ浪山の如し。水手等、船中にて吹倒されて、足を踏立つるに及ばざりけれども、屈強の船子共にて、聲を揚げ、互に力を合せて、船を乗直し々々喚き呼はる。小西行長、下知しけるは、難風の船を馳するには、數多の大事あり。舳艫に艫を立て、脇楫を以て、船を丁と挟み立て、兩踵の船足には、引碇を引かせ、帆をば檣半に持たせ、油斷なく帆の手を取りて、風を通せ、船子は申すに及ばず。侍も、下人原も、大聲を懸けて、浪風を追ふべし。旗指物、風にしぶかば横手を抜きて、竿に卷付けよ。幕をも絞り、風をすいて、母衣をば絹を疊みて、風に取らるゝな。夜に入らば、舳にて篝を焚き、風上には葎の板を立て、艫先にて、大太鼓を打つべし。行長が船を取り、初船として、各、馳せ給へ。船子共、此時ぞ精を出せと、口脇より白沫を吐き、大音揚げて下知をなす。船頭共、心得候とて、帆を檣半に持たせられ共、風彌、強く當りければ、帆を下さんとすれども、風強うして下し得ず。船

中周章で騒ぐ。行長、大の眼を瞋し、何とうろたへたるぞ、日來の用意爰なり。鎌・熊手にて、打廻の本を引懸け、一同に引下せ。それにも叶はずば、侍共十文字に綱切り、鎌・鍵にて、帆の紐を目懸切つて、風を通せと怒りければ、兵共承り候とて、帆を三所半より引き破り、兩方へ結び分けて、風を通し、大綱二筋十丈計りに縊りて、下碇三つ四つ、下し引かせたり。風開けば面に乗懸り、追手になれば、中に乗直り、隙透間なく、垢をかへ出でたり。宗對馬・大村・有馬・松浦等が船共も、少しも後れず、馳來り、竝走る船を見るに、浪の上に揚ぐる時は、楫尻海を離れて、瀧を流し、浪間に入る時は、檣の半隠れて見えざる事多ければ、見る人肝を消し、舳先へ打つ浪碎けて、彌帆を洗ひ、舳へかゝる浪、越えて舳へ通る。船腹を打ち、大浪の響に驚きつゝ、船底に立てる數千匹の馬共、一同に嘶き騒ぐ事夥し。行長は、船櫓に登り、自ら太鼓を打鳴し、漕げや者共、油斷すな。清正・黒田も、續き來るべし。此時、抽んでたる手柄なくんば、何の面目かあるべきと、身を揉みて匂りつゝ、吾身も大音揚げて、浪を追ひしかば、二萬計りの兵共、數百艘の船共より、聲々に浪風を追ふ事夥し。小西

は船頭を呼びて、路へ何程來りたるぞ、夜は何時にかなるべしと尋ねければ、船頭承り、空曇り北斗星見え候間、暁に時分は知れ申さず候へども、夜は早や子刻前かと覺え候。宵より卅八九里も走り候ひつらんといふ。行長聞きて、扱は高麗へは、今十里計りぞ、艦を入れて押せとて、通夜漕ぎ渡す程に、浪風も静り、夜はほのくくと明渡り、何くとも知らぬ山岨の湊近く、漕ぎ寄せたり。見渡せば、葦を竝べて、家數千軒、并に城郭は、山を形取る旗共、四五十本立竝びたり。行長が船にありける通辭、見仰ぎて、高麗の釜山浦の湊なりといひければ、行長聞きも敢ず、嬉ばしくも著きたる者かな。敵、此浦を固めたりと見えたり。旗指物張りて、各、物具し給へ。船に揺られて、立痿みたる馬共なり。左右なく下りて過すな。沖より追下りて、船に引付け、泳げよ。馬の足立たば、船より鞍を置き、口捕は飛び濱り、腹帶をして轡を食せよ。其隙に物具指物差し、船より馬に乗り移れ、日本異國、手合の軍ぞ。急げや人々と、下知して、行長、眞先に鎧ひつゝ、馬を海に追下し追下し、船に引付け、泳ぎたり。相從ふ人々、宗對馬、有馬・松浦・五島・大村以下の人々、甲の緒を締め、色の

き渡りて、吾先きくくと、船を乗り傾けく、先陣を争ひ、喚き叫ぶ有様は、如何なる天魔波旬も、面を向くべしとは見えざりける。朝鮮にては、日本人、大軍にて寄來る旨、先立ちて聞えければ、李雄・孟明伯を大將にて、剛兵二萬餘騎にて、釜山浦を固めたりしが、此有様を見て、倭寇已に寄せたりとて、上を下へ騒動し、海涯に下重りて犇めきたり。小西行長、之を見て、大音揚げて下知しけるは、渡せ人々、後るゝな。馬の足立たば、船より乗移れ。海中にて弓、鐵炮打つべからず。甲の鉢を傾け、前輪に平みて、鎧を常に揺り合せよ。馬にも人にも力を添へよ。吾が渡すと見るならば、敵は半弓を集めて射んすらん。敵は射るとも射返すな。相ためして鞣射らるゝな。いとう傾きて甲天邊射らるゝな。曳々聲を一同して、眞黒になりて、懸るべしとて、馬の足立は、ひたくと打乗せ、行長、眞先に進んで、白旄を振り、手勢七千餘ひらめかして渡れば、宗對馬・大村・松浦等の兵共、千騎二千騎、一群々々乗連れ、雲霞の如く、混甲都合二萬餘り、鹽花蹴立てつゝ、驀進に打つて、釜山浦の濱へ、打上りたり。李雄弟の李一雲・孟明伯等、騎射二萬餘騎、矢霰作つて雨降る如く、散々に射る。五島

若狹守・松浦刑部卿法印眼を瞋らし、左右に下知を爲し、鐵炮を物脇に引付け、能くためて打立てよと、馬の上にて踊上りくく、匍りければ、足輕大將共、承り候とて、五六間に引請け、一同に放立てけるに、朝鮮の先駆の兵百騎計り、ばらくくと打落され、色めき立ち、松浦・大村、之を見て、透間なく鐵炮にて、打痿め、曳々聲を揚げたるに、朝鮮の備、旗色亂れて、しどろになる所を、得たり賢し、すは懸れと下知して、行長、眞先に喚いて懸入る。木戸作右衛門・南條元宅・小西若狹守等、之を見て、主を討せじと拔連れて、眞先に懸りけるに、陣に續きたる宗對馬守義智、之を見て、家老柳川豊前守調信と、只二人横様にまくり立て、自身鎧を入れ、黒煙を立て、挑戦ふ。有馬修理大夫は、白母衣に大鍬形甲を著け、黒の馬に乗り、孟明伯が本陣へ、喚きて馬を入れたりけるに、三人の兵共なじかは怵ふべき。手先をまくり、眞先を破らんと、屈強の兵共二萬餘、一同に嘩と駈入りたり。朝鮮の軍勢共、爰を先途と防戦ふと雖も、日本勢、急に揉立てしかば、副將李一雲を始め、能兵七八人、鎧下に討たれければ、殘勢支へ兼ね、捨鞭打つて引退く。行長、有馬・松浦・大村等、勝ちに乗り、追すがうて、地

煙を立て、追懸けたり。宗對馬は、手勢五千餘、先を切らんと廻りしかば、朝鮮の兵七百餘人討たれ、町中へ取込み兼ねたりし所に、副總兵の孟明伯、逞兵八百人面も振らず、取つて返し、釜山浦の町口、碧巖寺の樓門を楯に取つて、火出づる程、防戦ひける故に、敗軍の朝鮮勢、辛うじて命助りつゝ、釜山城へ北入り、門の關木差固め、扨こそ付入に城を取られざりけりと、孟明伯が戦功を、城中舉つて悦びけり。行長は、手合の軍に打勝ちて、城外の町屋焼立て、小高き所に打登り、暫く息をぞ續ぎたりける。

小西行長釜山浦・登萊兩城を攻落す

朝鮮東洋の馬武者李雄、孟明伯は、初度の軍を仕損せし上に、日本勢、雲霞の如く馳來りければ、防ぐに及ばず、釜山城へ引籠りぬ。釜山浦の民共は、最前より日本と通じ、商賈往來せしかば、婚姻を結ぶ日本人、多く此浦に住宅す。之を名付けて僮倭といふ。此僮倭の日本人共、行長の著岸を悦びつゝ、酒肴を持運び祝儀を申す輩、市の如し。是等を案内者として、小西一組の諸勢、盡く釜山浦に打上る。朝鮮國は、

泰昌平日久しうして、風俗昔に替り、帝王李暎、位に在る事、已に久しく、政道廢れ、亂姪の樂日夜に盛にして、萬事の仕置、皆女縁より出でしかば、綱紀大に亂る。此故に、賢臣勇士は退けられ、小人蒙輩、時を得しかば、邪臣李寵、柳承、李德馨等、諂諛の言を飾り、忠直の人を疎み憎みしに依つて、武將の征東使伯寧牧、使の王僧璘を始め、威勢皆奪はれ、閑廢日久しく、部曲の士卒等過半離散せり。世治國靜なれば、萬年を経とも、兵亂といふ者無しと油斷する事、愚なる世の習なれば、國家も兵を知らず、萬民戰を忘れ、武士共も、軍法をば夢にも知らざる事なれば、日本の大兵著洋するを聞きて、朝鮮の君臣手を束ね、周章迷ひて途方にくれ、百姓は山谷に逃げ走り、昔よりなき事の、俄に起りたる様に、上下色を失ひ、片唾かたつを呑み、上を下へもて返す。上暗下諛、淫亂酒宴、貪欲心、竝に盛なれば、人怨み兵廢れ、召すに應ずる兵なし。偶、馳集りたる者共も、近年、天下靜謐なれば、鎧の著様だにも知らず。其上、王の出頭人柳承、利勘の深き者にて、士にも百姓にも、別に課役をかけ、せぶり取りしかば、秩祿千石を取る者は、過半公儀に取上げられ、名は千石の知行にて、實は五百石を

漸く領する事なれば、弓鏃の直なるをも持たずして、百里の外へ働くべき蓄なし。されども釜山浦を守らせ、爰にて防がずば、即時に王城を破らるべしとて、李雄兄弟孟明伯を差向けられつれども、行長が猛勢に摧かれ、皆城に引籠れり。行長は、敵を城へ追入み、小塚の上に、弓杖つき、仰向になりて、控へたりしが、宗對島守を呼び、初度の軍に、味方、大利は得たりつれども、城を其儘差置きし事、心長き攝津守かなと、諸人の思はんも口惜し。敵は負けて追込められし事なれば、さぞ氣を失ひて居たるらん。臆病神の覺めぬ内に、取駈けんと思ふは、如何あるべきといふ。對州聞いて、吾々もさこそ存すれ。されば打立て人々として、釜山の城へ押寄する。此城、大手は堀丈夫にして、石壁高く聳えたり。後は高山險阻を頼みて、防勢は一人も置かず、二方は山の尾傳に柵をふり、要害とせり。行長は、僂倭共を呼び、城の構を聞届けつゝ、大村宗有馬・松浦五島をば、三方へ差向け、大手口を取巻かせ、小西は後の高山に攀ち登り、嵩より城中を見下し、數千丁の鐵炮を以て、雨の降る如く、散散に打ち、城中沓の子を打ちたる如く、充滿たる朝鮮人共なれば、丸一つにて、二人。

三人は打抜けども、浮矢は一つもなかりける。大手は、大村・五島・松浦の人々、関を作つて攻懸る。城中、やはか怵ふべき。上を下へ騒ぎ亂るゝ所を、大手の口門脇の塀より、行長が弟小西主殿亮長統、十六節の枝蔓えづらに、金の切割付きたる指物差し、眞先に塀へ乗上り、一番乗小西主殿亮、後陣の人々見たるかと呼ばはる所に、五島半右衛門・太田善太夫、續いて乗込み、二番乗と名乗るや、均しく同勢ひたゞと乗込み、吾先々々と亂入り、城中の兵共、西門指して、落行かんとする所を、行長、七千餘眞下りに落駈け、縦横に揉立てしかば、總兵の李雄は馬に鞭打つて、熊川指して落ちて行く。副總兵の孟明伯は、大音聲を揚げ、國家士卒を養ふ事、今日の爲なり。身を以て國を御する者、豈難を見て遁れんやと、士卒を勵し、踏止りて戦ふ所を、小西が兵吉川三太夫、馳竝びて、馬の上にて引組んでどうと落つ。孟明伯、大力にて、三太夫を取つて押へ、首掻切つて立上る所を、小西與七郎落合ひて、孟明伯が首を取る。大將此の如くなれば、士卒如何でか怵ふべき、皆一つになつて落ちけるを、追付、追廻し討取り、首數を算ふるに、二千五百七十三、生捕二百十二人にして、三月廿九日の巳

孟明伯討死

釜山浦城没落

刻に、釜山浦城をぞ乗取りける。残る所の朝鮮人共、弓矢をかなぐり捨て、鎧甲を脱ぎ捨て、只命計り助からんと、吾先々々と逃げ行けば、釜山浦の口、一番に破り、近邊の老若男女、恐れ悲み、思ひくゞに逃げ散る事、只風に木の葉の散るが如し。行長は、手合に打勝つて、心地よしとて、踊上りくゞ、母衣をこすりて悦びける。暫く息を續ぎて、秋鞆を呼び、近邊の事を尋ねけるに、通辭共申しけるは、是より三十里、〔日本道六里〕乾に當つて、登萊と申す城御座候。李元翼兄弟と、牛翼といふ大將、一萬二千餘騎にて、固め候といふ。行長、聞きて宗對馬守修理大夫に向つて、今朝、粉骨を盡し、比類なき勳、甚だ以て大功なり。然る間、今夜は是に陣取り、人馬を相休むべく候へども、釜山浦破れぬと聞え、登萊にも聞き驚き、さぞ周章て騒ぐらん。日數経ば、必ず用心密に致すべしとて、他の勢に渡すべき事にあらず、いざ登萊をも攻取り、名譽を鴻寅に播し、多くの首數を日本に渡し、將軍の御感に預らんと勇みければ、宗有馬、何れも一同に、尤然るべしとぞ同じける。されば下人共、其用意せよと、相觸れしに、兵糧を仕り、馬に物飼ひしかば、日も漸く未の初なり。諸軍勇み進み

登萊城を
攻む

つゝ、汗馬を早め、急ぎしかば、日本道六里なれば、二時半に打つて、酉の刻に登萊に押寄せたり。此城にも、朝鮮人一萬二千餘にて在城せし所に、小西七千餘、續勢一萬五千餘、小西に追ひすがうて、三方より関を作懸け、町を打破りしかば、釜山浦の落足に、諸人を撫切にせしに、聞き驚き大に恐懼れて、大將牛翼、先立ちて落行きしかば、李元翼兄弟も、續いて城を落ちてんげり、行長が舍弟小西主殿助長統、竝に木戸作右衛門尉憲重、手勢引連れ追懸けたり。朝鮮の兵共攻立てられ、返合す者は、切つて落され、北ぐる者は追倒され、右往左往に敗軍す。主殿助・作右衛門等、先を取切り後を絶て、喚き叫んで追討ちける程に、屈強の敵九百七十五人討取り、終に登萊城をぞ乗取りける。心地よき合戦、兩度して即ち爰に陣取つて、大篝火山の如く焚きて、人馬の息を休する。行長、通辭を呼び、是より又いづかたに敵ありやと、尋ねしに、是より都への兩道に、城々多く候。中にも此處を去る事五百四十五里日本道九十里餘奥に、忠州といふ名城あり。險阻第一の要害にて、牧使の王僧璘と成光門兄弟、竝に防ぎ、御使の權應珠と、右兵使の金應瑞・京畿道都體密使の柳成龍を大將にて、軍

登萊城を
落

兵七萬餘、精兵の射手數千人、兵糧以下飽く迄入れ置き、王城にも此城を專類に仕候。是へは九日路御座候と、答へければ、去れば此所に陣取り、後陣の續くを待つべしとて、小西一組は、登萊城に陣を取り、後陣勢を待ちたりける。

宇喜多秀家拔駈け小西を助けらる

井加藤清正熊川に著く

小西行長は、總軍勢に先立つ事、拔群にして、釜山・登萊の兩城を攻落し、其勢竹を破るが如し。猛威を震ふ事、恰も項羽が咸陽に入るに似たり。爰に備前宰相秀家は、武者押八番目なりしが、小西が先陣に進みしを、心許なく思ひ給ふ。家老戸川肥後守・長船紀伊守・明石掃部・岡花房を呼び宣ひけるは、小西攝津守事、先陣拔群なり。彌、深入して、討死などせば、日本の弱りといひ、不便の次第といひ、旁以て殘多き事なるべし。然れば吾に於ては、行列の次第を破り、先へ押抜き、行長を助くべしと宣ひければ、花房助兵衛・岡越前守・長船・戸川・明石、何れも承り、誠に攝津事は、君の御寄

宇喜多秀家釜山浦に著く

子にて、年頃御芳情他に異なる儀に候へば、御加勢尤も然るべきなり。幸ひ今宵は、浪風も靜かなり。御出船候べしと申しければ、秀家、斜ならず悦び、船奉行を召集め、潜に此湊を忍出でて、釜山浦へ急ぎ候へと、其軍法、懇に相定る。三月廿九日の晩景に、壹岐の風本湊を出でしに、地嵐の風、快く吹出でつゝ、對馬の國をば右に見て、九十六里の渡を走過ぎ、四月二日の凌晨に、釜山浦へぞ著き給ひける。小西が兵結城彌平次・吉田平内、此城にありしが、急ぎ出迎へ、御渡海目出度く存じ奉る旨、申達しけるに、先づ攝州働の様子、具に語り候へとて、ありの儘に語らせ聞きて、秀家感涙を流し、比類なき働、此表は第一の忠節たるべし。吾等加勢に、渡海の旨、飛脚を遣すべき間、案内者相添へ候へとて、一通の狀を、登萊へぞ遣されける。其詞に曰、吾等事、破行列致渡海候儀、貴殿手前無心許存、今朝令著岸釜山浦候。今度、當表無比類御手柄、實可爲御當家無二之忠功候。明三日、其許令參陣萬事可申談候。恐々謹言。

四月二日

備前宰相秀家

宇喜多秀家拔駈け小西を助けらる井加藤清正熊川に著く

小西攝津守殿

行長は、此狀を披見し、斜ならず悦び、喜悅の眉を開き、寔に千騎萬騎の力を得たりとて、勢を振はずといふ事なし。去程に、加藤主計頭清正は、小西に先陣を越されし事を、口惜しく思ひ、攝津守が進みし後を打たんも、心憂き事に存じ、四月朔日に、釜山浦の外洋より、熊川へ船を著け、陸に上り、小西が事を問へば、今度の手柄争々しく語りけり。清正、大に怒り、牙を噛みて、無念なり、今日よりは先陣人にはさせまじき者をと、獨言して、少しも休息せず、釜山浦を右に見て、梁山海道やぐざんに懸り、揉に揉んで急ぎけり。

加藤清正慶州城を攻落す

主計頭清正は、小西に先をせられし事を、心憂く思ひしが、如何なる事をもして、無念を散せんと、汗馬の息をも續がず、押して行く。七十八里日本道十三里道なるに、四月朔日の暮合に熊川を出で、同二日の辰の刻に、乗付けたり。爰にて見渡せば、家數二二三

清正慶州を攻む

萬軒もあらんと覺えけるに、城郭雲に聳えたり。通辭に問へば、慶州と申して、昔高麗の王建が住みし古き都なりと答へける。清正躍上り、如何様にも攻破るべしと、悦び行く所に、慶州の東五町餘りに、二里計り續きたる松原あり。其蔭より、旗百流程翻して、勢の程四五萬もあらんと覺えたる敵勢、馬煙を立て、押出でたり。主計頭、備を目に懸けて、次第々々に懸來り、清正、馬を控へて、通辭を呼びて尋ぬるに、此口の番手權慄、李福男、樸殿長、郢起龍、高彦伯五人を大將にて、四萬餘にて待ち候〔答カ〕と問ふ。清正が先手加藤清兵衛、庄林隼人等、早備を立直し、弓・鐵炮を、放懸けたり。鍋島加賀守直茂が先備成隅十右衛門、鍋島平五郎、五千餘にて、左の川を渡り、松原の端を、町口へ押入らんと志し、只今馬煙を立て、駈來る敵の備をば、右に見て、押廻りける所を、朝鮮の高彦伯、隠れなき剛將なれば、手勢一萬餘、半弓を雨の降る如く射懸け、抜き連れて踵と懸る。鍋島平五郎、成隅等、射立てられ、濛ふ所を眞黒になりて懸入りしかば、鍋島、先手一支支ふるとぞ見えしが、追立てられ、川を渡り、五町餘り、人雪顔をついて崩れ行く。朝鮮勢勝つに乗つて、勝凱を作り、縣けく追來り、

加藤清正慶州城を攻落す

主計頭が左手先の備加藤右馬助・九鬼四郎兵衛廣隆等、弓・鐵炮を以て、陰に開き陽に閉ちて、矢種・丸薬を惜まず、雨の降る如く散々に射られ共、朝鮮勢、馬上の達者共なれば、打て共射れ共事共せず、眞黒になつて來りけるを、加藤清兵衛、茜の切割しなりの指物にて、馬より飛んで下り、十文字の手錠提げ、只一人眞先に駈出し、味方討すな者共とて、面も振らず走行く。追うて來る朝鮮勢を弓手に爲し、馳通る馬の胸懸搔抓み、二重皮・四足・平首・障泥の下突いては突居る懸けては懸け居る、落つる敵をば刺殺し、手向ふ者をば、鎧も小手も懸けず堪へず突通るは、十文字穂先に廻り、人馬の助かる者は稀なりける。庄林隼人、之を見て、丹頂の立鶴かきたる白紙子の羽織に、糟毛の馬に打乗り、手勢二十騎計、眞丸になり、雲霞の如く控へたる敵の眞中へ、會釋もなく、眞一文字に諸鎧を合せて駈入たり。朝鮮方一方へ颯と分かれて、半弓を射る事、雨の降る如し。されども庄林隼人は、大剛の兵なれば、少も痿まず、大將の高彦伯を目に懸け、組んで討たんと志し、縦横に乗破り、戦ひける程に、強に近く寄合ひたり。隼人、馬をあをつて、彼を妻手に受け、高彦伯とむすと組み、兩

高彦伯討死

馬の間にとりと落ち、上を下へ返しけるを見て、一町餘に控へたる山口與總右衛門・大木土佐守・加藤與左衛門三千餘、一度に嘩と駈入る所に、大將清正なじかは泳ふべき、指麾をば肱にかけ、馬上に大長刀押取り、本兵千餘輩、主を討せじと、喚いてこそは懸りける。汗血地を摸糊し、天地を響かし攻戦ふ。斯かりける所に、庄林隼人は、終に上に成り、高彦伯を組伏せ、首を取つて差上げしかば、加藤清兵衛、馬引寄せ打乗り、隼人と一所に打連れて、爰をば打捨て、清正が駈合する同勢の敵に向つて、横錠に突懸りしかば、敵の大將郭起龍、左右を下知して、防戦ふと雖も、清正揉立て攻懸り、終に追崩し、先を先に追うて行く。相良宮内少輔も八百餘にて、權慄が手を切崩し、直に清正が手に馳加り、北ぐるを追ひて進みける。鍋島が先手も是に氣を直し、取つて返し切懸る。加賀守も旗本を押立て、黒煙を立て、進行く。慶州の町口にて、樸殿長・李福男、一萬計りにて踏泳へ、半弓數百人家の上へ上せ、兩方より差合ひ、矢尻を支へ、散々に射る。加藤與左衛門・吉村吉左衛門二千餘、面も振はず進みつゝ、鐵炮を先立て打痿みひるむ所を得たりやとて、加藤與左衛門、眞先

に駈入り、鎧を打入れ、大音揚げ攻戦ひ、大將、此の如き上は、其手の兵、争でか怵ふべき。一度に鞆を傾けて、唾と突いて懸りける。互に喚き叫ぶ音、山彦答へ、地煙を立て、挑戦ふ。芥塵天を掠め、汗血地に溢る。清正は馬蘭の馬印ぞ。虎口の兵共の鎧の石付にさはる程に、押詰め大音揚げて、清正爰に續くぞ、引くな進め者共。鎧を取延べ、頭より叩き立てよや者共と、眼を瞋し、白沫嚙んで匍りければ、主計頭に勵され、死を一舉に輕うして、鎧の柄を取延べ、曳や聲を出して、叩き立てしかば、李福男・樸殿長、一萬計り突立てられて、大手の門際迄、七八町の間、足をもためずまくり付けられ、吾先々と城へ北げ入り、上を下へと持返す。橋より落つる者、數を知らず。清正が兵共、雲霞の如く攻懸りしかば、樸殿長も李福男も、防ぐに及ばず、這々城へ取込み、門をも閉ぢ得ず、矢間配もせず、途方に暮れ、周章て騒ぐ。清正之を見て、良の角矢倉へ、雨の降る如く火矢を射懸けたり。折節、魔風烈しく吹きかけ、炎雲を捲きて焼上る。城中の兵共、東西に迷ふ。只吾先々と西門より北げ出づる事、堤の切れて水の出づるが如し。大將樸殿長も郢起龍も、李福男・權慄も、駿馬に乗り

郢起龍討死慶州城没落

たるは、乗抜き乗抜き落ちて、終に落延びしが、郢起龍は懸阻され、左の山へ志し落ちけるを、相良が家老犬童兵部少輔、押並びて引組んで落重り、上を下へ返し、組合せけれども、郢起龍大力にて、終に上になり、兵部は下に組敷かれ、一尺ありける正宗の脇差を抜き、郢起龍が鎧のほつてはづれをしたゝかに刺し、刺されて痿む所を、兵部、下より口返し、郢起龍が首を取つて差し上げたり。討ち取る首數都合一千五百五十二なり。城中・城外、悉く焼上り、三萬軒に餘りし家數、一日一夜に、残らず炎上してければ、清正は總軍をまとひ、山取して陣を居る、人馬の息を休めける。即ち日本へ註進申上ぐべしとて、家人庄林喜右衛門を歸朝させけるに、喜右衛門は急ぎ釜山浦へ出でて、早船にて日本へ歸朝し、京都指して馳上る所に、筑前國姪濱にて、秀吉公、名護屋へ押〔寄ノ一〕〔字脱カ〕せ給ふに、行遇ひ奉る。即ち路次にて、清正の書状を差上ぐる所へ、小西行長方よりも、小西平左衛門を使として、釜山・登萊兩城、乗取り候旨、申上げければ、秀吉公御感悅斜ならず、兩人の使者には、御羽織一つづつ下され、小西攝津守、今度の働、比類なき次第なりとて、御感狀に定利の御太刀・栗毛の馬

一匹、相添へ下し給ふ。清正へは、大體の御書に神妙なりとの御文言なり。扱又清正は、慶州より密陽・大丘を經、全義館へ打立ち、忠清道を平げ、押に王城へ攻入らんとぞ急ぎける。

黒田長政金保稷山城を攻取る

三番備黒田甲斐守長政は、小西・加藤が後を押し、かば、珍しき事にも遇はず、無念類たぐひなかりける。如何にもして、敵に出合ひ、高名を抽でんと思ふ所に、登萊の北に當つて、金保城といふ處あり。朝鮮兵馬使伯子顔大將にて、楯籠る由聞えければ、願ふ所の幸なりと悦び、其勢二萬餘、金保へ押寄する。先手は栗山後前守利安なり。栗山隠なき兵なれば、金保へ押寄すと均しく、町を押破り、風上より火を懸けたり。城中よりも突いて出で、防ぎ戦ふ。栗山が組村山彦右衛門など、鎧を打入れしかば、敵も爰を先途と防ぎしを、終に追崩し、北ぐるを追ひて進行き、二の丸迄入り、即時に乘取り、城中悉く焼立て、大將伯子顔を始め、千四十三人が首を取り、終に金保を

金保城を
攻む

金保城没
落

乘取りける。今日、栗山備後守粉骨して、此城を攻落しけるに、栗山が甲の枇杷葉の立物、兩方共に、矢二筋・三筋射立てさせ、折懸けたれば、其有様勇々しくぞ見えける。即ち首をば鼻をそぎ、酒に浸し、日本へ渡しければ、太閤御感ありて、行長・清正、同前に首數到來、大慶に思召すとの御書をなし下され、御褒美少からず。長政は即ち金保二陣を取り、人馬の息を休めける所に、栗山備後守を呼び、其方組村上彦右衛門と、後藤又兵衛正次が與力の内能島を召連れ、船にて川上へ働き、川につづいたる在々所々、焼拂らはせ然るべしと、長政いはれければ、備前守尤にて候と領掌しければ、即ち村上彦右衛門を呼び、長政、其段申付け遣しけり。彦右衛門は、手の者竝に與力と、後藤が組能島と、彼是四百計りにて船に乗り、四月五日に押出し、川を上りに働きける。在々所々焼拂ひける所に、川の西に沿ひ、一つの砦の城見えたり。通辭を以て、所の者に問へば、稷山城と申し、金保城よりの落人も、皆是に籠る由いひければ、彦右衛門下知して、鐵炮足輕を大手へ差向け、一同に放し懸く。彦右衛門は與力・手の者引連れ、搦手より攻入りしに、中々防ぐにも及ばず、

稷山城を
攻む

黒田長政金保稷山城を攻取る

北ぐるを追討にして、首三百計り討取り、城を乗取りける。彦右衛門は城に其儘陣取りつゝ、足早き者を遣し、城より一里ある川下に高札を立て、稷山城を黒田甲斐守内村上彦右衛門乗取り、籠罷ありと書付けけるに、黒田が物見の兵、此札を見付け取つて歸り、見せければ、長政大に悦ぶ。去ながら小勢なれば、心許なしとて、長政、夜通よゆうしに駈付け、稷山へ著陣し、感悦斜ならず。栗山備後守下知して、稷山城に放火し、長政又金保へ引取りければ、村上も供して引取りけり。斯くて一兩日、人馬の息を休めける所に、島津薩摩守義弘、福島左衛門大夫正則、戸田民部少輔等も、今日の内、著陣すべき由聞えければ、長政も金保を打立つて、都へ向つて攻入りける。加藤・小西に追散されたる敵の軍兵も、蒙霧山といふ山に楯籠り、松の木の繁みに便り、待懸けたり。長政が靈原へ一里計り續きたる松原を過ぎ、押行く所に、蒙霧山より一枚楯引側ひだりめたる半弓の者共、二三千出でて、散々に射る。長政先手は栗山備後守利安なりしが取合ひ、鐵炮にて打合ひ、少し漾ふ所を、栗山指揮を振り懸りしに、村上彦右衛門、後藤又兵衛、黒田次郎兵衛、眞先に駈入り、敵も相支へ防戦

稷山城没

ふ所を、栗山備後守手廻り五百餘、眞丸になりて、敵の同勢へ鍵を入れしかば、敵一支もせず、先陣後陣一つになりて崩行く。後藤村上等追懸け、前を遮り後を横切つて、追討に首六百餘討取りけり。二陣に控へたる黒田美作守も、山の尾筋を取切り、首數多討取りぬ。今は足手にさばる敵もなかりければ、後より續く味方の大軍に追付かれぬ内に急ぐべし。都表の合戦心許なしとて、長政も大友義統も、晝夜油断なく汗馬を早め、行長・清正が後を追つて、玉城指して攻入りけり。

小西行長忠州城を攻落す

加藤清正・黒田長政・大友義統・島津義弘等を始め、日本勢大略渡海せし由、登萊へ註進ありければ、小西攝津守思ふ様、後陣續きなば打込の軍にて、さのみ高名あるまじ。忠州城をも攻落し、彌、大功を抽んでんと志し、四月二日の午の刻に、登萊を打立ち、夜を日に繼いで急ぎける程に、五百四十里日本道九十里を、五日に押し、同月六日の夜の丑の刻に、忠州の城へ著きにけり。此城と申すは、忠州府を去る事三十里なり。

小西行長忠州城を攻落す

日本道五里。是は登萊より押來り、日本人の眞直に府中に押入らん事を恐れて、要害の地たれば、爰に城郭を構へたり。此は、四月六日の夜の事なれば、月は宵より入りにけり。目指すとも知れぬ闇夜に、案内を先立てて、汗馬に鞭を進めし程に、鶏の聲々打頻り、銀漢も早や山の端に傾き、時拍つ鼓の音幽なり。小西は城の東門に押寄せ、先づ手分を仕たりける。宗對馬、其勢五千餘は、城の巽の田の中を廻り、南の山に付いて、細道ありけるを傳ひて、南の木戸へ向ひたり。松浦鎮信法印、三千餘を率ゐ、城の良の小川を渡り、菖蒲林を五町程涉りて、城の北門に著く。此城朝鮮の京を去る事僅か二百八十里日本道廿八里なれば、行程三日路、君皇城より後卷あらんやと考へつゝ、有馬修理大夫治里・大村新八郎豊茂・五島若狭守親政、三千七百餘は、城の西門より十町餘り張出し、府中に向つて備へたり。行長は手勢七千餘、大手に向つて押寄せたり。さる程に、手分定りしかば、大手搦手引廻し、関を作り、太鼓を鳴らし、法螺を吹立て、木の本萱の本を打ち鳴動はなめき、棒火矢・大筒を射上げて、轟き懸りければ、山彦響きて、幾千萬の勢とも覺えず。宗對馬、すはや追手は寄せたりけるは、関の聲を合せよと

て、てんで手々に炬を燃し、南の木戸へ攻懸る。松浦黨三千餘、関を合せ、喚き叫んで、北の門へ押寄する。前後一萬七千が関の聲と弓・鐵炮の音にて、山も崩れ岩も摧けんと夥し。道は狭し、進む兵は吾先々と競ひ、人馬共に壓おさに押されて、矢をはぎ鐵炮を打つに及ばず。打物は鞘をはづし兼ねたり。追手は搦手押合はんと攻上ぐる。搦手は、追手と成合はんと喚き叫べば、天地も覆る様にぞ覺えける。城中にては、七萬餘勢なりければ、第一人數を頼み、又釜山浦より、五百四十里、其道十日路計りなれば、路の遠きを頼みとし、聊か油斷したりければ、此音に驚き、こは如何せんと、東西を失ひ、周章騒ぐ。弓捕る者は矢を知らず、戈を忘れ劔を捨てて、親をも子をも顧みず、只吾先々と競出でて落行く。大將牧使王僧璘竝に柳成龍・金應瑞・成允門等、鎧計りにて取合ふ。此城、皇都の警衛、朝廷の依頼たるに、是の如く騒動して、一戦に利を失はし、何の面目ありてか、再び人に面を向けんや。張巡が忠節の爰に致さるは、賈似道が汚名、昔のみにあらず、身を以て殉する事、今日にありと、義を勵みて匍りけれども、搦手、雲霞の如くなり、追手いやが上に攻重りければ、城中の男女

老若、堀壁共いはず、ころげまろびて、上を下へ混亂してぞ落行きける。小西が兵、日比左近右衛門、赤段々の輪抜の指物にて、櫓下より乗上り、日比の某一番乗ぞ、續けや〜と名乗つて、飛乗り飛込みしかば、小西が兵共、吾劣らじと込入りける。依つて三の丸をば乗取りける。城中の兵共、吾先々と落行きける中に、成允門が弟成義門と、柳成龍が嫡子柳廷等、選兵五六千、弓を取合ひ、鎧・長刀を以て防戦ふ事、甚だ以て夥しく、引組んで首を取るもあり、取らるゝもあり。此處にては鎧にて迫合ひ、彼處てには太刀討し、勝負區々なり。大將小西行長は、皺革の鎧に、銀にて駕の裾金物打つたるを、革摺長に揺下し、鍬形打つたる唐の頭の甲を著け、銀の天月出したる白母衣かけ、將軍より給ひたる大黒の馬に、白沫かませ、矢面に進み、弓杖に縋り下知しけるは、敵も思切つたる上は、急度勝負あるべからず。行長、分別するに、先年、江州賤ヶ嶽にて、佐久間玄蕃允盛政が謀にて、神戸兵右衛門を遣し、庭戸山城根小屋を焼き立てしかば、中川・高山敗北し、殊に中川清秀を討取りしぞかしとて、伊賀の忍百人の内五十人引分けて、搦手へ廻し、城下の家に火を懸けたり。折節、風烈し

小西行長
勇戦

くて、猛火天を掠めて焼上る。餘煙、城中に亂入り、谷風炎を吹敷きたり。朝鮮の兵共、後を顧みる度に迷ひ、早や過半落行き、後がはらになりしかば、小西手づから馬印を振りつゝ、爰を揉めや兵共とて、早貝を吹立てしかば、三方より寄手の軍兵、いやが上に攻重る。成義門、柳廷等、混甲七八百人口切りて、行長を目に懸け馳懸け馳懸け戦ひけれども、終に打負け、先陣・後陣一つになりて、争ひ落つる有様は、喩へん方もなかりける。成義門、劔を按じ、吾れ苟も國の股肱たり。命を受け、任を授かるは、只今日の爲なりとて踏止り、四方八面に渡合ひ、死狂せし所を、小西が兵、竹内吉兵衛懸馳り、終に切伏せ、成義門を討取りけり。柳廷、之を見て、もはや是迄なり、遊擊の任に居て、敵の手に死すべからずとて、錦袍を脱捨て、自害して失せにけり。従弟の柳石虎・蘇源も、鞭を打つて落行きけるが、大村新八郎が勢にやり止められ、二人ながら討たれにけり。残る大將共は、皆皇城指して落ちけるに、牧使の王僧譚一人は、大敵の中を乗抜け、晋州の城へぞ入りにける。討取る首數都合九千二百十なりとぞ、註しける。小西一組にも、手負・死人數百人とぞ聞えける。さる程に、加藤

忠州城没
落

柳廷自盡

主計頭清正は、密陽大丘府を押し、全義館へ出で、忠州府に到りて、四月七日に著きたりけるが、皆明退きければ、残りたる落人共、生捕らる。是より奥へ、日本勢通りたるやと尋ねけるに、未だ一人も通らずと答ふ。されば爰に陣取り、後陣を待つべしとて、忠州府に兩日逗留せられけるに、同八日の晩景に、小西行長一組、忠州城を出でて、府中に押著きて、清正と一手になり合ひける。小西が勢共、三箇所にて亂妨取ると見えつゝ、布木綿數千端、牛馬に負はせて來りけるを、清正、見咎め、大の眼を以て、小西をはつたと睨み、流石人多き中より選ばれ出で、異國の先手仰付けられし貴殿の軍勢共、かゝる見苦しき有様やあるべき。都に入りたらば、綾羅・錦繡・金銀・財寶、充滿ちたるべし。夫を分捕せばせよかし。斯様の布木綿、何の用に立つべきぞ。第一、押前の妨にて、道の果敢行くまじ。楚の項羽が鉅鹿の戰にて、船を沈め、金甌を破り、廬舎を焼き、士卒に必死を示してこそ、戰勝ちて王離を擒にしたりと、史記にも見えて候へ。今、征伐の首途に、亂妨を先立てられん事、甚だ以て然るべからざる旨、皆々残らず燒棄てられよと怒りければ、行長、理に詰められ、汗を流し赤面

し、二萬計りの兵共、路次中の亂妨物一つも残らず、山の如く積置き、一時に燒捨てければ、小西一組の士卒、身軽くなりて、無念なる事して、清正に笑はれたる者かなと、内々つぶやかぬはなかりしとかや。去程に、清正行長は、忠州府に集りつゝ、旗指物立並べ、雲霞の如く陣取りつゝ、後陣の續くを待つ所に、黒田甲斐守長政を始め、後陣の勢、八日の暮合に、大半忠州に著きければ、後勢も夜通に引きも切らず、續き來る事、雲霞の如く、頃時に、朝鮮の平安・黃海・忠清の三道、已に破れぬ。慶尙・全羅の二道も、危き事、旦夕にあり。朝鮮八箇道の貴賤老若、上を下へぞ返しける。慶尙・全羅の二道も、城を開き、過半落失せければ、残る城としては、十分が一もなかりける。此儘、慶尙・全羅二道に押入れば、一城も拘まじきを、清正行長以下の倭將共、先づ王城を取るべしとて、釜山浦より道筋を、平押に押し進ましける。

李昭皇帝朝鮮都落

倭將小西行長・加藤清正等、數萬の軍を率して、平安・黃海・忠清の三道を抜き、勝つに

乗じて、兵を引きて西下して、過る所残らず滅せずといふ事なし。城邑皆風を望みて奔潰る。朝鮮一州の貴賤老若、荷物を運び蒞遣戸を放取り、上を下へ入亂れ、思ひ／＼に北げ散ずる事、引きも切らず。雲峯城に楯籠りたる將官の朴弘長、烏嶺を固めたる忠清道節度使李時言も、行長・清正が大軍、已に寄せ來ると告げければ、一防せんといふ心もなく、皆城々を打捨て、引退きしかば、全義館へ向はんとて、召寄せられたる四道の元帥、征東使の伯寧も、黃海道ハムギョの破られしを聞き、江原道ヤンウォン・咸鏡道の兵を催し、一合戦せんとて馳せけるが、兩道も過半、城々落ちければ、蝗ムギ秉ムギといふ城に引籠りしかども、清正が大軍、此道筋へ押來るべしといふ雜説を聞き、下々に騒げば、伯寧、怵へずして、長橋を兀良哈へ落ちにけり。全義館・忠州等の諸城、皆攻落され、近國・遠境残らず北げ散ずる由、追々に都へ聞えければ、季元翼・柳承・李寵等、大に恐れ騒ぎ、皇帝の宣旨を以て、國々の兵共を召し、急ぎ入衛して、都を固むべしと、櫛の齒を引く如く、催しけれども、天子の淫亂、日來の奢、彌、増しぬ。柳承等が課役を掛け、士卒を絞取りしに、恨を含み、國々より兵一人も參らず。年頃、君

臣共、酒宴・邪淫のみに、心を入れしかば、何事も内縁を以て、女中の引を頼み、上も下も作法違ひ、萬民疎し果てたれば、軍兵の催促、曾て手に廻らず。去れば太平にも武を忘れずといふ古賢の言を知らながら、千秋萬歲とのみ心得て、世の中は未來永々迄治まりつゝ、萬々年の果て迄も、兵亂といふ事はあるまじと、心得る程の不覺悟にて、なにかは仰天せざるべき。軍勢共は一人も催促に隨はず。已に倭將清正・行長等、百萬騎にて、忠州迄寄來れりと、天地も打返す様に匂り騒ぎ、雜説衛に充滿ちたり。月頃日頃侍をば、道路の乞食同前に、強顔つれなくあたりし奢の報、眼の前に來りしかば、天子を始め奉り、諸大臣皆鍮銅色になり、氣を失ひ、足手をあがき、如何はせんと、途方を失ふ。日來蓄集せし後宮の美人・女郎共を、先づ一大事に先立て、何方へか落し給はんと、談合評定ある内に、日本の諸大將等、已に稷山水源迄亂入の旨、註進ありければ、此所王都より、僅か二百里六町計りなり。敵の近付かざる以前に、重器を除き、其後禁闕に火を懸け、煙の紛れに、何方へも落ちさせ給ふべしと、諸大臣・公卿、僉議定めつゝ、皇帝は、鳳輦に扶乗せられ、取る物も取合へず、都を落ち、

李寵柳承計りぞ、衣冠にては供奉しけれ。其外の諸王・千官・元妃・皇后・椒房・嬪御・女官・美婦人も、羅縠の裳を引摺り、容顔美麗なる面をも隠さず、玉の筭をも打捨て、互に手に手を引合ひつゝ、歩跳なる有様にて、住み馴れし花の都を、名残惜くも顧みず、天子の後を慕ひ參らせ、洛門を指して、争ひ出で、泣き悲みて、落ち給ふ。矧や、諸王・大臣以下の妻子従類は、譬ふるに物なし。哀れなる次第、目も當てられぬ有様なり。己が様々に立出づる袖の涙、心の悲み思ひやるこそ哀れなれ。年頃、君臣、奢を極め、女縁ある者、才勘ある者計り取立て、大臣執政に召仕はれしかば、民苦み、下恨みしに依つて、此弊に、賤しき奴原、時を得て、百人・二百人づつ、黨を結び、洛中の家々に亂入り、天子の御道具を初て奪取り、美しき上臈若き女房達をば、後をも大臣家の妻妾をも憚らず、奪取りしかば、泣き悲む音に、家々騒ぐ音に相交り、物いふ分も聞かず。子は親の手を引き、稚子を負ひ、妻女を扶け、財寶を荷ひ、何くを限りとも知らず、蛛の子を散すが如く、吾先々々と北げ出づる。斯くて殿將李時言等踏止り、内裏に火を懸けたりけれども、時節到らざりけるにや、焼けざりけり。皇

后、竝に太子臨海君李瑋と、二男の順和君李瑋は、咸鏡道にかゝり、兀良哈の境なる法園谷指して、落ち給へば、天子は義州指して落ち給ふ。天上の娛樂、早く去つて、五衰退歿の雲となり、華清宮の花凋みて、驪山の月光を隠せり。盛者必衰、目の前に顯れ、會者定離、身の上に至りぬ。鴛鴦の契、春の夢と覺ゆ。同穴の情は、槿花の露となり、床定まらぬ旅寐の宿、隴に霞む尾上の月、涙や吾と友ならん。思ひくに分れ行き、吾もくくと落つる有様、霓裳羽衣の曲の中に、漁陽の聲、地を動かして至りけん。唐の玄宗の昔も、斯くやと思ひ知られたり。

日本軍勢朝鮮の都に攻入る

加藤清正・小西行長・黒田長政・島津義弘等、何れも日本の諸大將、忠州の巽五松原といふ廣野に陣を取つて、都入の評定をなす所、清正と行長、先陣を争ひ、己に同士軍せんと犇きけるを、鍋島加賀守、兩人を静め、南大門・東大門兩口の内、二手に分けて攻入るべきに極りし時、小西申しけるは、南大門は、路の遠き事、百五十里、日本道、廿五里、大

河ありと聞ゆ。東大門は、其道百八十里、日本道三十里、大山はあれども大河なし。何れにても、清正望に攻入るべしといふ。鍋島加賀守直茂、進み出て、攝州の申さるゝ所、宜敷儀にて候。此通にてこそ物の評議は定りけん、會釋しける時、清正、機嫌を直し、去れば吾々は大河ありとも、道の近き方よりこそ攻入るべしといひければ、諸大將も、皆此議に一定す。誠には東大門は道近し、南大門は遠けれ共、加藤を欺いて、此の如く談合す。小西は清正を欺き誘ひ濟したりと、心中の悦は、躍上る程こそ思ひけれ。清正は、之をば夢にも知らず、己が陣へ歸り、森本義太夫を使者にて、宗對馬守義智方へ、南大門の海道、都迄の案内者、通辭を、一人給ふべしと、申し遣しける所に、對州は、小西と縁者にて、内々清正を惡みければ、承り候ひぬ。即ち通辭一人、差越し候と、返答して、寒澁徳右衛門といふ通辭、未だ都へ行きたる事もなき奴を、選出してぞ差越しける。之を知らずして、清正、二萬五千餘にて、四月九日の子の刻に、忠州を立ち、諸鎧を合せ、身を揉んで急ぎける。小西行長も、宵より忠州を立ちけるが、今度、釜山浦にて虜にせし朝鮮人、二百計りの内、山川に馴れたる都表の案内

者、五十餘人助置かれしかば、豫て能く勞りければ、萬づの自由乏しからず。此内、水練の達者を、廿二人選出し、清正が向ひたる南大門の路へ遣し、毛谿川といふ大河の渡に、此方の岸の船共、一艘も置かず、切捨て、流しける。是は主計頭を渡すまじき爲めなり。斯くは、行長は主計頭を謀りすまし、獨咲みて、二萬餘の勢を、心靜に押しつゝ、百八十里を二夜一日に押付け、四月十日の辰の刻に、朝鮮の都東大門の前へ押寄せたり。爰にて皇城の有様を見るに、玉樓金殿、薨を竝べ、外郭曠々として、結構美を盡せり。數千萬軒の町、戸棟を竝べ、富貴なる爲體、言語に絶する計りなり。然れども、防戦はんとする兵も見えず、門戸堅く關して、其内寂莫たり。行長、鎧踏張り立上り、何方よりか入るべしと見るに、四方の石垣高うして、門の高さも十間餘り、鐵を以て包みたれば、左右なく打破つて入るべき様こそなかりけれ。行長、左右を顧み、如何せんというてける所に、日比左近右衛門進み出で、門の脇なる水門より、先づ五十人も百人も入つて見給へといふ。行長、悦んで人を水門より入れんとするに、五尺四方に鐵を以て、格子に組み、たゞかしの拵へたれば、詮方なし。

行長白沫を噛み、兎やせん角やせんと、身を揉み、口々に匂りけるに、木戸作右衛門憲重、仕様こそ思出したれとて、馬より飛んで下り、甲を脱ぎ、指物を中間に持たせ走りより、鐵炮の臺を削り、筒を以て、鐵格子に差入れ、曳やくとこち上げたり。侍共四五騎計り、馬より飛下りく、助棒を入れはねたるに、さしもしたゝかなる鐵格子も、難なく折れて、水門は安々と開きたり。夫より人を入れつゝ、大門の門をばづし、扉を開きければ、小西一組二萬餘、段々に都に入りける。行長、眞先に進みつゝ、大の眼を瞋らし、拔駟け、亂妨仕るべからず、酒屋・店屋に入るべからず、若し相背く輩は、討捨てらるべしと、下知をなし、軍法の次第、堅く示し、静り返つて、徐々と王城へ入らんとしける。其有様、晉の鄧艾が成都に入り、唐の李晟が長安に入りしも、角やらんと、譽めぬ者こそなかりけれ。誠に行長、泉州堺津の生藥商人小西屋の如清が子なり。若年より船に乗り、隣國へ駟廻り、備前國宇喜多和泉守直家に奉公し、後、子息八郎秀家に至りて、武道の忠節、度重りしを秀吉公聞召され、直參に及び召仕はれ、程なく肥州宇土城主に仰付けられ、廿四萬石を下し給ひき。元來

町人下賤の輩たりと雖も、軍法其圖に當り、駟引き其術に叶ひ、武勇を異國に輝しけるこそ、人を取るに系圖を選ばずといふ事、尤なるかなと、知られける。斯くて行長は、洛中の體を見るに、人更になし。内裏に入りて見れば、宮殿空しうして、四門徒に開けたり。是れこそ殿閣を熟と見るに、城闕雲に聳え、樓臺玉を瑩め、其綺麗なる有様、秦宮の壯麗を摸し、良嶽の景趣にも過たも石〔脱字ア〕の堞山の如し。樓門の固には、鐵の柱・銅の扉、瑤瑤星を飾り、瓦の縫めは、玉虎風に嘯き、金龍雲に吟す。百工心を碎き、丹青手を盡せば、華麗眼を奪へり、百司禮儀を調へ、前殿には、萬乗の寶衣、捨置かれ、美人顔色を飾り、後宮には膏扮の運取散じ、珊瑚の臺上には、晨粧の鏡、空しく残れり。蘭麝の香は、局の外迄薫じ、住みにし跡はそれながら、枕の閑しき玉の床筐と、諸か留めけん。諸寮俱に開き、監士、宮門を守らずば、何方も物哀れなり。心なき荒夷、さしにも猛き小西も、天子の御座を拜し奉り、神さび舊びたる氣色に催され、兩眼に涙を浮べしかば、宗對馬・有馬・大村も、坐（こゝろ）に涙を催しける。行長は、先づ外朝にありて、宮門竝に外郭の四門を堅め、こそく人に人數を配置し、番

等堅く沙汰し、若し反攻もやあるべしとて、洛中を引退き、東大門北なる峯に、山取して、陣の固後陣の續くを待ちたりける。加藤主計頭清正は、南大門の海道に懸り、宗對馬が差越しける通辭徳右衛門を、馬に乗つて先へ立て、夜を日に續いで急ぐ程に、同十一日の午の刻に、毛谿川といふ大河に著きけるに、廣き事五町餘り、瀬枕大に瀧鳴りて、逆卷く水の早き事、龍門三級の如し。浪烈しく風寒く、渦卷水の湧き返れば、馬も恐れて尻込みし、只も止まず狂ひけり。若し船やあると尋ねけれども、小西が謀にて、切流したる事なれば、此方の岸には、一艘もなし。加藤與左衛門・長野三郎左衛門・山口與惣右衛門、先手なれば、此旨本陣へ註進す。清正、急ぎ乗付け見渡せば、中々夥しき大河なり。向の方には、數千軒の家々を連ね、棟を並べ、富貴なる所と見え、岸には數百艘の船を繋ぎ置きたり。通辭徳右衛門を呼びて、渡瀬を尋ねれば、彼は寒澁にて、然も此道不案内なり。清正、怒悶えて、人を走らし、川の上下三里が間、早馬の若武者共、馳廻り尋ねれば、船といふ物は一艘もなし。清正、大の眼より涙をはら〜と流し、天道盡き果てたる仕合かな。無念を堪へんより、

川へ乗込み、水に入り、死せんとのみ怒りける所、紀伊國湊の住人貴志左助といふ者、進出で、某遊ぎて參り、見申すべしといふ。清正、大に悦びて、疾々と申しけるに、貴志は、鎧脱置き裸になり、川へ飛入り遊ぎける所に、瀬頭にて息切れつゝ、篋直形に押流され、浮びつ沈みつ見えけるが、三町程下へ流著き、半死半生にて、此方の岸へ戻りけり。皆々爲方なく、手に汗を握り、清正も口脇より白沫を流し怒りけれども甲斐ぞなき。斯かりける所に、越中國礪竝の住人に、曾根平兵衛が嫡子孫六といふ者、生年十八歳になりけるが罷出で、某遊ぎて渡し申すべく候。本國越中の礪竝川は、是より早く候へども、幼少より一息に遊ぎ渡り候。殊更古主川田豊前守は、上杉景勝家老にて、越後春日山城へ、節々參り候時も、某十三の時より供仕り、越中越後の境川、山姥の出でたる姫早川四十八が瀬往下し、川は八十八川の落つる川なり。信濃國筑戸川神立が淵をも、心安く遊ぎ候へば、是程の小川は、越後の方の溝にて候と、いひも敢ず、具足を脱置き、裸になり、下帯計りに刀をば背に負ひ、川へ飛込みつゝ、逆卷く水を一文字に遊ぎて、向の岸へ打上り、大なる家のある〔所ノ一〕〔字脱カ〕へ

走入りたれば、人は北げてなし。捨置きたる飯酒、思の儘に支度し、小船一艘に打乗り、北國者の習にて、艦は上手なり、即時に漕ぎ渡し、かば、清止躍上り、悦びつゝ、是見よや、上杉家中の武勇の嗜、其心懸の深き事よとて、即座に知行五百石、折紙添へ、肩白の具足・甲一縮に、夕霧といふ名馬のさび月毛なるに、螺鈿の鞍置きて、孫六にこそ與へける。扱彼小船に人を乗せ、向へ渡り、數百艘乗寄せ、一萬餘の手勢、殘なく渡しけり。鍋島・相良も、皆々川を渡りける所に、先番の物見大村又藏、馬を早めて乗戻り、都は程なく、是にて候。數萬軒の家々、手に取る様に見え渡し、其内に内裏と思しき所は、少し高くして、火を焼き見え申候。良の方山には、小西攝州の御旗共、夥しく見え候と告げたりければ、清正、聞きも敢ず、先手の者共、急ぎて押行き、吾先へ通るべしとて、母衣の者阿波伊兵衛・島川九兵衛、右筆に下川兵太夫案内に、木村又藏召連れ、小西に先せられぬ内に、駈付けよ。但都へ切込まんは、又一重の大事ぞ。夫こそ誠の先驅なれ。馬を早めよ、旗さし急げと、いふ程こそありけれ。松原を乗抜き、南大門へ十町程近付く時、清正、母衣の者貴田孫兵衛

を呼び、汝随分急ぎつゝ、日本へ歸朝し、名護屋へ參り主計、都の一番入仕候と、申上候へとて、後へ戻し、清正が先手庄林隼人・加藤清兵衛が勢進み來て、南大門を明けんと犇めきけるに、門櫓より、兵二人顔を差出し、是は小西攝津守、昨日十日の辰刻に、此都を乗取り、門々固めて、罷あるなり。誰の御人數にて御渡り候ぞ。用の事あらば、五三人は入れ申すべしといふ。清正、大に色を損じ、扱も口惜しき次第かな。如何はせんと悶えけれども、爲方なし。清正、餘に怒つて、帝王は落ちさせ給ふ由なれば、只今より打立ち追懸けて、帝王を擒へ奉らんと犇めきけるを、鍋島加賀守直茂馳來り、是は物の付きて狂ひ給ふか。都入の先陣をせざれば、外に手柄する道はなく候か、能く分別して見給へ。何を指南に、何方へ帝王を追懸け候はんや。甚以て然るべからず。今度、朝鮮へ渡る所の日本勢、二十萬騎を以て、釜山浦より此都迄、其道一千二百里の間に、絆の城々を取つて、分配は是へ過半人數引きつゝ、此都に在陣の味方、僅に四五萬には過ぐべからず。然るを其考なく、虚空に方々へ働出でば、洛中彌、小勢にて、若し大明より、大軍出でば、防ぐ兵少くして、即時に都を

鍋島直茂
清正を諫む

取られ、危き事目前たるべし。先づ只今の日本勢は、残らず洛中を守護しつゝ、重て日本より、御加勢を乞ひ、洛中も大軍になり、夫々の城をも固め、氣遣のなき時、帝王の行在所をも聞き極め、大勢一同に寄せ懸け候はゞ、大功一時に全かるべし。小恨を忍ばずして、大事を破る者は私なり。君子は以て、私を害せず。公故に、進むまじきを見て、進まざるは、良將の旨なり。是を以て、白起は、杜邈の自盡を賜はり、王忠嗣は、萬人の命を一官に易からずといひて、終に石堡を攻めざりき。昔の良將、皆以て是の如し。必ず早く給ふべからず。日本より重ねて、御人數著くを相待たるべし。扱其後は、帝王の行在へも寄せ給へと、義を先立て、諫められければ、清正も理に詰められ、心服し怒れる面に涙を流し、無念を押へて止りける。明くる十二日より、後勢の軍兵、黒田甲斐守長政・大友豊後侍從義統・島津薩摩守義弘・瀬島左衛門大夫正則・戸田民部少輔吉繁・長曾我部土佐守元親・小早川侍從隆景を始めとし、四國・中國・九州の軍勢共、毎日々々朝鮮の都に著きしかば、行長・清正諸共に、此王城へ打入り、方々の備を爲し、後陣の續來を待ちて、四月十一日より、同月廿日過ぎ迄、何方へも働

かず、人馬の勞を休めけり。此時、洛中の日本勢、全羅・慶尙へ働き入り、直に平壤へ打つて出で、鴨綠江を渡り、遼東へ入らず、徑に山海關に入り、大明の四鎮を亂らば、東陽沼海へ容易く討取るべし。左あらば、遼東危急にして、明京震動し、大に功をなすべきを、洛中の日本勢、さまで大軍にてなければ、爲方なくして、後陣の續くを待ち居たり。

朝鮮征伐記 第三 終

朝鮮征伐記第四

加藤主計頭清正、朝鮮兩王子を擒にす

吁實なる哉、年光停まらず、下流の水の如くなる事を。歳改まり節追うて、文祿元年の春も、事繁きに早や立ち、卯月も半ば過ぎぬと、旬出でぬ。御本陣肥前國名護屋にては、秀吉公、日夜家康・利家を召集め給ひ、朝鮮表の合戦心許なし、如何あらんと宣ひつゝ、御坐しける所に、四月廿八日、小西行長・加藤清正等、朝鮮の帝都を攻取るの由、註進ありければ、斜ならず悦び給ひ、小西が使小西平左衛門、加藤が使貴田孫兵衛を御前へ召され、出御對面あつて、都入の次第、一々御尋ねなさる。兩人の使者、畏つて申上げけるは、日本の御太刀影に恐れ、帝王、先立つて、王城を落ち給へば、都入の時に於ては、別に粉骨の儀御坐なく候。只帝王を取り北し候とて、攝

小西加藤の註進名護屋に到著

津守・主計も無念がり、是非とも後陣の續き次第、大明・天竺・韃靼の果迄も、追ひ懸け候て、帝王御父子を擒へ申すべしと、日夜評定仕り候と申上げければ、將軍御感あつて、兩人が思ふ所さぞあらん。去り乍ら、高麗・大明をさへ切隨ふれば、帝王は自ら出でらるべき間、必ず深入して、越度を取るべからずと、再三申聞かすべしとて、御感狀を遣され、兩人の使にも、鞍置馬一匹つづ下されける。去る程に、朝鮮にては、日本勢段々に王城へ著きしかば、諸大將評定あつて、帝王を生捕るべしとて、諸口の追手をぞ定めける。先づ大明國への道筋平安道へは、小西攝津守行長一組、黃海道へは、大友侍從義統・黒田甲斐守長政、咸鏡道へは、加藤主計頭清正一組、江原道へは、島津義弘一組ぞ向ひける。文祿元年四月二十日に、平安道への先手小西行長一組、黒田・大友等、都を立ち、其の日は、開城府川の端、驪嶺村に陣取りける。明くれば廿一日に、開城府川を渡らんとて、小西が先手日比左近右衛門・小西若狭守、二陣大村新八・宗對馬守、段々に押行きける所に、朝鮮の舟師李統制番船を川中に懸け立て置き、其の勢五千餘騎、廿一日の曉、川を渡り、小西が先手へ朝駟に押寄する所に、

行長驪嶺村に陣す

加藤主計頭清正朝鮮兩王子を擒にす

之をば夢にも知らずして、行長が先勢共、李統制に覲面に行き當る。李統制が兵も、指詰め引詰め散々に射る。小西が先手一支もせず射立てられ、二陣の宗・大村が勢に、北げ懸る。新八・對馬が勢も、不意の事に遽おびえ騒ぎ、一度に瞳と崩れけり。三陣の五島・松浦も押立てられ、はしくくになりて引く。行長も先備、皆々亂れ崩れければ、驪嶺村の南の出口、椿山といふ山の麓に馬を立て、此處にてもり返さんと待ち懸けたり。李統制は、行長が先備を追ひ崩し、勝つに乗じて、北ぐるを追ひ來る所に、後陣に控へたる黒田甲斐守長政、生年廿五歳、氣逸物なる若武者なりしかば、聞くや怵ふべき。旗を龍粧に進ませて、小西が旗本を妻手めてに見なし、眞黒になりつゝ押出す。黒田が先手栗山備後守・黒田美作守・後藤又兵衛、五千餘り喚き叫んで駈出でける。李統制も、追ひ白あんで控へける所へ、黒田が先手より、後藤又兵衛村上上彦右衛門・眞先に駈入りしかば、黒田美作・栗山備後守、押續いて切り懸り、煙を立て、攻戦ひ、難なく追崩し、大河の邊迄、追討に討ちけるに、敵又返し來りしかば、後藤・村上、後陣に引下り、靜々と殿しんがりして引取り、椿山へ打入りけり。此時後藤又兵衛

手にかなふ所、其の外手痛く働きて、分捕高名せる輩多かりける。斯くては川を渡すこと、如何あるべけん、と、評定ありし所に、李統制は、蒼南城へ引入り、平安の通路開けたり。去れども大船の番船數十艘、開城府川にありしかば、之を攻取るべき評定をなす。黒田長政、若大將なれば、進出でて、今朝の軍に敵に一鹽付け候へば、長政が者共差遣し、番船切取り申すべしとて、船手の功者なればとて、村上彦右衛門尉義清・衣笠久右衛門尉佐範を押向く。村上・衣笠等、其の日の暮合より船拵し、明くる廿二日の未明に、大河の眞中に懸け並べたる番船へ懸りけるに、眞先の船は、防矢射るにも及ばず、明け退きしかば、即ちそれに移り、三町餘に控へたる十艘計りの番船の中へ、面も振らず乗り懸る。敵も此處を破られじと、散々に防ぎけるを、村上彦右衛門、大音揚げ鐵炮にて打痿め、十文字打鎗にて引寄せ、大船二艘乗取り、敵兵數多川中へ切浸しければ、残る番船は、押切つて開城府指して北げ上りぬ。今は通路の妨なしとて、諸軍打渡りぬ。同廿三日、加藤清正も都を立ち、開城府に到り、夫より打連れ、三里押して龍村れぐに著く。此の處平安・威鏡兩道の街なれ

ば、行長竝に長政と暇乞ひ行き別れ、小西・黒田・大友は、平安道指して押行きぬ。清正は、是より引違ひ、良の方に向つて、咸鏡道指して急ぎける。帝王父子の間、何れにても擒ふべしと、思ひ詰めたることなれば、汗馬の鞭隙もなく、都を出でて十三日、五月五日の晩景に、咸鏡道の入口蝗兼あんへんといふ處に著きたりける。爰にて十日逗留し、鍋島を待つ所に、加賀守直茂も一萬二千餘にて著きしかば、五月十六日に、清正・直茂打連れて、蝗兼をこそ打立ちける。同十八日の午の刻に、長橋といふ所に押し著きしに、町口に一つの高札あり。清正、馬を止めて、箕部金太夫に、此の札を讀ませらるゝ。其の詞に曰く、

指示 倭將主計頭清正將軍麾下

金貫之

臨海、順和兩府君、執斯路、而潛遜、入于兀良哈也。公等躡蹤、莫敢懈止焉。余示倭者非他。只求全線縷之身命耳。亮察珍重。

とぞ書きたりける。清正、之を聞き、躍上り悦びつゝ、王子を擒へ奉ること、掌にありとて、馬上にて、遙に日本の方を伏し拜み、是偏に本朝の靈神八幡三所、清正が

丹誠無二を憐み給ひ、斯かる奇瑞を爲し給ふとて、斜ならず悦びける所に、鍋島加賀守直茂、馬を打寄せて申されけるは、異國の習、斯様に遠路の大切所へ、僞り引入れ候て、此方を容易に、生捕るべしとの謀を以て、此の高札を立てたると覺え候なり。之を實儀と思ひ給ひ、追ひ過ぎて深入せば、越度を取らん事、目の前なり。第一直茂が軍勢共は、都を出でて十六日路、此の炎天に、大險の切所を押來り候へば、人馬疲れ苦んで、人心地も候はず。其上、百里而爭利、則擒三將軍。故不知諸侯之謀者、不能豫交。不知山林險阻澤之形者、不能行軍。不用嚮導者、不能得地利。是以從綏不過三舍とこそ、古人の申し置きては候へ。此處は兵糧・水草の便宜しく見え候間、爰許に逗留し給ひ、王城へ註進仕り、一左右次第に都へ引取り、人數を打入れ給へと、理を盡し諫められければ、清正が軍兵等も、鍋島の申さるゝ處、尤至極なりと、思はぬ者は無かりける。清正大に氣色を損じ、鍋島をはつたと睨み、何を宣ふぞ、加賀守。抑此の高札を、朝鮮人の立てたると思はれ候はんこと、全く以て僻事なり。是即ち、本朝の宗廟天照大神宮・八幡大菩薩の、遠く西戎の地に立翺

り給ひ、清正が丹忠の志を憐み、擁護の手を垂れさせ給ひ、武勇に神力を添へさせ給ふなり。清正に於ては、神慮に任せ奉り、陸は馬の通はん處、海は楫の及ぶ迄、尋ね搜して、帝王を生擒らば、歸るべからず。賀州は、御人數草臥れ候は、此の長橋府に残り留り、清正が歸を心永く待ち給へとて、甲を締直し、駿馬に鞭を中て、進みければ、鍋島も興を覺まし、かゝる狂人と合屬して、不祥を聞くことの奇怪さよと、世に無興氣なる氣色にて、さらば直茂は、是に残り申すべく候。相構へて能く御分別候うて、不覺取り給ふなとて、町外れ迄送りけれども、清正は物もいはず。況して暇乞にも及ばず、手負ひたる猪の怒る如くにて、一萬餘を引連れ、後をも見ずして押行きぬ。鍋島は、長橋城に陣を張り、近邊の兵糧を運び入れ、用心密しくせられる。清正は鍋島に別れ、足手纏の弱者は、中々残し置きたるぞ、心地はよきと獨言して、咸鏡道を良に向つて、いづくを限りともなく押して行く。未だ音にも聞かざる道なれば、所の者を生擒り、案内者に先立てて、問ひく山路を越えて行く。其道の程、中々語るに言もなし。峨々たる山に登る時は、高峯の雲に身を任せ、苔の筵

に宿を借り、岩漏る水に渴を忍んで、朽ちたる橋に肝を消し、霞籠めたる峽の道、向上げば萬仞の巖は刃を並ぶるが如く、見下せば千丈の潭は、藍を湛へて底もなし。山路素より雨なうして、空翠常に衣を濕せば、石壁四面に高くして、青苔上に厚く蒸し、萬木枝を交へては、舊草道を閉ぢ塞げり。谷川渡る時もあり、高峯を傳ふ折もあり。又は渺々たる濱路に出で、潮風寒き海原を、そことも知らず眺めやり、山には懸かる白雲の、幾重ともなく掩ひ來て、過ぎ來し峯も見え分かず、山中に日暮れぬれば、樵歌牧笛の音もなし。沙頭に夜を明せば、白浪高く寄せ來り、磯の松風颯々たり。巴峽秋に入りぬれば、梢の猿の音すごく、劔閣に天も近くして、月故郷の影を分てり。岩木を結ばぬ人なれば、日本を離れる數千里、古郷を出でて月日遙なれば、清正が兵も心細きこと、中々いはん方もなし。夜を明かし日を暮らし、足に任せて行く程に、朝鮮の都を出でて六十八日、鍋島に別れて五十二日と申すに、七月十二日の暮、前兀良哈の境なる法囷谷の城より、廿四里日本道四里隔てたる東泉城にぞ著きたりける。人馬、炎天に暑を〔脱字ア〕ルカ朝鮮玉城より、五千里六十里に餘りし道を押來りしかば、悉

く疲れ果てぬ。清正も東泉に逗留して、王子の在所を尋ね奉るべしとて、十日餘り陣取つて居られける。頃は文祿元年七月中旬の事なれば、吾古郷の靈祭る頃を思ひ遣り、梢に弱る蟬の聲、庭の夏草色古りて、折知り顔の白露は、置き餘る計りに亂れつゝ、枕に近き尾上の嵐、早や夜寒にも成りしかば、垣根にすだく蟋蟀、蟲の怨も哀れなり。清正も、他郷の空に秋の月を眺め、遙々と分け來し路を思ひ連ね、彼の在五中將にはあらねども、遠くも來つるもの哉と、吾身ながらも怪みぬ。抑清正が著陣せし東泉より廿四里日本道四里隔て、法圀谷といふ所は、日本の八丈島・硫黄島・土佐畑と同じくして、朝鮮一州の流人を置く配所なるが、十八里四方の廣野あり。其の中に山あるを、石垣を築きて、城を架へ、都よりの流罪人幾多ともなく籠め置きたり。彼の流人共、四邊の野を田畑に耕し、粟・稗を種を置き、月日を送る。子孫繁昌して、數百人に餘れり。之を法圀谷人といひ、此所を管領せり。痛はしや朝鮮兩王子は、後より倭將清正が、追ひ來と聞き給ひ、路なき山へ懸りつゝ、法圀城の下へ、七月廿三日の午の刻、夢の心地にて落付き給ふ所、法圀谷の流人共、此の由を聞くよ

りも、此の兩王子と申すは、吾人先祖の仇に非ずやと、此の時、王子を擒にしつゝ、日本人へ相渡し、先祖の怨を晴すべしと談合し、王子の許へ使を立て、奏聞申上げけるは、法圀谷の住人等、此の時、忠勤を抽んづべく候間、先づ城中へ入らせ給ひ、御休息あるべし。譬ひ日本人寄せ來るとも、防ぎ戰て、追ひ退くべき事掌にあり、と申上げければ、臨海君・順和君、數日飢に及び給ひ、立つ足もなき有様なれば、明日の命も知らずして、兩王子打連れ給ひ、左丞相李芳薫・右丞相範眞祖を先とし、高官の朝臣廿四人、兩王子の後の宮、其更衣・嬪御・女官廿四人、都合二百十二人瘦せ衰へたる有様にて、片息になりつゝ、はよく這々城へ入り給ひぬ。爰に長橋にて、高札を立てたる金貫之といふ奴、事の仔細を述べつゝ、路次にて清正に馳せ加はり、此の所迄來りけるが、案内は知りたり、方々馳廻り、王子を尋ね參らせける處に、法圀谷の住人を得たり。幸と悦び、金貫之を使にて、兩王子を生捕る旨、東泉へ註進せり。清正は、東泉城に於て、色々謀を運らし、王子を擒へん工夫を懲しける處へ、此の註進ありければ、斜ならず悦び、急ぎ手水うひ嗽して、遙に日本の方に向つて、是只事に

非ず。偏に伊勢・石清水を始め奉り、日本大小の神祇、冥道感應の御眸を垂れ給ふ故なりとて、感涙を流し、伏拜み給ひける心の中、躍り上る程にぞ悦びける。清正は、庄林隼人佐一心を呼び、明日法園谷へ押寄すべき間、此の中勞り置きたる日本の馬共を、悉く支度させ、段々の備も入らず、只一騎駈に押行くべしと、總陣中へ觸れよと、下知しければ、一心承り候とて、總陣中へ觸れ廻し、下々武具差固め、夜の明くるをぞ待ちたりける。去程に、金鷄三度唱へて、梢に白む山の端に、横雲漸く靉きければ、時分能くなりぬとて、早具を吹かせ、打立ちけり。清正は、木綿單の肌衣に、縫延の胴丸章摺長にさゝめかし、銀の長鳥帽子の甲の緒をしめ、大菊光の太刀を佩き、羽月毛と名付けたる沓入らずの名馬に乗り、妙法の旗を朝風に吹かせつつ、東泉城を打出でける。大手の門にて、馬より下り、眼を塞ぎ掌を合せ、心中に祈念しけるは、歸命頂禮八幡大菩薩、總じて日本國中の大小の神祇、弓箭の冥加あつて、清正を再び日本へ歸朝させんとの神慮ならば、朝鮮の兩王子を生捕らせ給へ。弓箭の運も極まり、家の果報も盡くべくば、只諸天善神の御憐を以て、今日大敵に

清正法園
谷城に向

合せ、討死を遂げさせたび給へと、涙を流し祈念しける、心の中こそ哀なれ。清正、手勢八千餘、廿四里日本道を一時に押し、七月廿四日の辰の刻に、法園谷城へ著きにけり。然れども、木戸を打つて城へは入れず。使を以て申しけるは、王子をも、城外にて相渡すべし。城中へは一人も入るゝ事はなるまじと申しければ、清正、案に相違し、思ひけるは、如何様にも不審なり。若し王子に非ざる者を、偽つて出すべきか、旁以て心許なし。如何にもして、城中へ入つて、王子かまた贖物か、實否を決したく思へども、城中三千餘なれば、城の構はよし、進退煩ひ居たりけるに、宮田平七、進み出で、吾れ大將の眞似仕り、城中へ入り候は、清正は、士卒へ御紛あつて、城中へ入り給へと申しければ、尤なりと同せられ、宮田平七を大將軍に作り立て、床几に腰を懸けさせ、右筆の小田原半助・仙齋といふ文者二人を使にて、門際へ遣し、日本の太上官主計頭清正、兵糧を仕り給ふにも、城の外には家なし。少しの間、城の櫓を貸し給へ。小性兩人膳部の役人計り、内へ入るべき由、申し遣しければ、法園谷人承り、小勢にて入り給へとて、即ち小門を開きけり。宮田平七大將になり、眞先

に入りければ、膳部の道具乃至少しの品々迄も、屈強の兵共に持たせ、役人なりと號して、四十五人内へ入る。清正も續いて入りつゝ、其の門開けと、下知すれば、今は制すとも叶はずとや思ひけん。大門を開きつゝ、五千餘の兵も、城中へ打入りけり。法圀人は、元來別儀なければ、一人も手向はず、清正は、王子の居給ふ館を取り巻き、簀部金太夫を以て、申上げられけるは、倭將清正と申す者、王子を追駆け参り候。とても逃し申すまじく候間、只此の方の陣へ入らせ給へと、奏聞しけるに、王子の寵臣李遇夫出で向ひ、日本の大將、若王子を助け奉らば、御出あるべし、弑し奉るべくば、内にて御自害此れあるべき旨、申し聞くべしとなり。金太夫申上げけるは、清正、苟も業を箕裘に受け、名を扶桑に顯せり。然りとは雖も、殺さざるを以て本とし、敢て辜なきを殺さず。今度兵を起す事、只先年の書翰に、返問なきを咎むるの外他事なし。只今殿下、臣が軍門に臨幸あらば、懇に日本國王關白秀吉に申達し、必ず御命を全う仕るべきなり。其の上朝鮮と會盟し、好を修し、契を結ばん事、往古の如くなるべし。若、關白、怒を止めずして、御命を奪はんと致し候とも、清正、今

度の俸祿に申し代へ、御命を助け奉るべく、其の儀、毫髪も僞誕に非ず。天の照鑒に任すと、申上げければ、王子悦び給ふこと斜ならず。さらば對面あるべしとて、廣さ六十間、長さは八町ありける馬場の中を拵へ、搗臼を二つ取寄せ、其の上に、門の扉を敷き、東方を王子の玉座と定め、西方に壘を敷き、日本清正が座と定む。王子出御ありければ、相從ふ大臣、左右に並んで威儀をなす。清正は、例の大菊光を鷗尻に佩きなし、加藤與左衛門、同清兵衛以下數十人、左右に召連れ座に著けば、王子禮を成し給ふ。清正が士卒、陣列して主を佐けて、威儀嚴重なり。清正、三度禮拜し、拜答の儀式相濟み、供御を王子に供へ奉り、諸大臣、残らず之を饗應す。酒已に三獻に及びける時、清正が兵、肴を出さんと走り廻るを見、王子近從の輩、俄に騒ぎ立ちて、すはや謀りて、王子を殺し奉るぞと心得て、半弓取つて打番ひ、主計頭が胸板に押當て、已に射殺さんとす。清正、大に驚き、こはいかにと制し止めけれども、言は通せず、聲々に呼ばはる程に、尙ほ進み寄りける所を、清正急度思案し、傳へ聞く、異國には印章を與へて、約をなすといふことあり。是こそ大事の所なりとて、腰に

著けたる巾著より、印判を取出し、鼻紙に押しつゝ、王子の近臣に、一枚宛與へければ、朝鮮の從臣等、是に静まり、各、矢をはづして、本の座に歸りけり。危しとも中々諭へん方はなかりける。清正、虎口の死を遁れ、吾本朝にて、數度の軍に遇ふと雖も、斯程に辛き目に遇はず。武勇の家に生れ、朝夕軍に隙なけれども、學問を勵んで、仕りけるによれり。會盟に印章を與ふる事を知らずば、今日は犬死すべしと自讃して、己が郎等共に向つて、才覺の程を語り誇りけり。主計頭は、太子臨海君、次男の王子順和君を守護し、從官竝に后達迄二百餘人、請取り奉り、隨分勞り奉るべしとて、田守久太夫・前野助兵衛を大將にて、精兵千五百付けつゝ、東泉城へ入れ奉り、用心嚴しく勗めけれども、兩王子の后達、諸從事官をば、心の儘に慰めつゝ、萬づ自由に持てななければ、王子を始め奉り、清正が情を感じ給ひ、此頃の疲を休め給ふ。主計頭は、歩の者百人の内、道の達者辯舌なるを五人勝出し、飛脚に申付け、日本名護屋へ遣し、兩王子を擒へ奉れる旨、申上ぐる。其の狀に曰、

清正朝鮮
兩王子を
擒にす

謹致言上候。去四月廿三日、朝鮮王城を罷立、威鏡道を良に向て、六十八日押詰、

王子御兄弟并後の宮、女官、其外從事官二百餘人生捕申候。帝王は、大明國へ御退出の由、王子被仰候。二六時中、帝王御父子を擒可申と、心懸候に付て、神慮に叶、御威光を以、如是に御坐候。高麗、手弱き國故に、今迄手痛く合戦に不及。因之、上意にては無御坐候へ共、法圀兀良哈程近候間、彼表へ働、日本の御弓矢の風儀見せ可申と存、明日法良圀を罷立、兀良哈へ切込申候。彌、可抽忠戰候。王子官人の書付、別紙に差上候。右の趣、宜預御披露候。恐惶謹言。

七月廿五日

加藤主計頭 清正

淺野彈正少弼殿

右の飛脚五人、共に恙なく、九月末に高麗の都へ出で、十月下旬に、日本へ渡海し、十一月十日に、名護屋へ著きければ、折節、秀吉公御前に、家康・景勝・利家を始め、大勢伺候仕られける處に、右の註進の狀、淺野彈正差上げければ、秀吉公披見し給ひ、御手を拍ち、何れも此の狀見られ候へ。朝鮮の王子兩人迄、主計頭擒りたり。扱も手柄を致せりとて、大に悦び給ひければ、御前の大名・小名、皆一同にぞ感じける。秀

加藤主計頭清正朝鮮兩王子を擒にす

吉公、御感斜ならず、御感狀自筆に遊ばされ、吉光の御脇差并黄金五千兩添へて、清正に下されける。

加藤清正、兀良哈に攻入る附兀良哈都燒拂

去程に、主計頭清正は、八月中、法圀谷に逗留あり。今は残念なし。是にて聞けば、兀良哈の者共は、弓の達者にて武勇に長じたりと云へば、彼の國へ働くべし。日本の弓矢を見せ、夷共に一鹽付けんと思ふなり。道はいか程あると尋ぬるに、法圀谷人承り、是より廿六里日本道程、行き候へば、鳥路村といふ在家あり。夫より六里日本道、過ぎて、十三箇所城郭あり。是則ち兀良哈の境目なり。そこより六十五里日本道、過ぎて、兀良哈の都なりと答へければ、されば法圀谷人に案内させよ。但し味方討なき様にとて、三千の法圀谷人に、南無妙法蓮華經の五文字を布に書きて、鎧にも笠にも付けさせ、九月十日に、法圀谷を打立ちける。其の道の有様は二抱計りの横の木も、十里計りが間は、森々と生ひ茂り、木の本は野も山も、皆木賊といふ草な

りける。斯くて十日の晩に、意丹城の南龍心といふ所に著き、爰にて通辭を呼び、様子を尋ね、明くる十一日に、意丹城を攻取るべしとて、軍評定ありける所に、森本儀太夫と貴田孫兵衛と、先陣を争ひ、已に同士軍に及びけるを、清正扱ひつゝ、兩方を静めけるは、流石の侍共とも覺えぬ事を、振舞ふ者哉。今宵同士軍して、討果つべき其命を、清正に預け置き、夜明ければ、意丹城へ取懸るべき間、あれにて甲乙を極めよと怒られければ、兩方共に静まり、皆陣所へぞ歸りける。中にも儀太夫は、己が陣所へ歸ると均しく、兵糧を仕り、即ち出立をぞ仕りたりける。鎧物具取附け、腰兵糧迄調へて、本陣をばまだ宵に打立ちつゝ、意丹城の堀際迄押寄せて、夜の明くるを持ちたりける。夜半の嵐の誘うて、松の梢も吟をなし、谷の小川の流迄、若しも貴田にてやあらんと、雲透にためらひて、夜白まば、乗込むべしと、手を握り牙を噛み、東の白みを待ち居たり。夜深更に及べども、木綿附鳥の音もせず、明け行く鐘の響もなし。十日の月、西の山に幽なるに、秋の哀れを催して、蟲の聲々恨みつゝ、流石に猛き森本も、心細くぞ覺えける。去程に、夜もほのくくと明け行けば、

清正意丹
城へ押寄

清正、八千餘、意丹城へ押寄する。其中にも、貴田孫兵衛は、森本に先立たんと志し、紅下濃すこの具足に、鍬形打ちたる唐の頭の甲を、猪首に著なし、鯖の尾出したる赤母衣懸け只一騎、諸軍に三町程先立ちて、意丹城へ駈來る。朝霧の晴間より、城の方を見渡せば、黒具足、同毛の筋甲著て、猩々緋の羽織、金の戻竹に孔雀尾附けたる腰指仕りたる武者、糟毛の馬に乗り、只一騎堀際にぞ控へける。貴田孫兵衛、馬打寄せて、之を見れば、森本儀太夫なり。儀太夫、貴田を見付けて、只今來たる後者は、貴田孫兵衛と見るは僻目か、先陣を争ふ程の侍が、夜明けて來るをかしさよと、高聲に呼ばれば、孫兵衛、聞くよりも、遲早は入るべからず、勝負にて極むべしと進む處に、言の下より、森本、馬より飛びて下り、已に先をせらるべくや、優やさしの男やとて、意丹城大手の木戸へ走り入る。城中には、類頼といふ大將にて、兀良哈の兵三千計り楯籠りたれば、森本が懸るを見て、屈強の兵廿餘人、門を開きて散々に射る。去とも、儀太夫、少しも痿まず、門口へ駈入り、鐵木舌といふ兀良哈人と押並んで、むすと組み、上を下へ駈ひっかく返し、組合ひけるに、兀良哈人は大力なり、森本は極めて小男なりければ、組みしかれける所を、儀太夫、心早き兵にて、兼氏の妻手指を抜き、敵の鎧の透間を一突ききて、くつたりけるに、さしもの大力も叶はずして、弱々となりけるを、儀太夫下より跳返し、押して首を取りたりける。貴田孫兵衛も、森本に續いて駈入りける所に、教々賀といふ兀良哈人、其の長八尺に餘りつゝ、二王の如くなる大男、喚き叫んで出でたるを、孫兵衛、押並び引組んで、どうと伏し、背にかけたる母衣申も押潰れ、上になり下になり、組み合せける所に、孫兵衛が甲に懸けたる唐の頭を、兀良哈人に抓まれ、押付けられければ、孫兵衛も、今は叶はじと思ひけん。敵の上帯を掴み寄せ、脇差を抜けども、一尺六寸の脇差にて、寸延びたれば、中々に組み合ふ内に抜けざりけり。今は爲方なく、甲の唐の髪毛を抓れたるを、振放たんとや、聲を上げて、二三度組み合ひけれども、敵は大力なり、少しも放さず、唐の髪毛を取つて、押付けく仕りければ、終に叶はず、下になり、脇指は抜きたれども、真中より折れたりければ、終に敵の劔に突かれ、念佛高聲に申しつゝ、三十三歳にて討死しけるこそ無慙なれ。清正が先手加藤清兵衛、山口與三右衛門は、貴田が討たるを

貴田孫兵
衛の武勇

加藤清正兀良哈に攻め入る附兀良哈都燒拂

清正勇戦

見て、あれ討たすな、續けやとて、馬を乗り放ち、手鎧提げ門口へ喚いて懸入る。敵も爰を破られじと、劔を持つて下り、火花を散して戦ひたり。大將清正は、馬を乗り放ち、木戸より東の塀下へ、只一人付けられけるを、母衣の者阿波伊兵衛・島川九兵衛、打見て、こはいかに越されけるはといふ儘に、一度にばつと走り上る。清正きつと見て、何條汝等に越さるべきぞ。此城の一番乗加藤主計頭清正なり。後日に論あげらふなと匂りて、塀へ乗り上る處を、内より鎧・長刀の切先を揃へ、突落し切拂ひければ、清正も二三度突落されけれども、塀の腕木を放たず、又取付きて乗上り、一番乗主計頭と、頻に名乗りける所に、阿波・島川も乗上りしかば、箕部金太夫・大木土佐守、續いて乗入り、同勢と攻入りしかば、城主頼頼相叶はず、搦手指して落ちて行く。清正が兵共勝つに乗じて追懸け、元良哈人七百三十二首を取つて、城中を焼立て、勝鬨をぞ上げたりける。味方にも討死侍七人・雜兵廿七人なり。此の外、端城十二箇所ありけるを、押寄せ、攻めけるに、此の國の習、前は堅固に防ぎ守ると雖も、後は險難石垣を頼み、防ぐ人數一人もなければ、法圀谷人を差向け、清正は後

の高山へ攀登り、城中を目下に見下し、常々五十人・三十人にも、容易に動かし難き大石を、鐵てつ挺にて跳起し、峯より城中へ十計り宛落し懸けしかば、只輪寶下つて、山を平ぐるが如し。城中周章騒ぐ所を、大筒・鐵炮を調へて、目の下に見下し、散々に打立てければ、一支も支へずして、吾先々と落ちて行く。九月十一日の卯の刻より酉の刻迄に、城十三箇所攻落し、其夜は川下に野陣を取り、方々の寨々に侍伏せ、物聞き段々に置き、大箒山の如くに焼かせつ、用心厳しくせられける。清正は、森本儀太夫を呼び、今日、意丹城にて先陣を仕り、殊に一番高名組討に仕りたる段、神妙の至なりとて、五百石の加増をぞ充行れける。儀太夫申しけるは、貴田孫兵衛事、吾等と一度に門口へ付、屈強の敵に渡合ひ、組合ひ申す處に、甲に懸けたる唐の髪毛を、敵に抓まれ、振り放さんと仕り候へども、大力の敵にて、少しも放さず、押付け押付け仕り候故、脇差を抜かんと致候へども、大脇差故、武具の上にて抜かれず。然る内に、息切れ候や、終に組みしかれ、討死仕り候。是も某と、前宵に口論仕り候故、無理なる討死を仕り候事、不便なる次第にて候へ。某も助け申したく候ひつれども、

敵に押し阻てられ叶はず、眼前に討たる、傍輩を見捨て、生甲斐なき仕合にて候とて、涙をばら／＼と流しければ、清正、聞きも敢ず、孫兵衛が思入、さもこそあらんと思ひつれ、不便なる次第なり。今は歎くとも返らざることなれども、せめて死骸なりとも、一目見んとて、歩侍十人計り遣し、意丹城大手より、孫兵衛が死骸を搔寄せて、清正の膝の上へ、孫兵衛が空しき頭を枕させ、軍亂の事なれば、討死せしも知らずして、今迄暇乞せざりしことの悔さよ。軍の習、討死せしは尋常なれども、今度、高麗の都入の時、日本へ註進の使に、汝を申付けたりしに、都表の合戦こそ、一大事とは存候へ。御使の事は、誰にても勗め申すべく候間、某は都入の御供仕るべくと、頻に申しけるを、吾色々認め、將軍への註進なれば、勇士の殊更辯舌よく、公界馴れたる者にてなければ、御前の首尾悪しき間、夫故其方を遣すと、色々理を碎き申せしにより、是非に及ばず、恨めしき氣色にて、日本へ歸朝し、夜を日に繼いで名護屋へ参り、御註進申上げ、七十に餘る母の古郷肥後の熊本にあるへも、使計り遣つて、直に此方へ渡海し、夜通に道を急ぎ、今度、清正、蝗乘に逗留せし内に駈付

け、嬉氣なる有様にて、殿の御前途を見ん爲に、老いたる母が許へも、人計り差越し、大事の物前にて候へば、御使に、歸朝仕り候へども、夫へは寄り申さず候と、申送り候ひつれば、母にて候者、杖にすがり、使の奴を門外迄送り、相構へて、孫兵衛に、老いたる母が不便なりとて、殿の御大事を見逃すべからず。弓矢の家に生るゝ者は、名を惜みて、命を惜まず。死ぬる所にて死ぬれば、一門の面目なるぞ。相構へて古里戀しとて、未練を働くべからず。明日をも知らぬ母が身なれば、是のみぞ心許なく思ひける。去り乍ら、只二人ある子なれば、名残は惜しきぞとて、門外にて泣き候ひつると、使の奴歸つて語り候。哀れ武士程、世に墓なき者は候まじ、去り乍ら、母が申せし如く、名こそ惜しく候へと、清正が前なれば、さも涼しく語りつれども、母が事を思ひ出せしや、涙ぐみたりしを、今の様に覺ゆるぞやとて、清正、涙を流しければ、相従ふ兵共も、皆鎧の袖をぞ濡しける。扱あるべきにあらざれば、死體を灰になし、遺骨を古郷へ持遣はされ、孫兵衛なれば、弟を呼越し、兄の所領を與へ、其の跡目にぞせられける。傳へ聞く、唐の太宗は、鬚を切つて、李勣に給はり、

亡卒の遺骸をば、帛を散じて收めたりき。今の清正も、戦士を重く寵愛せしに依り、名譽を三國に播すと、心ある人々は、稱歎せぬはなかりける。扱清正、母衣の者を以て、兀良哈の都程近く候間、一定今夜は夜討あるべく候。諸手より顛物見・聞次を出し、外聞の鐵炮、油斷あるべからずと、總軍へぞ觸れたりける。案の如く、九月十一日の夜半計りに、兀良哈人、三千餘にて押寄せ、大鼓を打ち、関を作り、雨の降る如くに、矢尻を支へて、散々に射る。清正が方には、待懸けたる兵共、すはや敵よといふ程こそありけれ。三宅角左衛門・坂川忠兵衛・小關平助・赤星太郎兵衛連れて、突いて出で、鐵炮を左右へ廻し、打痿め挑戦ふ所へ、清正が執事、肥後の佐敷城主加藤與左衛門、黒革緘の腹巻を、中二段紫絲にて緘したるに、大袖附一尺九寸の菊一文字の長刀を、右の脇に引き、側手勢二百餘、敵の後を取切らんと喚いてこそ懸りけれ。兀良哈の兵共、與左衛門が廻るを見て、後を切られ、叶ふまじとや思ひけん、捨鞭を打つて、ぱつと引く。三宅・坂川・小關・赤星等、勝つに乗じて追懸けたり。兀良哈の勢の中に、月緑子といふ兵、大力の剛の者なるが、大身の鎧を提げ、返合ひ防ぎ

ける所を、加藤與左衛門渡合ひ、一文字の長刀にて、暫し戦ふとぞ見えし。互に入られて踏込み、相突に突きたるに、與左衛門が長刀にて、月緑子が内甲を撞きければ、月緑子が鎧は、與左衛門が具足の鼻紙入の傍に中りたり。去れども具足強くして、疵になる程裏かゝず、月緑子は内甲を撞かれて、犬居にどうと伏したりける。與左衛門、長刀を取直し、持つて開いて丁と切り、左の高股半過切つて、のけに返す所を、郎等共走り寄り、押して首を取りたりける。残る敵は、右往左往に崩れ行く。三宅角左衛門・赤星太郎兵衛は、山手を押廻り、小關平助・坂川忠兵衛は、川に沿ひて引包み、兀良哈人二百卅一人計り取りけり。加藤與左衛門・大木土佐守乗り來り、長追仕るべからず。最早引揚げ候へと、再三下知して除ければ、追行く兵共も、勝関を曠と作り、本陣へ引入りけり。主計頭、諸手の物頭共に下知しけるは、人數の多少を、敵に見透されては叶ふまじき間、やがて此方より、逆寄に寄すべき間、其の旨、觸れ廻せとて、總軍へ下知をなす。頃は文祿元年九月十一日の夜半過に、意丹を立ち、夜の中に二十里日本道三里餘を過ぎ、汗馬を早め押す程に、明るる十二日の卯刻に、定峯

といふ山へ攀上り、兀良哈の王城を目下に見下したり。其の王城の夥しき、言語を絶ゆる計りなり。家数の多き事、日本の都に五倍も増しつらんと覺ゆ。金殿紫閣軒を争ひ、富貴の有様目を驚かせり。清正弓杖に縫り下知しけるは、存の外なる所哉、此の體にては、敵の勢、定めて大軍たるべし。勢のありさま見透させて、越度を取らん事必定なり。鐵炮を放ち懸け、関を揚げよと、下知しければ、承り候とて、總て鐵炮を、一同に山の上より放ち懸け、大貝を吹立て、曳々聲を上げて、関を嚙とぞ作りける。一萬餘りの勢なれば、山彦に響渡り、谷巔一同に震動せり。兀良哈の帝王鐵木咄單子、是に驚き給ひ、すはや日本人寄せたるは、定めて大軍にてぞあらんすらんとて、鳳輦に乗り給ひ、后妃王子を先立て、吾先と内裏を出で給へば、洛中の貴賤男女老若、取る物も取敢ず、子は親の後を尋ね、兄弟をも忘れ、妻子を失ひ、是は是はと計りにて、北げ落つる有様は、中々語るに言もなし。庄林隼人佐、一心に進み出で、天子、都を落ち給ふと、通辭の者申し候間、他に任せ、追駈け申さんと、馬を乗り浮べ、勇みけるを、主計頭、聞きも敢ず小人數にて、大軍を追ふ事、智才の足らざ

兀良哈城
を攻む

る所なり。後陣の勢も續かず、一旦の勢にて、足長に踏込み、日本の弓矢をば、其の威逞しく、彼に見せたり。此の上は追ふべからず、少しも早く放火せよとて、諸軍勢を手分して、先づ内裏に火を懸け、方々一同に焼立つる烟、明方の雲と亂れ合ひて、空は霧の海となり、朝日の光も朧なり。洛中の男女老若、貴となく賤となく、東より西・南より北、思ひくりに迷ひ行く。其の有様、哀を催さずといふことなし。清正の先備、段々に立並び、洛中の大廈高樓、殘なく一度に焼立てしかば、煙、宇宙に満々として、空に知られぬ雲霧の、幾重ともなく掩ひ來りて、野も山も、皆常闇となりける。清正、母衣の者を遣し、此の煙の紛に、早々人數を縈め、足早に引取るべしと、追々に下知すれば、軍兵共段々に備を立て、くろのき線除に都を出でつゝ、日本道三十里五里引退き、星隣山といふ山の上に上り、山取して人馬の息を休めける處に、都を焼かれ、口惜しくや思ひけん。兀良哈の將軍、不骨木といふ者、大將にて半弓五千張、眞先に押立て、同勢五萬餘、胡角を吹き、大鼓を鳴らし、半弓を雨の降る様に射懸け、劔戟の刀を揃へ、狼の鳴く様に、聲を上げて駈來る。谷・嶺・平等に響き渡り、八尺・九尺

に餘る大男共、野も山も一面になつて、懸り來る事、洪水の漲り來るに異ならず。清正が勢、之を見て、今は最後と思切つて、逆も逃れぬ所なり、一足も退くなると、先づ手分をぞ仕たりける。先手は加藤與左衛門を大將にて、永野三郎左衛門・原田五郎右衛門・天野助左衛門、其の勢二千にて備へたり。敵懸くるをば、真先に突崩さんと、獅子の齒咀して、鎧を小膝に載せ、敵陣を睨んで控へたり。二の切は、加藤清兵衛にて、小代下總守・近藤四郎右衛門・安田善助、其の勢千五百餘、馬を後に引立てさせ、先手崩れば、此方より入り代り、一捲り・二捲り落さんと、甲の鉢を並べつゝ、靜り返つて備へたり。左の尾崎には、山口與惣右衛門・齋藤立本・大脇右衛門、二千餘、横矢に敵を射立てんと、鐵炮に火繩を挟み、射手は弓絃喰しめし矢筈を取つて、待懸けたり。三陣は、清正旗本なれば、妙法の旗を、山風に吹靡かせ、銀の馬藺の馬印、日に輝かして、押立て、清正は銀の長烏帽子の甲の緒を締め、例の大兼光の太刀を佩び、音に聞えたる片鎌の鎧を、妻手めての脇に引付けさせ、床机に腰を懸けて控へたるに、屈強の侍二百計り、下り立たせ、鎧を持たせて、左右に折敷かせ、旗本の弓・鐵炮

を、兩の手先に立並べたれば、彼の常山の蛇陣も、斯くやと思ふ計りなり。去程に、兀良哈人五萬餘、真黒に寄來り、先手の大將加藤與左衛門、塵を振つて、法圀谷人は、右の尾崎より礮を以て打立つべし、總人數は、真丸に取合ふべからず。只指塵き次第に、鎧を入れよと、其の身も手鎧提げ浮やかになつて、下知しける處に、早や左の尾崎より、齊藤・山口大助等、弓・鐵炮を放ち立つる。敵打たれ痿え、洋所を、清正自身馬藺を振り、時分は能きぞ、すは懸れ。首を取るまじ、真黒に鎧を入れよと、伺りしかば、言の下より、加藤與左衛門が備より、和田備中守・井上大九郎・大木土佐守、只三人一番に走り出で、大敵の真中へ、一度に鎧を入れしかば、大將與左衛門、身を揉んで、あれ討たすな、續けやとて、混甲二千餘り、一同に踵とぞ懸りける。互に火花を散らしつゝ、揉に揉んで攻戦ふ。馬煙虚空に廻つて、塵微塵を吹立てたるが如し。暫し防ぎ戦ふと雖も、清正が兵共、押立て、攻めしかば、兀良哈人討負けて、北の方の田の中へ、人雪類をつかせて崩れ込む。討たる者數を知らず。されども、敵は大軍なれば、又取つて返し、足をも亂さず、懸り來る。清正が先勢も、戦疲

れ見えければ、二の切加藤清兵衛が勢、入り代らんとする處に、日本の大小の神祇冥助の手をや、垂れ給ひけん。天俄に搔曇り、辰巳の方より、黒雲一村掩ひ來り、見ること、天地俄に震動し、雷電夥しく鳴り出で、大風烈しく吹き出で、霰交りの雨降れ惶きて、此處彼處の木蔭に立寄りけるに、電天地に閃いて、雷大に鳴響く。清正が兵も、是に利を得て、一陣・二陣一手に合せ、大山の崩るゝ如く、一度に墮とぞ懸りける。兀良哈の大軍共、山より下へまくり落され、人馬、彌が上に落重なり、壓しに押され、踏殺され死傷する者、數を知らず。是より總軍亂れ立ちて、吾先々と、捨鞭を打つて、落行きけるを、加藤清兵衛、馬を横に立切つて、一人も追ふべからず。若し長追する輩は、後より鐵炮にて打殺せと、眼に角を立て、下知しければ、流石に物馴れたる兵共にて、承り候とて、總軍を眞丸に立て、本陣の山へ引上げたり。今日の軍に、討捨てたる敵の數九百七十三人、深田・大河へ落入つて、溺れて死したる者も、千人に餘れり。味方も手負・死人多かりければ、其の夜は、山上に大篝焚きて、陣取り

つゝ、人馬の息を休めける。今日、山取して陣取る故、大事の合戦に討勝ちしぞや。若し山に陣取らず、其の上大雨・大風せすば、味方一人も助かるまじ。諸天善神の影向あつて、今日の風雨を起し給ひ、清正に力を合せ給へと、甲を脱ぎて、遙に日本の方をぞ伏拜みける。明くれば九月十三日に、星隣山を立つて、朝鮮國へ歸陣せんと、用意せし所に、又兀良哈人一萬計りにて、大鼓を打ち、半弓を引儲け、一文字に懸り來る由、遠見の者より註進に及ぶ。清正備を立て、今日の殿は大事ぞや。吾を殿して除くべしとて、二百挺の鐵炮を備へ、左右に歩立の侍二百人、鎗を持たせ折敷かせ、徐に繰引に引きけるに、兀良哈の先驅、蓮綿といふ大將軍は、清正の出立を見、半弓を七百張、段々に押立て、矢尻を支へ、散々に射る。清正少しも騒がず、敵合三十分程、間を引寄せ、百挺づつ鐵炮を放させ、時分はよきぞ、鎗を入れよと下知すれば、阿波伊兵衛・出田宮内少輔・森本儀太夫、眞先に抽んで、墮と鎗を入れしかば、殘兵共一同に懸りける。兀良哈人一萬餘、昨日の働にや手懲しけん、暫し支ふるとぞ見えし。吾先々と崩れ立つて、前後一つになつて敗北せしかば、清正、馬蘭の馬印を振

り、追ひ行く人数を纏め、手負を先に立てつゝ、徐々と引取る。明くる十四日には、兀良哈の國境を出で、朝鮮咸鏡道劇城といふ處迄、人数を打入れける。人馬意外に草臥れ、清正も事々しく疲れければ、劇城に二十日逗留し、人馬の息をぞ休めける。

清正征東使伯寧將軍を擒にす

附 清正蝗秉に到り打入る人数

爰に、朝鮮四道の元帥、征東使伯寧といふ者は、日本人と初度の軍を仕損じ、此の道へ落ち來り、劇城より五日路、東靺鞨浦といふ處に、隠れ居る旨、清正に告げたりければ、主計頭は、天の與ふる所なりと、悦びつゝ、九月廿六日に、劇城を打立ち、十月朔日に、靺鞨浦へ著陣す。所の者を召捕へ、案内者に先立て、鵬平次井上大九郎・小代下總守に、鐵炮二百挺相添へ、彼の征東使が籠りたる砦の嵩鷄谿といふ山へ指向け、清正は、自身百挺の鐵炮を先へ押立て、二百騎の侍に下立たせて、鍵を持たせて、残る勢は、鷄谿の二方を取圍み、一度に関を作り懸り、鐵炮を打入れたるに、征東

清正靺鞨浦出陣

伯寧を擒にす

使も、軍兵共を下知して、矢、鐵炮を打出し防戦ふ。清正白旄を振り、時分は能きぞ、只平攻に乗り入れと、下知を爲し、塙を二三間踏み破り、喚き叫んで押込みたり。征東使、今は叶はずして、劔を打振りく、駈抜けく、鷄谿の方へ北げ出し、を、小代下總守・鵬平次・井上大九郎下り合せ、終に征東使伯寧將軍を擒へけり。高手・小手に禁め、清正前に面縛せり。身の長六尺五寸、糟尾鬚にて大の男、年は五十四歳なり。清正斜ならず悦び、討取る首共實檢し、人馬の息を續ぎける所に、生捕の中に、後藤といふ通辭一人あり。此の者、日本松前の者なりしが、獵船に乗り、風に放たれ、此の靺鞨浦へ著き、已に二十餘年、此の處に住居せしかば、兀良哈朝鮮國の言を使ひ、最上一の通辭なり。清正、大に悦び、次郎と名を附け、方々の案内者にせられける。抑此の靺鞨浦といふ處は、日本より艮に當り、雲晴れ日和の能き時は、駿河の富士山、坤に當りて近々と見え渡る。松前より北にて、日本の東北たり。家を葺くにも食事にも、皆昆布にてぞありける。清正は、朝鮮王城より、六十八日路、其の道四千九百廿餘里六町一里なれば、今は人馬を疲勞せんも、其詮なし。最早人数を引取る

清正征東使伯寧將軍を擒にす附清正蝗秉に到り打入る人数

べきに極りつゝ、十月五日に、靺鞨浦を立ち、王子を籠め置き奉りける。東泉城迄急ぐべしとて、通辭後藤を呼び、案内者に先立ちて、初の道は九日路なるに、靺鞨浦より三里戻り、横道方より五日路あり。近路を押立ててぞ通りける。其の道、沙塞といふ大河に沿うて上りし處に、川の向は、兀良哈の地なり。其所に后虹といふ家四五百軒あり。一の村里あり。其の村より二三百人立出でつゝ、清正一萬餘にて、さゝめき渡つて、海道を押通るを、見物に出でたりしが、其内より三人罷出で、清正が方を招き、尻を捲り叩きつゝ、一度に踵と笑ひたり。清正、大に腹を立て、あの奴射落せと下知すれば、馬上の侍十騎計り下り立ちて、鐵炮を打懸けしかども、其の間遙なれば、丸一つも當らず、清正腹を居る兼ね、通辭後藤を呼び、此の川に、渡瀬はなきかとありし時、さん候。一町下に渡瀬の御坐候。然も瀬廣くして、渡り能く候と答ふ。さらば渡せ者共とて、取つて戻し、馬強なる若武者共、真先に乗込み乗込み總軍、関を揚げ、一度に河をぞ渡しける。此の有様を見るよりも、二三百人の兀良哈人、蛛の子を散らす如く、后虹村へ北げ入りければ、清正は、堤の上に馬を

立て、通辭後藤を以て、村中へ申しけるは、此の兀良哈といふ國は、日本にては音にも聞かざる所なり。然れども朝鮮國にて、聞き候へば、此國弓の上手にて、武勇勝れたりといふに依り、日本の弓矢の風を、此の國に知らせん爲め、是迄攻めて來りたり。兀良哈の帝都を去る九月十二日に、悉く焼拂ひ、意丹城を攻崩し、數度の合戦に打勝ち、只今歸國に赴く所なり。是全く日本國王の勅命にも非ず。只清正が所存により、此の如くなれば、別に其地に於て、少しの意趣、遺恨なきに、何とて今日、川向を押通すに、其の方共數百人罷出で、尻を捲り嘲笑ひしや、甚だ以て心得ず。其内、張本の奴三人あり。此の者共を召捕へ、急度此方へ相渡すべし。若し違背に及ば、是より十日・二十日路が間を、縦横に攻め靡け、在々所々一字も残さず焼き拂ふべし。理至極仕候間、彼の狼藉者三人は、即ち誅戮仕り候とて、彼の三人を縛りつゝ、清正の前へ引出し、大なる俎に、彼の奴原が首を當て、櫛刀を以て頸に加へ、槌を振上げ打ちたるに、首は一度に離れつゝ、一間計り飛びたりける。即ち一村の老者數十人、清正の前へ罷り出で、羊の皮百枚、貂こつひの皮百枚進上して、手を合せて禮をな

せり。清正、大に機嫌を直し、心地よしと悦びつゝ、又川を打渡り、本道にかゝり急ぎけり。十月九日の晩景に、法園谷を打過ぎ、東泉城へ歸り付きしかば、田守久太夫・前野助兵衛、迎に出で、死したる人の蘇生したる如く、悦ぶ事限なし。清正は、湯浴髪洗旅の疲れを治し、朝鮮兩王子へ、御目見に罷出で、兀良哈表の勳、竝に征東使伯寧を擒へたる旨、委細に申上げ、やがて征東使を引立て、王子の御前へ参りけり。兩王子は、上壇の間に御坐す。其中壇には、左丞相李芳薫、下壇には清正竝に郎黨ども數十人伺候せり。兩王子、御簾を捲かせ、遙に叡覽ありければ、征東使は、白洲にひれ伏し、縁迄も上り得ず、頭を地に付け、涙を流し、通辭に向つて、色々に口説きつゝ、額を砂に打付くれば、眉間より血流れたり。清正、通辭を以て、自害すべき爲めかと、尋ねられければ、征東使、涙を押へ、抑臣伯寧は、元來庸愚鹵莽の徒、亡賴織芥の卑賤たりき。然るを王子殿下の御父、當今天子の御目利を以て、大國を下し給ひ、武官を授かり、皇都より南、京畿・忠清・慶尙・全羅の四道の將軍は、もりす 救使判官王僧璘に仰付けられ、京より北、江原・黃海・平安・咸鏡の大將には、吾等を仰付けられしに、

其鴻恩の甲斐もなく、一戦にも及ばずして、天子蒙塵の巷に落ち、剩へ太子・后宮を、安々と敵の手に渡し、吾身さへ此の如きの縲紲の苦を受け、禁錮の内に押籠められ、再び龍顔を拜し奉る事、骸の上の恥、黃泉地下迄の忘念、何事か是に勝らんや。倭寇、今少しも遅く寄せたらましかば、國々へ觸遣し、人數を集め、一戦に及ばず、斯程に脆くは負くまじきを、行長・清正の倭將共、透間なく取懸りしかば、斯かる淺ましきことになり、生々世々の遺恨たり。せめて討死したりせば、此の恥辱には及ぶまじ。今は斯かる身となれば、自害せんも心に任せず、口惜しき事共なりと、聲を上げて泣き悲しめば、兩王子も聞召し、御衣の袂を御顔に當て給ひ、御涙に咽び、大臣李芳薫も、清正を始め、郎黨共も、征東使が申す所、理至極せりとて、涙を流さぬはなかりける。斯かる哀れなる中にも、阿波伊兵衛・九鬼四郎兵衛二人は、さらぬ體にてありければ、傍の人に爪弾され、さればよ、あの兩人は、無道至極なる荒夷にて、物の哀れを知らざる故、終に涙を流す事なし。無慙無愧なる事かなと誹れば、又傍より左様にて宣ふぞ。此の兩人も、心中にはさこそ哀れに存すべけれども、狼眼といふ

物にて、涙は出でざる生付なり。總べて朝鮮在陣にも、哀れなる事三度ありて、清正も涙せきあへざりしに、彼の兩人は、少しも泣かず。さては人の申せし如く、狼眼にてありしやと、若き人々は怵へかね、笑はぬ者はなかりける。去程に、十月十二日に、清正は兩王子竝に后宮女官侍女諸大臣、征東使を始め、二百餘人を警固して、王城近き橘州へ歸著し、蓮下といふ所に宿陣せり。斯かる所に、漢南大將梅天といふ者、一萬餘にて、梁養山に山取して、外に一萬の勢を以て、清正が歸陣の道を、遮つて陣を取り、待ち懸くる旨、聞えければ、清正が軍勢共、長旅には疲れたり、所々の軍に手負は多し。如何せんとありし所に、清正、少しも痿まず、明朝の合戦には、吾等旗本にて、先手をすべし。横鍵は、吉村吉左衛門・出田宮内少輔・森本儀太夫仕るべし。二番備は、加藤清兵衛・山口惣右衛門・加藤美作守・長尾安右衛門・片岡右馬助・庄林隼人佐、三陣は小代下總守・佐々平左衛門、其の外は、兩王子を警固仕るべしと、委細に軍法を定めける所に、吉村吉右衛門進み出で、明日の御先を御自身なさるべしとの儀、尤には存候へども、昔より大將軍の荒あらかごなし、承りたる事もなく

候。其の上、輕々しき働あつて、若し討たれ給ふならば、日本の御弱り、旁以て然るべからず。先手の内に加はり給ひ、御下知はなされ候とも、必ず粗忽の御振舞は、勿體なき事どもなり。明日の先手、吾等に仰付けられ候へ。さなく候はば、軍神八幡大菩薩も御照覽候へ。只今腹搔き切り、御前にて骸を曝すべしと、思ひ切つたる有様なり。清正、輿を醒し、此の上は是非に及ばず、志村、先手を仕るべし。去り乍ら小勢なれば、肥前守を加ふべしとて、夜中に備を分け定め、人馬に兵糧支度させ、明くれば十月二十日の辰の刻、梁養山の道筋へ向つて、橘州指して押出す。案の如く漢南の梅天は、二萬餘を引率し、一萬をば山下へ下し、援兵の爲に控へさせ、孟武伯といふ者に、一萬を付けつゝ、道筋に立て置きたり。孟武伯は、一萬を二隊に頒ち、旗を振り、半弓を千張程先立て、射懸けさせ、馬の鼻を一面に竝べて、足も亂さず懸り來る。主計頭先手吉村が一備、何れも馬より下り立ちて、鎧を持ち折敷き、鐵炮を手先へ張出し、一同に放ち懸る。矢、鐵炮は、雨の降る如く、敵味方の喚く聲は、天地も裂くるかと思えける。半時計り射合ひしに、漢南の孟武伯が備、吉村が鐵

炮に打立てられ、引色に見えし所を、清正は、吉村備に居りければ、團扇を振り、自ら真先に乗出し、鎧を入れよくと、下知をなす。先手吉村一備、面も振らず、真丸になり、一度に鎧を入れたりける。南兵一萬餘、暫く支へ戦ふと雖も、吉村が兵共、四武の陣を魚鱗に合せ、百戦の力を出し、黒煙を踏立て戦ひければ、南兵、終に打負けて、一度に瞳とぞ逃げたりける。餘すな討止めよと、清正、大音揚げて旬れば、勝ち誇りたる主計が兵、鬨を作り追懸けく行く中にも、吉村吉左衛門は、漢南人山春といふ者と渡り合ひ、馬上より組合ひ落ちし所を、阿岐伊兵衛、透間なく落ち合ひ、山春が首を取る。然る所に、梅天が二萬騎、山の尾より打下し、大鼓を打つて懸り来る。横合に控へたる山岡肥前・森本儀太夫・出田宮内、之を見て、すわく敵はかゝるは、近々と引受けて、一度に突いて懸るべしと、打物を鎧脇に立て、弓鐵炮を手先へ出し、鬨を作つて射立て打立て、鎧衾を作つて、横合に突いて懸る。二の切に控へたる加藤清兵衛・庄林・山口・長尾、なじかは怵ふべき。混甲に二千餘、一度に鞆しころを傾けて、手強く鎧を入れたりければ、梅天が二萬餘、手を碎きて防ぎ戦へども、

終に追ひ立てられ、鎧下にて數輩討たれ、右往左往に見えけるを、吉村吉左衛門、備を立直し揉合ひ、梅天が二萬餘を梁養山へ追ひ上げたり。主計頭が勢、喚き叫んで攻上げんと仕たりける。清正、堅く制し、荒手の加藤與左衛門備と、天野助左衛門・原田片岡備を、殿に立てさせ、静々と物離して、橘州城へ取込み、其の夜は爰に一宿しける處に、長橋府に残り留まりし鍋島加賀守直茂・相良宮内少輔、一萬五千にて、清正迎として、橘州まで二十日以前に出張したりしが、之を聞いて喜悅の眉を開き、清正陣へ參陣し、互に手を取組み、先づ涙を流しける。鍋島申しけるは、御身、長橋を立ち給ひしより、四箇月が間は、行方も知れず、音信も聞かず。扱は討たれ給ひたるかと、明暮是のみ案じ煩ひし處に、法園谷にて王子擒にし給ひし旨、日本へ御註進の使を承り、誠に安堵仕り候ひき。今度彼の表の御粉骨、言語の及ぶ所に非ず。誠に仙家に入りし王質が昔も、今更思ひ出され候と、悦ぶ事限りなし。清正も顔色打解けて、加賀守・宮内少輔にも、兩王子を拜謁させ、兀良哈表の勳、昨日梁養山にて、梅天と一戦せし始終の次第を語りければ、鍋島・相良も、舌を振へり。鍋島

申しけるは、御身を入れ参らすべき爲め、橋州の内に出城を構へ置き候間、是へ今居住し給へとありしに、清正も悦びつゝ、此の砦へ入城し、十日計り休息して、長途の辛苦を慰めけり。扱橋州は、富貴自由なる所にて、洛陽にも劣らざる所なればとて、此の處を端城とし、蝗秉迄十三日路は、清正所領として、年貢は運送仕るべく、其の外は莫大なれば、打捨つべしと相議し、所々に人數を分け置く。先づ橋州城には、加藤清兵衛片岡右馬助・加藤傳藏・永野三郎左衛門・原田五郎右衛門・天野助左衛門・山口與惣右衛門、七人を大將にて、千五百人入れ置きたり。藏床には、近藤四郎右衛門・岡田善右衛門・佐々平左衛門、五百餘にて入れ置き、銀山には加藤與左衛門・出田宮内少輔・井上大九郎五百餘、律青には小代下總守・大脇次郎右衛門・長尾安右衛門並に組の弓三十張、鳳井には、吉村吉左衛門・堤權右衛門、坂下には多田茂左衛門籠め置き、同十一月朔日に、鍋島・相良打連れ、清正は、橋州を立ち、同十日、鍋島居城長橋に付き、爰にて鍋島一萬五千にて残し置きければ、加賀守も勢を分ち、鍋島平五郎・成隅十右衛門・龍造寺七郎右衛門を、三日路の間に配り置き、龍造寺政家をも、二

清正蝗秉
人數配置

箇所要害を構へ入れ置き、加賀守は、前々の通り長橋に在城す。清正は、相良宮内少輔相伴ひ、同十三日に、蝗秉に著く。此の地王城を去る事十三日路、所も宜しく地の利全き所なれば、城郭堅固に構へつゝ、清正爰に在城す。蝗秉より四十八里、江原道の境保浦といふ所に、坂川忠兵衛和田備中・大木土佐守に、小田原半助・木戸清助を副へ置きつゝ、明くる文祿二年二月下旬迄、清正は、蝗秉に在城して、日本の御下知を待ち居たり。扱も清正、小軍を以て、大敵を破り、朝鮮王城より五千里の道を攻入り、兩王子を生捕り、兀良哈の都を放火し、道中數度の合戦、一度の越度なく、武勇を震ひ、名譽を播く事、人間の業に非ず。只鬼神の所業たるべしとて、舌を振ひ、恐惶かぬはなかりける。傳へ聞く、漢の韓信は刑徒の中より選出され、眞王の印を得て、齊國を打治め、唐の李勣は、群盜より起りて、唐朝の良將となる。是れ皆、高祖の眼力、太宗の聰明にて、疑心なかりしによりき。吾朝の清正は、尾州の孤獨たりと雖も、名青雲九天の上に揚り、譽を紫宸三台の稱歎に傳へたり。誠に秀吉公の方寸の勇才、天地に溢れし故に、取立て給ふ。諸大將、何れも愚なるは無かりしと、今

の世迄も、感歎せぬはなかりける。

黒田長政先勢狼川軍

小西攝津守行長は、帝王の行方を尋ね、大明國の境鴨綠江迄攻入り、近邊を尋ね捜し、若し帝王を擒へ得ずば、江を渡り、直に大明へ働くべしとて、後の同勢の續き來るを待つ。黒田甲斐守長政は、大友義統を先に押立て、小西が後を追うて、押入りけるが、小西は、鴨綠江に陣取る由、聞えければ、大友は平壤に屯し、黒田長政は葛原に陣を居る、互に援勢をなす。長政が先勢栗山備後守利安・後藤又兵衛正次・衣笠因幡守、其の勢二千七百餘にて、狼川といふ處に陣を張り、大友との絆をなして、急に臨む時は、助け合ふべしと約束せり。其頃朝鮮國王は、義州に御坐しけるが、忠清道の節度使李時言を大將にて、平安・咸鏡兩道の兵を屬し、都合四萬五千餘にて打つて出で、狼川に屯したる黒田長政が先勢を、襲取らんとす。六月二日の夜に川を越え、明くる三日の曙に、老翁山を打越えて、長政が先勢の陣取りたる狼川指して

長政先勢
狼川出陣

押寄する。長政が鋒將栗山・後藤は、之をば夢にも知らずしてありける所に、遠見の者走り來つて、敵こそ寄せ來り候へと、匂り呼ばはる。是に驚いて見渡せば、爰を去る事二里計りにて、李時言が勢四五萬もあらんと覺えて、段々に備へて、只今懸らん様の氣色なり。長政が先勢、是に驚いて、周章騒動ぎ、評定區々なり。然れども味方の勢、纔に二千七百餘にて、四方の大敵に、懸合ふべき様なし。長政へ注意せよとて、黒田惣右衛門・毛利但馬守・後藤又兵衛・衣笠因幡守申し合せ、連狀を以て相調へ、早道五人勝り出し、草臥れ候者は残り、五調がんぢやうなる者計り、此の狀を持參せよとて、狀を書認め、連判を居うる所に、栗山備後守利安は、中にも大剛の侍大將なれば、連狀の場へは出でず、備配・合戰の次第下知して居ける所へ、註進狀相調へ候。備後守、判取に持ち來る。備後守披見するに、其の狀に曰、

急度致註進候。敵夜中に川を越え、此方陣所へ取懸申候間、早々御人數被出御後詰可被遊候。恐々謹言。

と書きたり。栗山いひけるは、文言悪しく候間、書き直され候へ。さ候は、判形仕

るべしとて、彼の状を返しければ、後藤・衣笠申し越しけるは、何れも談合の上にて、相極め候間、此方にて、書き直すに及ばず。其の許にて、いか様にも書き直され候へとありしかば、栗山、床几に腰を懸けながら、筆を取つて書き直す。其詞に曰、急度申上候。敵夜中に川を越し、此方へ取懸申候。於手前は、可御心安候。恐惶謹言。

と書き止め、栗山・後藤・毛利・衣笠等連判して、葛原へ遣しけり。栗山・後藤等、僅に二千七百餘にて、李時言が四萬餘に駈け向ふ。萬一つも對揚すべき勢に非れば、皆討死と思ひ切りてければ、中々涼しくぞ覺えける。栗山、下知して曰、敵向ふの大河を越し候と見ば、鐵炮を一放つ、打懸け、其儘太刀打に仕れ。とても遁れぬ處ぞ、心を静め、討死せよと、士卒を勵まし、待懸けたり。李時言が四萬餘騎、栗山・後藤を、小勢と、見課せて、なじかは口るべき。前後の手分もせず、吾先々と川へ乗込み、流を偃ぎて、渡り來る。栗山・後藤・毛利・衣笠・黒田等、僅に三千計り、只一手に眞丸に立て備へ、敵の勢半分、川を越え來る所を、一度に瞳と突いて懸る。李時言が

大軍も、鞆しるを傾け、鎧よろいを打合せ、黒煙を踏立て、挑戦ふ。栗山備後・後藤又兵衛・黒田・衣笠・毛利以下の兵も、而も振らず駈入り、東西を拂ひ南北へ追廻し、駈抜け駈入り、交合ひ、彼に露れ此に隠れ、火を散じてぞ戦ひける。聚散離合の有様は、須臾に變化して、前にあるかとするれば、忽焉として後にあり、味方かと思へば、屹として敵なり。十方に分身して、萬卒に同じく相當りしかば、李時言が大軍も、馬の足を立て兼ねたり。射違ふ矢・鐵炮は、夕立の軒端を、過ぐる音よりも、猶ほ繁く、打合ふ鎧が鳴る音は、空に答ふる山彦の、鳴り止む隙はなかりける。李時言が兵共、武者立を見て、能き敵なりと思ひければ、取籠めて、是を討たんとしけれども、栗山備後・後藤又兵衛、東より西へ破つて通り、北より南へ追靡け、能き敵と見るをば、馳せ竝んで、組んで落ちては、首を取り、合はぬ敵と思ふをば、一太刀打つて駈散らす。栗山と後藤と、三所にあつて、八方に分る。其心偏に大將に渡り合ひ、組んで討たんと思ふにあり。黒田惣右衛門・衣笠因幡・毛利但馬守等、手先を捲り、弓手・妻手に駈分れ、電光の激する如く、七八度が程當りしかば、李時言が大軍、魚鱗にも進み得ず、虎鞆に

も集まらず、此に駈散らされ、彼に辟易して、已に引色になりしを、栗山・後藤・黒田・衣笠等、又喚きて駈入りしかば、李時言が大軍打負けて、大河へ追ひ浸され、浮きぬ沈みぬ流れ行く。偶々助かる者も、馬・物具を捨て、主・郎等を知らず、親を捨て子を顧みず、吾先々と落ち行きしかば、討たる者、數を知らず。栗山・後藤、勝つに乗つて、関を作り駈けたり。衣笠・黒田・毛利が兵共、前を駈立て、左右を送り攻めければ、李時言も、返合はすに及ばず、辛き命助かつて、北げ延びけり。栗山指揮を振つて、大敵の逃げ行くをば、長追すべからず。必ず越度を取るべしと、馬を立て、乗入れく下知して、追ひ行く勢を、止めければ流石物馴れたる兵なれば、北ぐる敵を追ひ捨て、颯と物離して、本の陣へ引取りぬ。今日の合戦、大敵といひ、異國といひ、續く同勢はなし、萬死一生の大事たりしを、栗山・後藤・衣笠・毛利・黒田、自ら手を碎き相働き、大敵に打勝つ事、比類なき手柄なりと、稱歎せぬはなかりける。栗山・備後も、左の高股・右の小洞先・内甲四箇所手負ひたり。後藤又兵衛も、射向の腕・太刀懸のはづれ、三箇所迄手負ひたり。其の外、軍兵共手負ひ討死數多なり。長政は、葛原に有

栗山後藤
等の高名

りしが、註進を聞くと均しく、其の勢一萬五千にて、駈付けしかども、早や合戦事過ぎ、味方打勝つて、本の陣へ引取りし所へ著陣し、喜悅の眉を開き、勝利の段限りなく感じつゝ、長政、直に栗山備後守、小屋へ行きて、栗山に向つて、何とて卒爾に、合戦を始め候やと、申されければ、栗山は數箇所手負ひ、俵に寄懸りありしが、眼を怒らし、主の長政をはつたと睨み、敵が取懸り候に付、合戦仕り候と、荒らかに返答し、餘りに不興したる體なりけるに、長政そこにて涙を流し、左様に腹立仕る所尤なれども、去り乍ら、卒爾の合戦仕出し、其方などを討たせては、長政が男を立て候事も成らず。まして生甲斐もなければ、先の如くにはいひたるなり。四萬に餘る大敵を、二千餘の小勢にて、打勝ちたる武勇の刃金、今に始めぬ事ながら、比類なき手柄なり。必ず長政が先の言を、心にはかくるなとて、手負どもの小屋毎を、一偏に見廻り、夫々に褒美し、又栗山が小屋へ歸られし所に、黒田惣右衛門申しけるは、一刻も急ぎ註進申上げたく候所に、註進狀の文言を、吟味致し候に付、延引に罷成り候といひけるに、栗山聲をいらゝげ、其の文言は、此の備後が吟味仕り候ぞ。其の

故は、註進の状とは存せず、只書置の遺言状と、存じ候に付、念を入れては候へ。其の仔細、別の儀に非ず、四萬に餘る大敵へ、吾等二千の人数にて、只今合戦に及び候に、早々御人数出さるべしと、申上げ候ても、此方より御陣所葛原は、九里の道を行き、御人数出され、又九里の道を、御駈付候へば、行還十八里の道にて、何の手筈に合ひ候はんや。定て打負くるは必定なり。去れども討死したる後にても、長政先手の者共、随分手を碎き、相働き候とは見候へども、大敵に僅の小勢なれば、力に及ばず、負くる者にて候はんと、取沙汰候は、將軍の御前、長政の御爲め、悪しかるまじと存じたれば、申上ぐる紙面にも、手前に於ては、御心安かるべしとは、書直し候なり。只今、敵に取付き、合戦に及び候期に、十八里の行還の道を阻て、君の御後卷何の手筈に合ひ候はんや。とても死ぬべき命を、加勢頼むと人にいはれんより、只一途に死を極め、右の如く申上げ候なりと、少しも残らず申しければ、長政を始め、之を聞ける兵共、皆感涙を流しける。今日、栗山が家人山本甚太夫・津田才藏・栗山甚太郎・池田久兵衛・井相八郎兵衛・竹井何左衛門・加弓彌左衛門・安田安曇・日野・小林

追田・犬場等、手柄を致し、何れも手負ひぬ。後藤又兵衛が手にも、古澤・金馬以下、高名を抽でしかば、夫々に褒美を加へられ、今日の働、諸手上下共に、手を碎き、力を出しける故に、四萬に餘る大敵に、一戦にて切勝ちけるとて、稱歎せぬはなかりける。

日本勢重ねて朝鮮に入る 附 伊達政宗船軍
井小早川隆景晋州合戦

去程に、朝鮮都表にては、小西攝津守行長・黒田甲斐守長政・大友豊後守義統は、大明國へ働くべしとて、平安道へ押入り、加藤主計頭清正は、威鏡指して押込みつゝ、其の行方の使もなし。残る軍勢共は、王城に在つて、重ねて日本の加勢渡海するを待ち居たり。當年四月中旬、小西行長は、東大門より攻入り、加藤清正は、南大門より亂れ入りしかば、兩人の軍功、諸將の上に冠たり。中にも清正は、仁惠深き大將にて、都表在陣の間、威猛を顯すと雖も、民屋に煩もなさず。萬事に禮を厚くし、百姓共を撫でしかば、近國遠境も、其の勢に服せずといふ事なかりき。清正、威鏡道

日本勢重ねて朝鮮に出陣

へ押込みし後、日本勢後より都に入り、朝鮮帝王、先祖代々の墓を發き破りしかば、八箇道の諸人、愁歎せずといふ事なし。去る程に、日本名護屋にては、秀吉公朝鮮國已に破る、由聞召し、當三月相渡す所の日本勢、二十萬ありと雖も、定めて大軍にて來るべければ、若し難儀なる事もあるべしとの仰に依りて、重ねて六萬餘を遣されける。王城の制法の爲め、三奉行三成・長盛・吉隆をも差渡さる。即ち三奉行は、朝鮮表在陣の諸大將へ、下さる御朱印を請取る。其の詞に曰、

人數押は、當春如被仰出也。

右先驅の儀は、三組の者一日代に、被仰出候間、可成其意候。其次の備は、如書立次第々々、無油斷相働、大明國可成程可申付候。猶以渡海の人數、追々可相詰旨、被仰出候。皆々共多勢にて、大明長袖の國へ、先驅仕候間、無御心許も、不被思召候。早速可申付事、肝要に候。石田治部少輔三成・増田右衛門尉長盛・大谷刑部少輔吉隆、可申候也。

文祿元年壬辰六月三日 秀 吉朱印

とぞ書かれける。今度、渡海の人數總大將は、備前宰相秀家なり。是は當四月に、高麗へ渡られ、釜山海へ在城し給ふ故、此の人を大將軍にて、王城へ入るべしとの御定なれば、六月三日に、名護屋を打立ちける。人々には、増田右衛門尉長盛・石田治部少輔三成・大谷刑部少輔吉隆・前野但馬守長康・加藤遠江守・淺野左京大夫幸長・宮部兵部少輔・南條左衛門尉・木下備中守・垣屋隱岐守・齋村左兵衛尉・明石左近・別所豊後守・中川右衛門大夫秀政・郡上侍從・一柳右近大夫・竹中源助・谷出羽守・服部采女正・石川備後守・池田三左衛門尉輝政・細川備中守忠興・堀左衛門督秀治・木村常陸介・小野木縫殿助・牧村兵部大輔・岡本下野守・糟谷内膳・片桐市正直盛・同主膳正・高田豊後守・藤懸參河守・太田飛驒守・新庄新三郎・早川主馬頭・毛利兵部丞・龜井武藏守、都合其の勢六萬餘、六月三日に名護屋浦より出で、順風に帆を上げしかば、追手いと快く吹出で、同九日に釜山浦へ十里阻てたる孟津の沖を過ぎ、彼の浦指して走りける。斯かりける處に、朝鮮の舟師に、元均といふ兵、番船七八百艘にて、閑山島に控へたり。日本淺野彈正長吉も、別して御下知を承り、後より渡海仕りしかば、子息左京大